

ハーレイオン

〜交差する運命と魔女の畏へ

そこには、二本の線があった。

近づくことも離れることもなく、常に一定の距離を保ったまま伸びる直線。

周りは蛇行する線でいっぱいだというのに、その二本だけは決して揺るがなかった。

寄り添うように。

それが幸せであるかのように。

.....許せなくて、片方を爪で弾いた。

愛しさと、憎しみをこめて。

すると平行であった線は崩れ、急速に近づき、そして――交わる。

一瞬の邂逅を終えたあとはただ、離れてゆくだけ。

たくさんの蛇の群れに、溺れてゆくだけ。

(もう二度と、交わらない)

もう二度と。

こらえきれない、笑い声が響いた。

僕がこの鐘を鳴らすのは、これで二度目だ。

国がなにか緊急事態にみまわれたとき、それを国民に知らせるため用意された城の鐘。一度目に鳴らしたのは、そんなことも知らなかった幼い頃のいたずらだった。

そして――

「リノソトスさま、それはあなたのおもちゃではないのですよ？」

二度目の鐘を鳴らしつづける僕の耳に、無遠慮に入りこんでくる声。

やっと手をとめることができた僕は、静かに綱から手を放すと。

「こんな日でも、やっぱり厭味を言うんだね」

厭味を返しながら、そちらを振り返る。

そこには、不機嫌であることを隠そうともしないローノアードの顔があった。常に父のそばにいて、子どもである僕よりもはるかに長い時間、父からいろいろなものを学んできたローノ。いつもは垂らしたままの長い金髪も今日ばかりは結わえ、死を悼むための格好をしていた。

ローノはひとつ、あからさまなため息を吐くと。

「あなたこそ、こんな日でも泣かないのですね」

泣き虫だった僕を、またからかう。

さすがに少し腹が立って、僕はもう一度、今度は思い切り鐘を鳴らしてやった。

両手を耳にあて、眉間のしわを深くするローノに。

「だって僕のかわりに、この鐘が泣いてくれるもの！」

鐘の音と同じくらい大きな声で叫んでやると、そこから離れ空に近づく。

そう、ここは細く高い塔の最上階。人が落ちないようにと設置されている手すりのそばまでいけば、街全体を見おろすことができた。僕はその景色をととても気に入っていて、城と直結しているこの塔によく遊びにきていたのだった。

(――でも、ここに来るのもこれが最後かもしれないな)

かなしみに静まり返っている街を見おろし、考える。

だって来れば嫌でも思い出す、この鐘の音。

もう二度と会えない父――この国の、王。

「リノソトスさま、危ないですからあまりそちらに行かないでください」

感傷にひたる僕を、冷静な声で呼びとめるローノはいつも、僕の感情を刺激する。

「そうやって、いつまで子ども扱いするつもり!？」

振り返りながら睨んでみても。

「これは子ども扱いではありません。ごくあたりまえの心配です」

その反応があまりにも、いつもと変わらないから。

「どうしてそんなに落ち着いていられるんだよっ？ まさか、ローノが殺したのか!？」

病死であるとわかっていても、訊いてしまった。

それでもローノは、表情ひとつ変えないまま。

「あなたがそう思いたいのなら、思えばいい。私を憎みたいのなら、憎めばいい。ただひとつ、そこから身を投げるようなことだけは、やめてください」

「そうやってまたごまかすの？ 僕にはなにも教えず、自分だけでなんとかしようって!？」

ローノの言葉が冷ややかであればあるほど、僕は自分の感情を抑えられない。

そんな僕をローノもわかっているのか、またひとつ息を吐くとためらいなく背を向けた。

「ローノっ！」

「――葬儀に参列していたみなさんは、もう帰られましたよ。あとでお礼に行きましょう」

こちらに顔を向けないままそれだけ告げると、塔の内側に戻ろうとする。

背中が、遠ざかる。

黙って見ていたら、僕も少しだけ落ち着いた。

「……ねえ、ローノ」

呼んでも足をとめないローノに、勝手に続ける。

「ほんとにもう、神さまはいないんだね」

いたらきっと、父を救ってくれた。僕を、この行き場のないさみしさから解放してくれた。

(この国を救ってくれた！)

そんな都合のいいことばかり考える僕を、当然見透かしているのだろうローノは。

「そうですね」

応え、一瞬だけ立ちどまると。

「いるのは、なんの役にも立たない〈魔女〉だけです」

「ローノっ!!」

思い切り怒気を含んだ僕の声を見捨て、今度こそローノは塔をおりていった。

僕の想いを無視して。

(僕が、魔女を好きなこと知ってるくせに)

よく平気であんなことが言える。

下唇を噛んだものの、追いかけるような気力はなくて。

僕は仕方なく視線を戻すと、再び街を見おろした。喪に服した街は闇色のベールをまとっているようだけれど、明日になればそれも、たやすく風に飛んでゆく。

昨日も今日も明日も。

誰が死んでも、誰が生きても。

無情に世界が流れてゆくのはきっと、ここにはもう、神がないから。

それはかつて、傲慢すぎた人間から感情を取りあげたとき、神自身はその集めた感情に耐えきれず、身を滅ぼしてしまったゆえなのだといわれている。

見くびっていたから。

自分が生み出した魂だ、自分を超えるはずはない、と。

神もまた、傲慢であったから。

もう必要ないと、世界から追放されたのだ。

そしてあとに残ったものが、感情を持たない人間と。

ローノが「役に立たない」と吐き捨てた、四人の〈魔女〉だった。

その魔女たちがどこからやってきたのかは、まったく知られていない。ただはるか昔からこの大陸に存在していて、人間が感情を奪われたときも魔女たちは無事だった。

感情を失ったまま生きる人々を目にした魔女たちはやがて、ひとりひとつずつ、人間に感情を分け与える。その結果生まれたのが、喜怒哀楽それぞれの欠落した魔女だ。

なぜ魔女たちがそんなことをしたのか、本当のところはやはり誰も知らない。そして誰も、魔女たちに感謝しない。それは人間が再び傲慢さを手に入れたからではなくて――魔女たちの主食が、人間であったから。

(魔女が人間に感情を与えたのは、自分たちが楽しむためだ)

喰われるときの恐怖に歪んだ顔。

助けを乞うときの叫び。

一瞬の恍惚、そのあとの絶望。

魔女がそれを見たいからだと、人間は理解した。

でも――僕にはそれが、信じられなかった。

ローノの発言を、誰よりも否定したかった。

「僕は……僕は魔女が好きだよ！」

さっきの言葉を、魔女は聞いていただろう。

そう思ったから、空に向かって告白した。

僕はいつも、魔女の存在をそばに感じていたのだ。それは僕の勝手な思いこみであったかもしれないけれど、僕にとっては生きるために必要なことだった。

なによりも。

「愛しているんだ――」

その続きを、一度飲みこんでから。

「――だから、助けてっ！」

恥ずかしさも全部吐き捨てて、僕は叫んだ。

(だってローノには頼れないんだ)

そうしたらあとに残るものは。

神の消えたこの世界みたいに、僕の心にだって魔女しか残らない。

下から強く吹きつける風に負けないよう、僕は力いっぱい想いを投げ飛ばす。

「自信がないんだよ。だって父さんは、僕にはなにも教えてくれなかった。なにも選ばせてくれなかった！」

王である父は、結局その口を堅く閉ざしたまま死んでしまった。長く病にふせったままでも、立派に責務を果たしていた彼は。この国すべての人々に信頼された、比類なき王だったのに。

(でも、それを継ぐ僕は?)

武器を使いこなすどころか、使える武器さえない。丸腰の僕に、一体なにができる? さっきみたいにローノにからかわれてしまうほど、自分自身情けなく思ってしまうほど、僕は無知で。唯一知っていることといたら、他の人は決して信じない魔女のやさしさくらいしかない。

石の手すりに力をこめて、僕は空に身を乗り出した。

「お願い、助けて——〈喜びを失いし魔女〉、あなたは僕の味方でしょう？」

それは俗に〈喜の魔女〉と呼ばれる、人間に喜びという感情をすべて分け与えてしまった魔女のこと。口が悪くて意地悪で、自分のためにしか動かない。

(そう、噂されてきた魔女は)

それでも僕を、助けてくれた。

誘拐されそうになった僕を。

ひとり泣いていた僕を。

さみしさに押し潰されそうだった僕を。

(助けて、くれたから)

「……愛しているよ」

もう一度、今度は呟く。

今まで誰にも告げたことのなかった言葉を、精一杯の愛しさをこめて。

(誰にも——)

そう、もし母が生きていたなら、それを口にする機会があったのかもしれない。けれど母は十年前に亡くなってしまったし、僕以外の子どもはいなかった。

結果僕のそばにいたのは、頼れない——頼りたくないローノと。

そんなローノを選んだ、父。

父は僕には教えなかったことを、ローノには教えていたのだ。だからローノは、僕のかわりに国を動かすという。僕がまだ十五で、王になる資格がないから。十六になったら僕に譲ると言っているけれど、そうやって急に譲られたってうまくできるはずがない。

ローノは確かに優秀だ。まだ三十前だけこの国の誰よりも頭がまわると、みんなが認めていた。それでも驕ることなく、父の側近となったあとも勉強を欠かさなかった。腹の立つことに、街を歩けば女の子たちがこぞって振り返るような美青年でもある。

(でも……でも！)

僕だって事前に勉強させてもらえていたら、ちゃんとかわりを務めることができたかもしれない。だけど父は、試しもしないでローノを選んだ。いずれ継がねばならない僕ではなく。その先に待っている僕の苦勞なんて、考えてもくれなかったんだ。

父のことは、嫌いではない。

でも好きでもなかった。

僕が好きなのは——

「お願い〈喜の魔女〉、ここに来て！」

ねだる子どものように空へと両手を伸ばして、僕は呼びつづける。

(魔女はちゃんと、見ているはず)

この塔にいるときは特に、視線を感じていたから。下からは僕の姿など見えるはずもないのに、確かに僕を見ている誰かがいるのだ。

掲げた両手の隙間から、僕の国が見える。低い建物が等間隔に並んでいる、僕の宝箱。ここか

ら見るとこんなにもちいさいのに、どうして僕の手のひらでは支えきれないのだろう？

僕の心では。

――と。

「あっ……」

不意に誰かが、空に触れたままの僕の手を掴んだ。その事実を理解したときにはすでに、視界のなかに愛しい魔女がいた。

「来てくれたんだ……！」

右手で左手を、左手で右手を。しっかりと握りしめ、魔女は宙に浮かんでいる。黒すぎる長い髪の毛とドレスが、風に大きく揺れていた。血のように赤い唇で、にこり笑う。

瞬間、ぐいと手を引かれた。

「うわっ」

体勢が傾き、僕の手どころか身体まで宙に投げ出される。魔女は意外なほど強い力で僕を自分の胸もとまで引き寄せ――その豊満な胸を前に、僕は思わず目をつむった。

同時に訪れるのは、目蓋へのあたたかな感触。

やわらかな温度。

キスだ、と。

見えなくてもわかった。

だって僕は、魔女が大好きなんだ。

僕がああ鐘の音を〈聞く〉のも、今回で二度目のことだった。

それほど平和でのどかな小国――それが僕の国・シェロニアだ。

シェロニアは大陸のいちばん南に位置し、南はソルトヴァ海、北はファレスト山脈に封じられていた。さらには東をタフィレン、西をアテリスと、どちらもシェロニアの十倍ほどの国土を持つ大国に挟まれている。実はその二国はとても仲が悪く、いつ戦争が始まってもおかしくない状況だった。いつシェロニアに踏みこまれても――。

けれど不思議なことに、どちらの国もシェロニアにだけは手を出さなかった。ちょっとした諍いはいつもファレスト山脈の向こう側で起こり、シェロニアの平和は常に保たれていたのだ。

(それだけじゃない)

シェロニアには、その土地柄いい部分がたくさんある。

たとえば海での漁にしたって、シェロニアのすぐ南では複数の海流が交わっていて、そこがこのあたりで最も魚のよく獲れる場所になっていた。また山脈のふもとのほうでは、適度に降る雨のおかげで毎年農作物がよく取れるのだ。さらに山脈の中腹に行くと、家畜の放牧なども行われていて、ミルクや皮や肉にも困らない。シェロニアはちいさいながらも、自給自足をほぼ実現している数少ない国だった。

おまけに、山脈を越えるのも海を渡るのも大変なせいか、長いこと大陸中を騒がせている魔物たちがシェロニアを襲うということもなかった。つまりシェロニアは、真の平和を謳歌していたといえる。

そんなおいしい土地を黙って見ているなんておかしな話だけれど、タフィレンもアテリスも、決して手をつけようとはしなかった。

――それがまぎれもなく父のおかげであったのだと、僕が気づいたのはごく最近のこと。理由は簡単、〈他に考えられないから〉だ。

父は王でありながら、よくその二国に出かけていた。ちいさい頃の僕は、それをただ遊びに行っているものと勘違いして、無邪気に羨ましがっていたものだけど……今はちゃんとわかる。父はそれによって、きっと国を支えていたのだ。

そう、父を失った僕がこんなにも焦っているのは、そこに理由がある。城内での仕事はローノが代行するというのは、僕は不満だけど仕方がないとして、じゃあ城外での仕事はどうなる？これまでの平和が父のその行動の上に成り立っていたのだとしたら、結果はもう目に見えている。なにも知らない僕がしゃしゃり出ていったって、なんの意味もないだろう。

シェロニアは、消える。

僕はそれが嫌だった。だからあんなにも焦って、上手に呼吸もできないほど、追いつめられていたのだ。魔女を好きなものと同じくらい僕は、平和なこの国が大好きだったから。僕を取り囲む環境がどうであれ、そういう気持ちは確かにあって。いずれ指の隙間から零れ落ちるであろうたくさんの命を、なんとかしてくいとめたかった。

――魔女のキスは、それを叶えてくれるものだと、思っていた。

(それなのに……)

僕は今自分がおかれている状況に、少しも納得できなかった。

「一体どういうことなんだよっ!？」

目の前の壁に向かい、ひとり叫ぶ。

魔女から目蓋へのキスをもらったあと、僕が目を開くともうここにいたのだ。多分、僕がいたあの大陸のどこでもない場所。完全に隔離された空間。そんな場所ありえるはずがないと言いたくても、そう考えなければ理解できない現象が、先程から起こっている。

この空間は、まるで箱のなかにでもいるかのように真四角に区切られていて、上下左右の壁・床・天井のところ狭しと扉が並んでいるのだ。そして奇妙なことに、どの扉に入っても他のどれかの扉から出てくる。つまり、隣の空間に向かっているはずなのに、結果的にはこちらに戻ってきているという……説明していても頭が痛くなるような現象が、確かに起こっていた。

僕が、「ここはさっきと同じ場所だ」と確信できるのだから、ちゃんとした理由がある。

「うるさい」

背中からかけられた声に、僕は勢いよく振り返った。

そう、僕はひとりではないのだ。僕と同じように、この空間に取り残されている人がいる。けれどその人は僕みたいに暴れたり叫んだりせずに、なにかを悟ったかのようにただ座りつづけていた。

常に、僕からいちばん遠い場所で。

対角線上の角で。

(だから僕は、疑っていた)

「――ねえ、いい加減、僕をここから出してよ。閉じこめているのはあなたでしょう？　魔女が僕にキスをしたから、嫉妬して閉じこめているんでしょ!？」

この落ち着きぐあいは、ここから出る方法を知っているからじゃないか。それなら僕を閉じこめているのもこの人なんじゃないか。

そう考える僕をバカにするように、その人は僕に背を向けたまま、感情のこもらない声で言い捨てる。

「うるさい。黙れ。俺を見るな。出ていきたいなら勝手に出ていけ」

言葉の羅列。それ以上でもそれ以下でもない。ずっとこんな調子で、二言目には「俺を見るな」と言ってくる。僕の場所からはどうせ背中しか見えないのに。

僕は全部の言葉を無視して、もう一度叫んだ。

「出ていったってここに戻ってくるだけじゃないか！　あなたこそ、僕がうるさいなら出ていけばいい。あなたは出る方法を知っているんでしょ!？」

「……………」

背中は何にも答えない。けれどきつと、それは肯定だ。違うなら違うと言えればいいのだから。

だんだん腹が立ってきて、僕は初めて自分からその人に近づいた。素早く隙間をつめて、ぐるり前へとまわりこむ。わざと顔を覗きこむようにすると、予想外なことに思っていたよりも若い顔がそこにはあった。背中や声の調子から、おじさんと呼べるくらいの年齢だろうと予想してい

たけれど、ヒゲのせいで少々老けて見えるものの、きっとローノと同じくらいだ。

と、僕が驚いている隙に。

「――！ 見るなと言っているだろう!？」

また予想外に、思い切り頬を殴られた。その衝撃で空間の端まで飛ばされて、偽物の扉たちにぶつかる。

それから、下の扉に。

「……っ」

ひどく痛かった。

身体以上に、心が。

「そんなに嫌なら、一緒にいなきゃいいのに!!」

ありったけの声で叫んだ。

ただでさえ不安で心細いのに、この仕打ち。情けないけれど、僕はあふれてくるものをとめられなかった。身体を横たえたまま、熱を帯びた頬に手をあてて。

殴られた熱さじゃない、目蓋のあたたかさを思い出す。

(――会いたい)

魔女に会いたいよ。

会ってまた、キスが欲しい。

抱きしめたい。

心の準備はもう、できている。

(なのにどうして、この身体は……)

囚われている。

この空間では、身体だけが異質なのだ。

想いはこんなにも簡単に、すり抜けてゆくのに――。

殴られた衝撃のせいもあるのか、僕はそのまま眠りについてしまった。

それから一体何日経ったのだろう。

この空間には朝も夜もなく、時間の経過を感じ取ることは難しかった。

おなかでもすけば少しはわかると思うけれど、不思議なことにここへ来てからそれを感じたことがない。

だから食事の必要もない。

――そういえば、排泄もしていない。

ただ眠くなったら寝て、目が覚めたら起きる。

それだけをくり返していた。

会話もほとんどなかった。

互いに壁を向いて、相変わらず対角線上のいちばん遠い位置にいた。

本当は、なにか話してほしかった。

いや、ただ僕の話聞いてくれるだけでもよかったのだ。

でも僕がなにかを告げると、すぐ「うるさい」という言葉が飛んできて、僕は口を嚙むしかなくなる。

そのたびに僕は「そんなに嫌なら、一緒にいなきゃいい」と同じセリフを吐き、不貞寝したのだった。

――けれど、さすがに寝ることにも飽きてきた。

横になってみたって、そう簡単に意識を手放すことはできない。

「……………」

ちらりと、僕は身をよじり横目で男の背中を盗み見る。いくら見るなと言われたって、気になるのだから仕方がない。

(見ていなければ、不安なんだ)

僕は何度も「一緒にいなきゃいい」と言ったけれど、きっと本当にこの人がいなくなってしまうたら、正気でなどいられないだろう。こんな狭い空間にひとりきりで、長いこと耐えられる自信がない。そもそも僕は、本当は人一倍さみしがり屋なのだ。それを自覚しているからこそ、何度怒鳴られても男の存在をこの目で確認することをやめなかった。

やめられなかった。

(この人が外へ出るときは、同時に僕も出るときでなきゃダメだ)

いずれそのときが来ても見逃さないように、それなりに気を張っている必要があった。

男は僕が眠っていると思いこんでいるのか、僕とは逆に気を緩めているようで。

「……一体どうしろって、言うんだよ……」

横になったまま、ぼつり呟いた。

それは初めてのことだった。

(……なに?)

もしここがこんなに静かな場所でなかったなら。

閉鎖された空間でなかったなら。

決して届かなかっただろう、本当にちいさな声。

そしてその言葉は。

(〈どうしろ〉って……?)

この人も、戸惑っているのか。

これはこの人の意思ではないのか。

無防備に発せられた男の言葉に、僕はまたわからなくなった。

「――あなたも、閉じこめられているの？」

ここへ来てから今まで、一度も考えたことのなかった疑問。それを口にしてから、僕は身体を起こし男のほうへと向けた。

僕に呟きを聞かれていたと悟ったのであろう男は、面倒そうにしながらも僕と同じように身体を起こす。

男はばつの悪そうな横顔しか見せてくれなかったけれど、怒鳴られるのが嫌な僕はすぐに視線を外した。

するとその耳に、男の舌打ちがすべりこんできて。

「答えられない」

とだけ、答えた。男はそれ以上続けない。

「なんで!？」

僕は思わず、せっかく外した視線を戻してしまった。

(どうして……)

僕を閉じこめているのは自分ではないと。本当にそうならば言ってくれれば、僕がこの人に対し怒ることはないのに。「答えられない」なんて、否定でも肯定でもない言葉を、僕はどう受けとめればいい？

男の考えていることが、まったくわからなかった。

男がなにを見ているのか――

視線で男を責める僕。

男は一度だけ僕と視線をあわせると。

「そういう〈呪い〉を、かけられている」

またすぐに外した。

さまざまなものを。

男は言葉ひとつで、外してゆく。

でも僕が男を見ていることを知っても、いつものように怒鳴らなかった。

「――見るなって、言わないの？」

試しに自分から、訊いてみる。

「……………」

今までとは明らかに違う男の態度。

暑くもないはずなのに、額に浮かんだ汗。

そのまま見つづける僕に、男はやがて呟いた。

「――もう、諦めた」

「え……？」

男の手は、自らの心臓を抑えていた。そしてその手が強く握りしめられたとき、男の身体がどさりと前に倒れる。

「あっ!？」

近づいて、支えようとした。

けれどその前に、僕は気づいてしまう。

(どうして急に倒れたの?)

どうして僕に、「見るな」と言っていた?

訊かなくても、今ならわかるんだ。

僕は出した足を戻すと、くるり男に背を向けた。

「そういう、ことなの……？」

自然と、声が震える。

自分の目を、自分で覆った。

「あなたにかけられた〈呪い〉は、ひとつじゃないんだね――」

(僕がこの人を見つめたから)

この人は苦しんでいる。

それはきっと、男の心臓にかけられた呪い。

「答え、られない」

搾り出すような声で、男は応える。

(これも呪い)

答えられない、呪いだ。

「一体誰が……」

壁に向かって僕は、誰に告げるでもなく呟いた。

男の呪いと今の状況を考えればおそらく、男に呪いをかけた者と、こうして僕らを閉じこめている者は同一人物なのだろう。そう考える僕の後ろで、男が身体を起こしている気配がする。

(やっぱり……)

男は「答えられない」と言ったけれど、僕の予想は当たっているのだ。僕が長時間男を見つめさえしなければ、男が苦しむことはない。

ちらりと、振り返った。男がまだ少し苦しそうに胸を抑えていることを確認してから、また壁と向きあう。

「……おまえに言っても、信じないだろう」

「え？」

男が唐突に口をひらいた。それがどの言葉に対応しているのか、一瞬わからなかったけれど。

(一体誰が?)

自分で呟いた言葉を、思い出した。

そしてその先をも、悟る。

「僕が、信じないって……？」

これから男が発する言葉を、告げられる前から「信じない」とわかるくらい。僕が最初から、信用している人物。

(ひとりしか——いない)

先程とは違う震えが、僕を襲う。

「〈喜の魔女〉、なの——？」

僕を救ってくれた。

僕にキスをくれた。

僕を愛してくれた。

(僕に——)

魔女の笑う唇が、思い出される。

男は答えない。

きっとそういう呪いも、かけられているのだろう。

「なんで……だって魔女は、あんなにやさしいのに……」

魔女は僕の味方だ。僕を閉じこめるようなことはしない。

けれどそんな僕の想いを、男はたった一言で振り払う。

「やさしいもんか」

それは完全なる否定の言葉だった。——〈みんな〉と同じ。

「みんなはそう言う！ でも魔女は、僕を助けてくれたんだっ。他国の人間に、連れ去られそうになった僕を……！」

「……………」

あのときは、本当に怖かった。口と目を布で塞がれ、手足も縛られて、生きた心地がしなかった。馬の走る振動で激しく揺さぶられ、どうせならこのまま落ちて死んでしまいたいとさえ、思った。

そんなとき——魔女が現れた。

魔女が犯人たちになにをしたのか、目隠しをされていた僕にはわからなかったけれど。布の下でさらにきつく目をつむっていた僕に、魔女は「もういいんだよ」と、あのときも目蓋へのキスをくれた。

やさしいぬくもりだった。

早くに母を亡くして、そのあたたかさを覚えていなかった僕にとっては、初めての——
(その魔女が、どうして僕を閉じこめる?)

男が言ったことは本当だった。

こんなにも僕は、信じられない。

「……………」

「……………」

しばらく、静寂が続いた。

(一体なにを、考えているんだろう?)

振り返って表情を窺いたかったけれど、せっかく息も整ってきたのにとするとためらわれた。
そうして僕が迷っているうちに「ふう」と、男が息を吐くのが聞こえる。

「……？」

それが覚悟の息だったのだと、僕は次の言葉で知った。

「魔女は、腹が減っていたから」

最初はまた、意味がわからなかった。

「な、に……？」

「おまえを助けたんじゃない。腹が減っていたから、〈人間を捕まえた〉んだ。おまえを逃がしたわけでもない。子どもは不味いから喰いたくないと、前に言っていた」

「な……っ!？」

僕はもう、自分をとめられない。

「そんなこと、あるわけない！」

男につめ寄って、殴った。殴られた頬の痛みを、返すように。

「なんでそんなこと……言うんだよ!？」

僕からこぼれ落ちた水が、男の服を濡らす。

(どうして……!)

僕は殴りつづけた。男はなぜか抵抗しなかったから、体格差はかなりあるのに殴りつづけることができた。男がやがてぐったりと、動かなくなるまで。

「なんで、あなたは……僕を怒らせるようなことばかり言うんだ……っ」

手をとめた僕が、呟く。

(やっぱり僕が憎くて)

僕を閉じこめているのは――

なにもかもが、信じられない。

するとその隙を待っていたように、細めた目で僕を見あげた男が呟き返した。

「ほら、信じないだろう……？」

ゆっくりと、その目蓋が閉じられる。

「――!? ねえっ？」

気を失ったのだ。

その原因が、殴ったせいではなく見つめたせいなのだと。

僕が気づいたのはずいぶんと経ってからだった。

僕は昔から、自分を諦めてきた。

「どうしてちゃんとできないの？」

「お母さんがいないから？」

「そう言われるのは嫌だろう」

「きちんと勉強しなさい」

「どうして言うことを聞けないんだ」

「あの子には無理なのよ」

「期待なんか、しないほうがいい」

諦めさせる言葉ばかり、あびせられてきた。

国民にはやさしい父も、僕には冷たかった。

あたたかかったのは、魔女の腕のなかだけ。

(どうしてそれすら、信じさせてくれない?)

そのままに、しておいてくれないんだ。

今でも思い出す。

厨房の戸棚に隠れていた僕。

その隙間から、すべて見ていた。

「――忙しいところすまないが、リノソトスさまを見かけなかったか？」

お目つけ役の名も知らない男が、僕を捜していた。

「おや、またいなくなったんですか？ ひとりでかくれんぼでもしているんでしょうかねえ……

リノソトスさまにはほんと、困ったものです」

コックのひとりが、本当に困っている声音で返す。

「見つけたらすぐに連絡してくれ」

「わかりましたよ。がんばってくださいね、〈オニ〉」

コックの言葉に苦笑して、男は出ていった。

僕も、出ていこうと思った。出て脅かしてやろうと。

そもそも僕がそんな場所に隠れていたのは、いつも忙しそうに働いているコックたちを、笑わせてあげたかったから。楽しませて、あげたかったから。

今考えると、なんて幼稚なことを……と思うけれど。当時の僕はすでに自分を諦めていたのだ。だからせめて僕にできることを、やりたいと思っていた。

(でも僕は、出られなかった)

「こんな王子で、これからどうするんでしょうかねえ」

痛い言葉に、戸棚の隙間を閉じる。

「陛下のお身体がよくないっていうのに、遊んでばかりで次期王の自覚がないもの」

応えた女の声は、使用人だったのだろうか。

「一体なにを考えているのやら……」

「いくら期待をかけすぎてはいけないと言われてもね」

(――誰も、わかってくれない)

僕は。

どこにもいない。

心の隙間すら、閉じてしまった。

「……母さん……」

狭くちいさな暗がり、ひとり泣いた。

〈喜の魔女〉がくれた、やさしいキスを思い出して。

ひとり耐えた。

僕が明るい世界へと引っ張り出されたのは、その二日後のことだった――。

「――ごめん」

意識を取り戻した男と、僕は背中あわせに座っていた。

「だから僕は、魔女を疑いたくはないんだ。僕が厨房で発見されたのだから、魔女が厨房を荒らしたからだった。それでみんな、なにか盗まれたものはないかって、戸棚を全部調べて」

「それまで誰も、調べなかったのか？」

「うん。みんな一日で諦めたもの。おなかが減れば自分から出てくるだろうって、思っていたんだよ。出ていけなかった僕の気持ちなんて、みんな知らない。僕が――」

僕は一度言葉を切って、続きを口にしようか迷った。

「ん？ なんだ？」

男に促されて、やっと。

「魔女が僕を、盗んでいってくれればよかったのに」

「！」

「そんなふうにはさえ思っていたことを、誰も知らないんだ。僕の言葉を、聞こうとしてくれなかったから」

告白しながら、僕は僕自身、自分の考えに整理がついてきているのを感じていた。

(――そうだ)

僕は望んでいたんだ。

〈喜の魔女〉に縛られることを。

そばに在りつづけることを。

もし今の状況が、男の言うとおりの魔女の力によるものだとしたら――

(僕は喜ばなければ)

もうあんなつらい場所に、戻らなくてもいいんだ。

きっと僕なんかいなくても、ローノがうまくやってくれるだろう。

「ごめん、ね」

もう一度、詫びた。

殴ったこと。

見つめたこと。

僕は魔女を信じたい一心で、この人にひどい言葉ばかりあびせてしまった。

まだこの人の言葉が本当だと、決まったわけではないけれど。自分の気持ちと状況を整理してみても、今は、信じたいと思っていた。

触れあっている背中が、微かに動く。

「じゃあおまえは、ここから出なくていいんだな？」

そばにいるのに遠ざかっていく声で、男はそんなことを訊いてくる。

「え？」

「国民を見捨てて、魔女を選ぶんだな？」

「見捨てるなんて言いかた……」

「だっておまえはわかっているはずじゃないか。王が亡くなった今、あの国がどれだけ危険な状況にあるのか」

「……！」

驚いた。

意外にもこの人は、シェロニアの現状をきちんと理解しているようなのだ。

タフィレンとアテリスの均衡を保っていたものは、シェロニアそのものではなく王自身であったのだと。

他の国民は、決して気づいていないことなのに。

「なんでそれ……」

とっさに、僕は男から背中を離していた。

どう疑っていいのかもわからなかったけれど、あまりに不自然であったから。

しかし振り返るのだけはこらえて、次の言葉を待つ。

「んなもん、おまえを見てりゃあわかるんだよ。俺はずっとおまえを〈観察〉していたからな」

「な……っ」

(観察!?)

一体いつから、どこでなにをっ？

考えただけで、顔が熱くなった。

じゃあもしかして、僕がいつも塔で感じていたあの視線は、魔女のものじゃなくて……？

「……………」

それなら――と僕はまた、男の背中に自分のそれを預ける。

きっと、この人の言っていることは本当なのだ。

だって僕は、その事実気づいてしまってから、よく父にくっついてかかっていた。

「僕に〈王の仕事〉を教えて！」

それまではずっと逃げまわっていたくせに。なにも知らないまま国を背負わされることが、急に怖くなったのだ。

だけど父は結局僕には教えず、優秀な側近であったローノを選んだ。

最期まで、僕には冷たい父親だった。

「……僕は、父さんが〈嫌い〉だよ」

呟いた僕の言葉を、男はこぼさずに拾う。

「知っている。だが〈国民〉は〈好き〉だろう？」

「それは……みんなやさしいから。でも僕にやさしくしてるんじゃないよ、〈王子〉にやさしくしてるんだ」

そう、城では満身に笑えない僕でも、外にいるときは違った。みんなが僕を笑わせようと必死になってくれたし、実際それなりに楽しかった。でもそれを心から受け入れられなかったのは、僕が王子であるがゆえ。そのやさしさが僕の立場上にあるのだと思うと、素直には喜べなかった。けれどみんなに非がないのはわかっていたから、感謝していた。

失いたくは、なかった。

(内の冷たさ、外の、つくりもののあたたかさ)

きっとその温度差が、ゆっくりと僕の心を蝕んでいったのだろう。

誰も信じられないように。

なにも、聞こえないように――。

あわせたままの、男の背中が揺れる。

「ひねくれているな、おまえ」

笑っているのだ。

「なにを今さら。僕が魔女を信じていると言うと、みんなそう笑うんだよ」

「ああ、確かに……くくく」

なにがそんなにおかしいのか、男はしばらく笑っていた。

当然僕は面白くないので、腕組みをして笑いが終わるのを待つ。退屈をしのぐように、足を揺らした。

(変なの)

会話をしていなかったときは、もっと長い時間なにを感じることもなく待っていたはずなのに。こうしてこの人と会話が成立するようになってからは、少しの間も惜しいと感じてしまう。

――同時に、ほんのりとあたたかい背中が心地いい。

「なあ、リノソトス」

やっと笑いおわった男が、初めて僕の名を呼んだ。なぜ名を知っているのかなんて、もはや訊く必要もない。

「なに？」

僕はなるべく自然に、応えるよう努力した。

本当は、先がわからなくてドキドキしている。

次にどんな言葉を突きつけられるのか――？

息を吸う音に、息をとめる。

「そばにいるだけが、やさしさじゃないだろう？」

「え？」

一体なんのことを言っているんだと、僕は横目でほんの少しだけ振り返った。

(――あ)

一瞬、同じように振り返った男と目があう。

「おまえの定義だと、外に行くとそばにいてくれるみなはやさしくて、なかにもそばにいてくれない王はやさしくないみたいだ」

「……そのとおりじゃないか」

「そうか？ 離れるやさしさってのも、俺はあると思うがな」

「離れるやさしさ？」

(離れることが、僕へのやさしさだったというの？)

僕がさみしがるのは当然わかっていたはずで。それでもなお僕を突き放したのは、僕のためだったとでもいうのか。

「そんなの、わかんないよ……」

僕はそばにいてほしかった。母さんが先に死んで、父さんしかいなかったんだから当然じゃないか――。

恥ずかしくて口にはできなかったけれど、本当は誰よりも父が好きだった。嫌いになったのは、そばにいてくれなかったからに他ならない。

そして今は〈永遠〉の、離ればなれ。

「……っ」

父が死んでから初めて、〈そのこと〉で僕は泣いた。

(やっと泣けた)

墓を目の前にしても、絶望だけでいっぱいだった僕に。どんなやさしい言葉をかけてくれたって、誰もこんなふうに背中を貸してくれはしなかった。

――そう、僕の大好きな、魔女ですら。

俺が息をとめると、リノの寝息がこちらまで聞こえてくる。互いに背を向けて横になっているから、そうしなければリノの状態がわからないのだ。

「—おい」

本当に眠っているのかを、確認するために声を発した。

「……………」

返ってくる声はなく、身じろぎひとつ聞こえない。どうやらしっかりと眠っているようだ。

安心して立ちあがると、俺はリノのそばへと移動する。起きているときには、決して実現することのない手の届く距離。それを拒んでいるのは俺自身だったが、この心臓がもたないのだから仕方ない。近づけば近づくほど、リノは射抜くように強く俺を見つめてくるのだ。

その瞳に、悪質な〈呪い〉をかけられているとも知らず。

だから俺は、リノが目を閉じているときにしか近づくことができない。

正面にまわりこんで、眠っているリノの表情を確かめる。あたりまえだが、だいぶ参っているようだった。顔には先程俺が殴ったあとと、そして涙のあとが見え、見つめられてもいないのに胸が痛む。

「すまない、リノ……」

(巻きこんだのは、間違いなく俺だ)

他にできることなどなくて、俺は手を伸ばしてリノの髪の毛に触れた。せめて楽しい夢を見てくれればいいのにと。

リノ—リノソトスは、最南の小国・シェロニアの王子だ。俺は八年ほど前から、〈趣味で〉この王子さまを観察していた。観察といっても、こんなに近くで見るとは本当に初めてのことで。今までは国の行事のとき見かけたり、城の塔に現れたとき見かけたりと、遠くから見るばかりだった。もっとも、俺の視力は魔女並みであるから、それでもよく見えていたのだが。

「……ふう……」

昔から変わらない、まだあどけなさの残る寝顔をしばらく眺めて、俺はひとつ息を吐いた。それからまた立ちあがり、もといた位置まで戻ると何気なく上を見やる。

扉だらけのこの空間。もちろん上にも扉はあり、思い切って下の扉へと飛びこんだリノが、上の扉から落ちてきたということもあった。

(あのときは、この空間の狭さに感謝したな)

もし天井が高かったら、それだけで怪我をしていたところだ。

思い出し、ひとり笑ってから俺は、表情を引きしめ視線の先にある扉へと声をかける。

「おいっ。おまえにはちゃんと、見えても聞こえてもいるんだろう？」

それはもちろん、俺たちをここに閉じこめている犯人〈喜の魔女〉への言葉だ。返事はハナから期待していないから、すぐに続けた。

「俺はおまえが望んでいるようなことはしない。だがこいつは今確かに、おまえが望んでいるようなことを、思っているはずだ」

(心底俺を、嫌っているはずだ)

自分の言葉の裏側に、心が痛む。

「それはおまえにだってわかるだろう？ まだ、満足しないのか」

続く沈黙が示すものは、やはり肯定なのか。

俺はもうひとつ、静かなため息をついた。それから視線を、寝ているリノの後ろ姿へと戻す。

確かに、いつかはそばに行きあの背中を支えてやりたいと、気づかせてやりたいと思ってはいた。でもそれはこんな形じゃなくて、もっと自然に。俺がなにかを画策しなくとも、ときが満ちれば自動的に出会えるのだと考えていたのだ。

それなのに――

「……一体どうしろって、言うんだよ……」

心の底では「今の俺にはどうもできはしない」と自覚できていて、それでも俺は呟かずにはいられなかった。

だってあまりにも、無茶だ。

(魔女が望んでいるもの)

それは俺の――〈愛情〉。

そんなもの、簡単に渡せるものじゃない。

俺自身にだって、どう扱っていいかわからない部類のものなのに。

それでも魔女は、貪欲にそれをねだる。

ねだりつづける。

出会わなければよかったと、何度思ったことだろう？

――生まれなければ、よかったと。

「おや……あんた、〈魔が差してる〉ね？」

初めて〈喜の魔女〉に出会ったとき、言いあてられた言葉。それは隠語だった。

(本当に魔が差したのは誰？)

俺の両親であり、俺自身。俺は魔女と人間のあいだに生まれた、あらかじめ呪われた子どもだったのだ。だが俺自身は長いことそれを知らず、なぜみなは自分をさけるのだろうと不思議に思っていた。

――簡単な、理由だった。

そこがちいさな村であったからこそ、みな気づいていたのだ。魔女に会うため村を出ていき、戻ってこなかった男と。かわりのように、村へ投げ捨てられた赤ん坊。

一体どの魔女が男と交わり、そして喰ったのか、それはわからなかった。けれど村人たちにとって、俺が〈魔女の子〉であることに間違いはなくて。

完全に隔離された俺は、村はずれに建てられたボロ小屋でひとり生きていた。意外にも閉じこめられたりはせず、しかもそこにいれば窓から食べものを投げ入れてもらえた。だから俺はさけ

られるのをかなしく思いながらも、おとなしくそこで暮らしていたのだった。

(――それが、最大限のやさしさであったのだと)

俺が気づいたのは。

村人全員の〈フルコース〉を、喰いおわったあとのことだった。

ある日ひとりの娘が俺を訪ねてきて、そこで俺の世界が変わった。

そいつはなにを思ったのか、〈魔女の子〉という理由だけで隔離されつづける俺に同情し、俺のために金細工のペンダントをつくってくれたのだ。それはお世辞にもうまいとは言えない出来だったが、食べもの以外にもものをもらったのは初めてだったから、俺は素直に喜び、いつものように窓から投げ入れてほしいと頼んだ。しかしそいつはそれを俺の強がりだと思ったのか、なんと家のなかまで入ってきて、俺の首に直接かけてくれたのだった。

そして俺を、抱きしめてくれた。

――強い衝動が、俺を襲った。

それまで感じたことのない欲望が、俺を支配し……俺は本当に無自覚のまま、目の前の食糧を喰ってしまった。それだけじゃない。家を飛び出し、村内を駆けまわり、俺は――。

そうして喰う対象がなくなってからやっと、正気に戻ることができた。今度はちゃんと動いている頭で、もう一度村内を歩きまわりながら。

捜した。

生きている人を。

いないとわかっていて、捜した。

(謝りたかった)

だがそんな俺が見つけられたのは、村長の日記だけ。

「見てくれ」

そう言わんばかりに、机の上に広げてあった。

――私だけは間違いなく、おまえを愛していたよ。おまえは私の初孫だ。息子がもう二度と戻っては来ないとわかりきっているなか、一体どうしておまえを嫌える？――

村中の誰もが反対しても、命を絶つことはできなかった。せめて人間らしく死んでゆけるように、隔離した。

それでも――本当は、触れたかったのだと。

抱きしめたかったのだと。

やさしい言葉を、与えたかったのだと。

震える文字で記されていた。

そして精一杯の謝罪が。

しばらくそれを見つめていた俺はやがて、震えているのは文字なのではなく、自分自身なのだと気づいた。胸もとの下手くそなペンダントを、上手に握りしめられないほど。

――それから俺は、すべてを捨てて旅に出た。

(もう二度と人間を喰わない)

その誓いだけを背負って。

俺は〈魔女の子〉だが〈人間の子〉でもあったから、人間を喰わなくても普通に生活できていた。人間が特別おいしいと思うわけでもない。腹さえすいていなければ、人間がそばにいてもある程度平気だったのだ。

そう、俺はあのとき腹をすかせていた。――いや、実際には俺だけじゃなくて、不作のためみな食べるものがないと、そういう状況だったのだ。

「それがいけなかったんだ」と。

「今度は失敗しない」と。

食べるために俺は、あらゆる仕事をした。各国を渡り歩きながら、汚い仕事も危険な仕事も金になるならなんでもやった。

そうしてある日シェロニアに流れつき――リノを、知ったのだった。

あわせた背中が、小刻みに揺れている。リノが泣いているせいだ。

「王はな、きっと自分が長くないことを知っていたからこそ、おまえをそばにおかなかつたんだろ」

そばにいればいるほど、亡くしたときの反動は大きい。

隔離されていた俺ですらあれほどの衝撃を味わったのだ、リノがもしあたりまえに王のそばにいたとしたら、そもそもこんなに冷静ではいられなかつただろう。

リノは泣くことに一生懸命なのか、なにも応えなかつた。

その沈黙を利用して、俺は先を続ける。

「もっと言えば、おまえになにも教えないのだって、おまえ自身に〈未来〉を選ばせるためなんじゃないのか？」

「み、らい……？」

喉の奥を鳴らしながら、リノはやっとそれだけ口を挟んだ。

「そう、未来だ。必ずしもおまえが国を背負う必要はないと、そういうことだと思うがな」

事実、王はそのようなことを国民に告げていた。

「リノがなにを選択しても、それを妨げることはないように」

と。

リノが王として国を支えることを選択しなくとも、大丈夫なようにローノアードを育てていた

。

(そんな王さま、他にいないぞ?)

王子は王になるのが当然なのだ。ひとり息子ならなおさら。

けれどあの王は、王としての仕事をリノに教えないことで、リノに選択する権利を与えた。

――本人のあずかり知らぬ場所で。

「……それが、離れるやさしさなの？」

やっと泣きやんだのかリノは、今度はしっかりとした声音で問いかけてくる。

「物理的にな」

「えっ？」

俺の首にあたる、リノの髪が動いた。

「だっておまえのなかには、ちゃんと王がいるじゃないか」

「あ……！」

「〈喜の魔女〉だってそうだ。魔女はずっとおまえのそばにいたわけじゃないのに、おまえは魔女を心の支えにしていた」

「そう、だ……」

俺は自分から、背中を離し後ろを振り返る。

驚いて同じく振り返ったリノの両肩を掴んで、まっすぐに瞳を見た。

「たとえ身体が離れていても、どちらかが想う以上心は離れられないんだ。俺たちはそれを支

えに、生きてゆくしかない」

赤く潤んだ瞳が、俺の心臓を鷲掴みにしても。

まだ、離すわけにはいかない。

「まだここにいたいと思うのか？ なにも選ばずに、逃げつづけるのか？」

大きく見ひらかれる。

瞳に映る俺の顔が、苦痛に歪んでも。

「僕は――」

リノが心のなかの王と、向きあうまで。

俺は見つめつづけた。

限界が来る前に、すいとリノのほうを顔をそむける。

それからぼつりと。

「僕、戻るよ」

呟いた。

「戻りたい。僕になにができるのか、知りたいから」

そして自分の肩から丁寧に俺の手を外すと、ゆっくりと立ちあがる。

「父さんがなにをを考えていたのか、僕にはわからない。でも、あなたの言うことを信じてみようと思うんだ」

腰に差していた、短い棒のようなものをするりと抜き取り。

「これね、父さんが亡くなる三日前に、僕にくれたものだよ。父さんが他の国へ行くときには、いつも持っていった。なにに使うかはわからないけど、多分大事なものなんだと思う」

くるりと、俺に背中を向けた。

「……これ、もらったときに、気づけばよかった……ローノにすべてを任せるつもりなら、これもローノにあげてるよね、きっと……」

再び濡れた声に、俺も立ちあがる。

(悪いのは、リノだけじゃない)

王も言葉が足りなすぎたんだ。

リノはまだ子どもで、人の想いを察することができるほど成熟していない。

だから俺は見守っていた。

かつての自分とリノを重ねて。

そして俺のようにならなければいいと、願っていた。

まさかこうして巻きこんでしまう羽目になるとは思わずに――。

俺は自分の首にかかったままのペンダントを外すと、後ろからリノの首にかけてやった。

「――！ なにっ？」

リノは驚いたように一瞬振り返ろうとしたが、すぐに「見てはいけない」ことを思い出したのか、動きをとめるとペンダントのほうに目をやった。

「金細工の……鳥？」

「多分な」

羽らしきものが見えるから、そうなのだろう。確信は持てないが。

俺は旅を始めるとき、すべてを捨ててきたと言った。けれどどうしても、これだけは捨てられなかったのだ。

「たまには〈もの〉に頼るのもいいだろう。そのへんてこな棒だけじゃ足りないみたいだからな、おまえにそれをやる」

「でもこれ、あなたの大切なものじゃ……」

「だから、だ」

「……………」

「いいかりノソトス。おまえにとっては迷惑な話かもしれないが、俺はおまえを心配している。そしておまえの支えになりたいと思っている。たが魔女は、そう簡単には諦めてくれないようだからな」

「待って、なんでそこに〈魔女〉が出てくるのっ？」

心底不思議そうに口にした、リノの背中が静かに消えてゆく。

「ほらきた。おまえ、戻れるみたいだぞ」

「え？ なんでっ!? あ、あなたは？」

遠慮がちに、それでも今度はリノも振り返る。

「大丈夫だ、魔女は俺だけ閉じこめていても意味がない。すぐに出られるさ」

「そう、よかった……」

声もちいさくなってゆく。

「ねえっ、いろいろありがとう！ あなたの名前——」

そこで完全に、姿が消えた。

言葉も最後まで聞こえなかった。

かすかな余韻に、ひとり答える。

「俺は、クローギ。クローギだ」

そうしてくすり笑うと——それまでの無理が祟ったのか心臓が甘く痛み、俺はそのまま気を失ってしまったのだった。

壁を向いて寝ることに慣れてしまっていたせいかな、リノはもういないというのに、気がつくと俺の目の前にはいつもの壁があった。

ひとり苦笑しながら身体を起こした俺は、そのままびしゃりと固まる。

「—————おいっ」

ついさっきまでリノがいた場所に、なんと〈喜の魔女〉が寝ていたのだ。

「悪趣味だぞ」

軽く睨んでやるが、もちろん魔女にはまったく効かない。

まるで重力を感じていないようなやわらかな動きで立ちあがると、皮肉たっぷりの笑みをこちらに向けた。

「ずいぶんと饒舌だったこと」

「おまえ以外になら、誰にでもそうなんだよ！」

なぜか俺は、魔女と話すときはいつもケンカ腰になってしまう。

……魔女が厭味ばかり言うからか。

「嘘ばかり」

笑っていない赤い瞳で笑いながら、魔女はゆっくりとこちらに近づいてくる。

これが外なら思い切り走って逃げているところだが、あいにくとこんな狭い空間ではそうもいかない。

「おい、ここから出せよ」

低く脅すような音を出してみても、脅されているのは大抵俺のほう。

「私にも話してくれたらね」

ついには俺のすぐ前までやってくると、魔女は俺の背中を壁に押しつけるように、顔を近づけてきた。

それでも不思議なことに、重さは感じない。

「———ねえ、どうして彼を見てたの？」

「……………」

答えてなんになる。

俺は口をひらかなかった。

顔もそむけて、目をつむる。

(なんでも自分の思うとおりになるなんて思うな)

心のなかではむかう俺に。

「答えなきや、彼をもっとひどい目に遭わせるわよ？」

「な……っ」

せいぜい「ここから出さない」くらいかと思ったのに、その脅しは俺の予想を超えていた。

しかも。

「〈もっと〉ってなんだよ!? おまえ、もうなにかやったのかっ？」

黒いドレスの胸もとを掴んだ。

すると魔女は、赤い唇だけで、笑う。

「教えなきゃ、教えない」

「~~~~っ」

(本当になんなんだ、こいつはっ)

魔女と話しているときの俺の姿など、とてとてもリノには見せられない。いつもはおちよくる側の俺がおちくられるなんて、まったく考えたくないことだ。

「たいしたことじゃない！ 平和ボケの国に平和ボケの王子がいた、その王子が心配になった、ただそれだけのことじゃないかっ」

(そうだ)

今さら詳しく語る理由でもない。

そもそもシェロニアにやってきたのだって、本当に偶然だったのだ。

食べるために金を稼ぐことで頭がいっぱいで、満足のいく金額さえもらえればどんな汚いことでもやっていた、あの頃。

俺は簡単に人を騙し、殺した。

殺すことにためらいはなかった。

なぜなら、人を喰うことは魔女だけの行為だが、人を殺すことは他の人間だってやっていたからだ。

(後悔など、するわけがない)

「喰わない」ために足手まといになりそうな感情は、全部あの村に捨ててきた。

――はずだったのに。

ふらりとシェロニアにたどりついた俺は、あっという間にすべての毒気を抜かれてしまったのだ。

仕事を探しに向かった酒場で、どうしようもないくらいに笑われて。

「わっはっはっはっは。面白い冗談言うに一ちゃんだなあ〜」

もちろん冗談を言ったつもりはなかった。

「殺しも金しだいで請け負う」と、ただそう言っただけなのだ。

しかし笑い声は一向にやまず。

「冗談でなかったらなんだと言うんだい？ 他の国じゃ知らんがね、この国で誰かを殺そうなんて思うやつあいないよ」

「そーそー。我々はお気楽がモットーだからな！ わっはっは」

実際逗留してみると、その言葉に嘘偽りなどないことが、すぐにわかった。

シェロニアは大陸内に存在していることが信じられないほど、真に平和な国だったのだ。すべての国民が平和でありたいと望み、平和であることを誇りに思っていた。

それは汚れすぎた俺にとって、あまりにも衝撃的な光景だった。

ではなぜこんな国ができあがったのか？

興味を持った俺は統治者である王に近づこうとしたが、王は病気がちらしく国内の行事に参加

することはほとんどなかった。かわりに、まだ分別もつかないような年頃のリノが、多分国民をなごませる役として、参加していた。

リノはいつも笑顔だった。

笑顔であるように、見えていた。

一一見せていた。

そのことに気づいてしまった俺の興味はリノに移り、そこから観察が始まった。

そうしているうちに、リノのなかにかつての俺と同じような気持ちがあることを、悟ったのだ。

。

(どうしてそばにいてくれない?)

叫んでばかりで、それが自分のためであるとは微塵も思わない。

それがもどかしかった。

そのことを「いつか伝えたい」と観察を続けていたのがあだになり、こうして魔女に目をつけられてしまった。

至近距離にある、魔女の瞳を射抜くように見つめる。

呪いをかけられたリノの瞳でなければ、俺は怖くない。

「一一！」

ふいに魔女の顔が近づいてきて、一瞬だけ唇が重なった。

「やめろっ」

渾身の力をこめて魔女の肩を押し返すと、やはりなんの重みもなくするりと、魔女の身体は後ろに下がる。まるで足に車輪でもついているみたいだ。

押された魔女はなんでもないように、「不味いっ！」とツバを吐き出していた。

そっちからしてきたくせに、なんて態度だ。

「……どうしておまえは、俺に執着するんだ」

これまで何度も訊いてきたことを、もう一度口にする。

どうしても納得できないのだ。

そもそも今回のことだって、魔女は俺とリノを同時に閉じこめることで、俺がリノに嫌われるよう仕組もうとしたのだ。それ以前にも、魔女はリノが自分を好きになるよう仕組んでいる。

本当に俺を手に入れたいなら、それらが逆効果であるとわからないはずはないのに。

「おまえはただ、楽しみたいだけじゃないのか？」

俺なんか本当はどうでもよくって。

ただ俺たちを困らせたいだけなんじゃないか？

大真面目に問いかけた俺をよそに、魔女は実に楽しそうな顔で笑いながら。

「何度も言ってるじゃない、あんたが〈いい〉と思うのは、あんたが〈不味そう〉だからよ。せっかく仲良くなってひとつになれても、結局は性欲より喰欲が勝ってしまって喰っちゃうんだもの。でもあんたは私たちの血が混じってるからね。不味そうで、どんなにおなかですいても喰いたくない感じ！ 一緒にいるのに最適でしょう？」

「知るか！」

「それに私は、楽しみたいんじゃないわ。〈失われた喜び〉を取り戻したいのよ。あんたが私のものになれば、私はきっと心から喜べる。――そのためには、いろいろと試してみないとね」

魔女はそうあたりまえに言うが、この魔女が俺の母親じゃないなんて言い切れないのだ。

(よくあることだから)

魔が差すのは。

だからこれは、もしかしたら家族愛なのかもしれない。

わからない。

「あんたこそ、いい加減あの子に執着するのやめたら？ あんたの口とあの子の瞳にかけた呪いは、そう簡単には消えないわよ」

「っ！ そうだ、おまえリノになにをした!？」

さっき「リノをもっとひどい目に遭わせる」と言っていた魔女を思い出して、俺はつめ寄る。

魔女はそれが気に入らないのか、ひとつ長いため息をついてから。

「――正確に言うなら、彼にはなにもししていない」

「じゃあ誰になにをした？」

まだぼかした答えに、俺の声も自然と低くなる。

そしてひそかに、震えていた。

なにをしでかすかわからないのが魔女だから。

特にこの〈喜の魔女〉は、俺自身が身をもってその危険さをよく知っている。

睨む視線の先で、魔女は腰に手をあてると、まるでなにかを威張るように胸を張り。

「もっと正確に言うなら、私はなにもししていない」

「……は？」

「運命はときとして、私の思惑よりも残酷なものよ」

続けた魔女の姿が、どんどん薄くなって……いや、違う。消えているのは俺のほうだ。俺もリノのように、もとの空間に戻ろうとしているのだろう。

「どういう意味だ？」と、尋ねる余裕はなかった。

「ひとつだけ教えておくわ」

徐々に闇色を帯びてくる視界のなかに、魔女の声だけが響く。

「あんたたちはもう、出会わない」

楽しそうな色を含んで。

「もひとつ呪いをかけたから」

「おまえは未来を選べるんだ」

俺はそう、リノに告げた。

王はそのための準備をしていたのだと。

そしてそれは、多分間違いではなかつただろう。

――魔法の空間にいた、さっきまでは。

「……なんだ、これ」

魔法が自分の空間から俺を追い出し、放り投げていったのは、俺がこの国へ来て最初に入った酒場の前だった。

……と、思う。

確信が持てないのは、建物がかなり破壊されていたからだ。

赤色レンガを積んでつくられていた壁には、いくつもの大きな穴があいていた。

扉も、なかの棚やテーブルも見事に壊され、むしろこうして建ったままなのが不思議なくらいだ。

看板だって……ああ、店のなかでボロボロになって転がっている。この店を守ろうとしたのだろうか。

(一体なにがあつたんだ?)

あたりを見まわした俺は、改めて息を呑む。

壊されているのは、なにもこの酒場だけじゃなかつた。

美しく整備されていた道も、その周りの柵も木も、あらゆるものが壊されていた。

それに――

「誰も、いない？」

肝心なことに気づき、口に出す。

そして弾かれたように、足を動かした。

酒場の隣には宿屋があつた。

その隣には果物屋が。

その隣には衣服屋が。

その隣には小物屋が。

だがすべての店が破壊されていて、人もいない。

テーブルの上には食べかけのパンや倒れたコップが載っていたり、新聞がひらいたままになっていたりするのに。横になった椅子が蹴飛ばされた形跡だって、残っているのに。

人間だけが、きれいに消えていた。

(まさか)

王が亡くなったせいで、いきなり両隣の二国に襲われたとでもいうのだろうか。

リノに選ぶ隙も与えず、運命は動いてしまったと？

「……っ」

走る足を、俺は城のある中央へと向けた。

〈どちら〉が襲ったにせよ、城には誰かいるだろう。

城を制圧することが国を乗っ取る最も手っ取り早い方法であり、俺はそうして支配されていった国をいくつも見てきた。ましてこの国の民は呆れるくらい王に忠実であったから、それを知っている者なら当然城から攻めるだろう。

走りながら目も走らせ、くまなくあたりを見まわすが、民家の建ち並ぶ地区までやってきても、やはり人の気配は感じられなかった。建物はみな同じように破壊され、その残骸がきれいに保たれていた道に散らばっている。

(――ん?)

ふと俺は、ひとつの違和感を覚えて足をとめた。

確かに現場はひどい。

ひどいが、決定的になにかが足りないと、半分混乱したままの俺の頭でも感じている。

どこかが違うのだ。

俺が今までに見たことのある、戦争後の風景と。

「風景……？」

自問して、自答した。

(いや、違う)

違うのは〈臭い〉だ。

そうだ、血の臭いがしないのだ。

どこを見ても赤黒いシミはないし、人がいないということはつまり、死人もいないということ

。

それなら――と、今度は疑問が生まれる。

(本当に、襲われたせいなのか?)

戦争のあとならば、そこら中に死体が転がっているはず。

それともその死体を片づけおわるくらい、長い時間が経っているというのか。

もしそうだとすると、血のあとがないのも臭いがまったくしないのもおかしいが……。

考えはじめると、とまらなかった。

(――駄目だ)

今はとりあえず、城へ向かおう。

もしかしたらリノが、そこにいるかもしれない。

「あんたたちはもう、出会わない」

別れ際に告げた魔女の言葉が頭をよぎるが――だからどうした。

俺はまた、走り出す。

(会えないなら会えないでいいんだ)

一度でも俺たちを出会わせた時点で、おまえの負けだ。

魔女はまだ気づいていないかもしれないが、それだけは間違いのないことだった。

だってリノはもう俺を忘れないだろう。

リノのなかの俺は、それまでの魔女と同じように、リノを助けつづけるだろう。

それは今後会えても会えなくても、決して変わらないこと。

リノが本当に薄情な男なら断言などできないが、俺はリノがさみしがり屋のやさしい少年であることを知っている。

忘れさせないようペンダントも渡した。

(おまえの望むようには、壊れたりしない)

だから、もし城にリノがいなくとも、ある意味それは俺の望むところだった。

他に人がいるならなおさら、リノはいないほうがいい。

そこにいるということは、巻きこまれているということだから。

「……っ……はあ……くそっ」

魔女の空間にいてあまり身体を動かしていなかったせいか、走りつづける心臓は早くも悲鳴をあげていた。

それでも足をとめずに、少しよろめきながらも踏み出す。

こんな俺を見て、魔女が幻滅でもしてくれれば話は早いのに。

魔女はきっと俺以上に、気が長い。

勘弁してくれ。

やっと城についた頃には、すぐに話し出せないほど息が切れていた。

さいわいというかなんとか、どうやら城の内部にも人の気配はないようで。

俺は息を整えながらも、勝手に門をくぐってみる。

開け放たれたままの城門。

入口の扉。

踏み荒らされた花壇に、掲げられていたはずの国旗がまぎれていた。

手を伸ばして引き寄せると、切り刻まれた部分がさらにちぎれる。

国旗がこうなっているということは、他国の干渉があったのは間違いない。

それなのになぜ、誰もいないのか。

城内に入ると、敷いてある赤い絨毯に無数の足形が見えた。

以前俺がこっそりと覗いたときには、もちろんなかったものだ。

その足形をたどっていく。

それが面白いほど迷いなく進んでいたから、相当調べたうえで乗りこんできたのだろうことがわかる。

(内部に密偵でもいたのか?)

そう疑うことすらバカバカしいと思えるくらい、平和な国であったのに。

そんなことを考えながらたどりついたのは、書斎のようなちいさな部屋だった。

壁際には天井に届くほどの本棚が整然と並んでいて、きっちり分類された本の背表紙が迷惑そうに俺を迎え入れる。

部屋の最奥、窓のそばには部屋のサイズに見合わない大きさの机が陣取っていた。

おそらくここは、シェロニアの頭脳といわれるローノアードの部屋だ。

ローノアードは王の側近であり、ある意味誰よりもこの国の行く末を心配している人物でもあった。

なぜ俺にそんなことがわかるかという、前に一度ローノアードに〈捕まった〉ことがあるからだ。

(あれは確か、リノを観察しはじめた頃だったな)

もともとこの国の者ではない俺の姿を、城の周囲で頻繁に目にするようになって、誰かが城に告げ口をしたのだろう。

王やリノを狙う暗殺者だと誤解された俺のもとに、ローノアードはやってきた。

それもご丁寧に、まっ正面から。

「きみはなんだ？ なぜ城の周りに現れる？」

俺の瞳を見て訊いてきた。

だから俺もそれに応えて、バカ正直にすべてを話したのだ。

はぐらかしても。

そうでなくても。

信じてもらえない可能性はあった。

(だがローノアードは、違った)

俺が〈魔女の子〉であることを知っても。

現在進行形で魔女に狙われていることを知っても。

「リノソトスさまを見守りたいというのなら、それでいい。ただし、魔女とのごたごたにリノソトスさまを巻きこむな。ただでさえあのかたは魔女に関心がありすぎて困っているのだ」

俺を〈味方〉だと認めると、そばにあることを許した。

それはつまり、長い目で見たときそのほうが国のためになると、そう思ったからだったのだろう。

そして今まさに、多分俺にしかリノを助けられないという状況に、陥っている。

鮮明に残る大量の足形に、俺はもう一度目を落とした。

(そう、か)

ここに足形が続いているのはきっと、ローノアードがここで王の仕事を代行していたからだ。

なにか手がかりはないかと、棚の本に目をすべらせながら奥へ進んだ。

本当に呆れるほど丁寧に分類された本から、ローノアードの性格が窺える。

本棚には隙間ひとつない。

新しい本が増えるたびに、入れ替えているのだろうか？

「……ん？」

しかし意外なことに、近づいた机の上には一冊の本が無造作に置かれていた。

手にとって確認してみると、〈伝説の勇者・魔物退治物語〉という、この国の昔話を書いた本の一巻だった。

内容を簡単に説明すると、その昔ひとりの勇者が伝説の剣を手に、暴れる魔物をすべて退治したとただそれだけの話なのだが、面白いことにこの手の本はどの国にも存在していた。

すべてが同じ勇者のことを書いているとは限らないが、散在しているわりに内容はほぼ同じで、俺はずっと不思議に思っていたのだった。

(って、今は関係ないか)

気を取り直して、本になにか挟まっていないかと、ページをめくって調べてみる。

特に変わったところはないようだが……ただの戻し忘れだろうか？

「――あ」

そこまで考えて、俺はあることに気づいた。

(本棚には隙間ひとつない)

それはさっき、俺自身がこの目で確認したこと。

つまり、戻そうにも戻す場所がないということだ。

俺はとりあえず視線だけ本に戻し、巻末を確認する。

「全五巻、絶賛発売中……」

(どこだ!?)

俺は身体を本棚のほうに向けると、背表紙たちに這いつくばるようにして調べはじめた。

ローノアードの性格からいって、きっと全巻そろえて棚におさめていたはず。

一巻はここにあるのに棚に隙間がないということは、かわりに他のなにかが挟まっているということ。

つまりそれを隠すために、この本を抜いたと考えられるのだ。

他人にはただの読みかけに見えても、性格を知っている者にはヒントになっている――なるほど、うまい仕掛けだ。

こんなときにも、俺の魔女並みにいい視力は役に立った。

台にあがらなくても上のほうにある本の題名が見えるのだ。

(勇者、勇者、勇者……お、あった)

二巻から五巻がおさめてあったのは、入口に近いほうの本棚だった。

俺は奥のほうから捜しはじめたため、見つけるまでに少し時間がかかってしまったが、重要なものをあえて手前のほうに置くというのも、仕掛けのひとつなのかもしれない。

位置的にはまるで俺の背にあわせたかのような高さで、一巻にあたる部分の本を簡単に手に取ることができた。

背表紙にはなにも書かれていなかったが、そもそも古い本にはそういうものが多いから、変に目立つということもない。

「これは――日記？」

ひらいてみると、神経質そうな文字がびっしりと並んでいた。

明らかに手書きの文字だった。

日付はちょうど年の頭から始まっている。

おそらく一年に一冊ずつ書いているのだろう。

(そうだ、これを見れば)

この国から誰もいなくなった日が、わかるかもしれない――

ページをめくる。

めくる。

めくる。

うまく、めくれない。

緊張しているのか？

なにに？

「……………」

自分でも理由を知らないまま、俺の手は震えていた。

そして迎えた白紙のページを一枚戻す。

そこに書かれている文字は、明らかにそれまでと違っていた。

〈書いた〉というより〈書き殴った〉というほうが正しいだろう。

——予想どおり、タフィレンとアテリスが〈あれ〉を探しにきた。〈王の遺言〉に従い、一時的にこの国を放棄する——

(あれ？)

放棄？

気になる単語はいくつかあるが、数行あけて続けられている文章が、いちばん気になった。

——私の性格をよく知るリノソトスさまなら、この日記に気づかれるでしょう。あなたはお逃げなさい。これは陛下からの、最初で最後の命令です。あなたさえ無事ならば、あれは渡してもかまわない——

「……………」

その文字が、一部滲んでいた。

リノが本当にこの文章を読み、涙したせいなのだろうか。

(日付は？ ——！)

驚いたことに、俺たちが魔女に捕まった翌日になっている。

今日が何日かわかればいいのだが……

「——えっ？」

今日の記事などあるはずがない。

そう思いながら何気なくめくったページの先に、それはあった。

(二日後!?)

——僕は北へ行く——

それだけが書かれていた。

明らかに筆跡が違う。

自分を「僕」と表現しているところから見ても、おそらくリノが書いたものだ。

ご丁寧に日付を残してくれたのは、リノ自身今日が何日であるかを知るのに苦労したからだろうか。

(北、か)

そうだ、東西両隣から狙われている以上、リノには海から行くか山から行くか、どちらかの道しか残されていない。

海はひとりではとても無理だが、山ならきっとどうにでもなる。

そう考えたのだろう。

――追いかけてよう、と。

俺はごく自然に思った。

ローノアードが自分からこの国を放棄したと書いているのだ、国民はおそらく無事なのだろう

。この地に血が流れていないのも、それで納得がいく。

それなら。

「やっぱ心配なのは、さみしがり屋の王子さま、だよなあ」

呟いて、俺はひとり笑った。

リノは旅などしたことはないはずで、心配の要素は山ほどあるのだ。

それでもこの日記を見つけたことで、俺はいくらか安心できていた。

(リノはもう、諦めていない)

北へ向かうという意味は、他にもなくリノだけのもの。

きっと安易に、魔女にすがったりもしていないだろう。

俺はその日記を持ったまま部屋の奥へ戻ると、机上の羽根ペンを拝借して、リノの字の隣に大きく書きこんだ。

――俺もすぐに向かう――

甘やかすためじゃなく、ともに戦うために。

夢かと思った。

だって目をあけたら、塔の上で空が僕を包んでいたから。

本当は、僕のために魔女なんか現れていなくて。

名を訊き損ねたあの人がって、僕になんか無関心で。

僕はまだ、ひとりきりで――

「……！」

だけど俯いた僕の視界のなかに、きらりと光るものがあったから驚いた。

そして安心した。

この首に感じる少しの重みは、あの人がくれたペンダントのせい。

こんないびつな形では空を飛ぶことはできないけれど、いつか羽ばたきたいという希望を身に秘めたその鳥は、どうしようもないくらい僕の心と合致していて。

「夢じゃ、ない」

僕はこれから選ぶんだ。

自分の意思で、自分の未来を――。

決意を示したこぶしを握りこんで、見えない手に操られるかのようにすっと顔を持ちあげた。

僕は、もう一度、驚く。

「な、に……？」

いつもとあまりにも違って見えるその景色は、錯覚だろうか？

しかし何度瞬きしてみても、それがもとに戻ることはなく。

僕は目の前のありえない状態を信じなければならなくなった。

(なぜ?)

街が汚れてる……!?

いつもなら、道と木と建物、それ以外は行き交う人々くらいしか、僕の目に映ることはない。城がなにも言わなくたって街は常に美しく保たれ、それはまるで国民の心を映しているようで、僕は誇らしかった。

ここから街を見おろすたびに、僕もせめて自分の部屋のなかくらいはきれいに保っていようと、思っていたくらいだ。

それなのに、今眼下に見える街はどこか汚れているように見えた。

街までは少し距離があるからはっきりとはわからないけれど、もしかして塀や柵が壊されて道に散らばっているのだろうか？

ふと視線を移動させた僕は、城の前に掲げてあった国旗が失くなっていることに気づく。

それがどんな可能性を示しているのか、いくら不勉強な僕でもわかった。

「まさかっ」

口に出して、塔のなかに駆けこんだ。

暗がりの螺旋階段を、ただひたすらにおりる。

(まさか、僕が囚われているあいだに!?)

もうタフィレンかアテリスに襲われてしまったというのか。

それとも、両方に？

魔女の空間では時間の流れがよくわからなかったから、僕がいなかったのが一体どれくらいのあいだであったのかわからない。

体感的には一週間くらいだと思ったけれど、実際はそれよりもはるかに長かったのだろうか。細い塔を大急ぎでぐるぐるとまわったため、城との連結部分について頃には目もまわっていた

。

だけど足をとめるわけにはいかない。

壁に手をつきながらも、僕は回廊をひた進む。

「ねえ、誰かいないの!？」

その時点で、すでにおかしかったのだ。

回廊に誰の姿も見えないなんて、これまではありえないことだった。

使用人の姿が見えないのはまだしも、兵士の姿までないのは明らかにおかしい。

この国の兵士は、城を守るためにいる一一のではなかった。

だって平和な国だ、兵士が必要なことなど実はほとんどない。

それでも城に兵士がいたのは、国のためになにかして働きたいという若者たちの声に、王が応えた結果だった。

また、どうしても仕事を探せない者たちの救済処置にもなっていた。

だからこそ兵士らは、いつも人一倍真面目に働いていたのだ。

城内の見まわりを欠かすことはなかったし、城ではあまり好かれていない僕にもやさしかった

。

「誰もいないの？ ローノ！」

叫びながら、歩を進める。

(おかしいよ！)

僕の出すもの以外に、音がまったくしない。

それに心なしか、いつもより床が汚れているような気がした。

一体なにが起こっているというんだ。

「マディムス！ ウォレイツ！ 隠れてるのかっ？」

そんなわけはないと思いつつも、声に出して確認せずにはいられなかった。

「……………」

そして当然のように、返事はない。

マディムスはずっと父の病状を看てくれていた城医師で、よほどのことがない限りここを離れることはないはずだった。

ウォレイツだって、僕の乳母をしてくれていたシェフミアの息子であり、城内で唯一僕と同年代の子ども。あまりにおっちょこちよいがすぎるので僕はあまり好きではなかったけれど、ずっと僕の学友としてこの城で暮らしていたのだ。王が死んだからといって、出ていく理由はないは

ずだ。

(どうなってるんだ……)

まさか僕がいないうちに、年単位で時間が経過してしまったのか？

もしそのあいだに国が滅んでいるのなら、誰もいなくなつて不思議ではない。

「――っ」

不思議ではないけれど、信じたくもない。

不安になった僕は、首を強く振って頭をはっきりさせると、まずはこの二階にある自分の部屋へと向かって走り出した。

今がいつなのかは、部屋に行けばわかると思ったから。

僕は自室で〈ネティシア〉という名の植物を育てていたのだ。

それは細長いクキが特徴の植物で、ひと月もあれば育ちきってしまうほど成長が早く、気持ちいいくらい伸びるのが気に入って部屋に置いていた。

それを見れば、もう何度も育てている僕には、最後に見てから何日経ったのかがちゃんとわかる。

もし枯れたりしていても、その枯れぐあいである程度予想できるはずだ。

回廊を何度か曲がり、たどりついた自分の部屋に飛びこむ。

ネティシアはよく陽があたる窓際に配置していた。

素早く視線を移動させると、位置を変えられた形跡などはないようだった。

近づき、そっと手をあててクキの長さをはかる。

「……えっ？」

そのクキは、意外なほど伸びていなかった。

(三日、くらいか)

おそらく間違いない。

三日。

三日しか経っていないのに。

城から人が消えた。

そういえば――外も静かだ。

僕はまた、弾かれたように走り出す。

自分の部屋を出て、今度はローノの部屋へと向かった。

ローノの部屋は、一階にある謁見の間の隣だ。

父がまだ元気な頃はそこが最も便利な場所であつたらしいのだけど、体調を崩し自室のベッド上で仕事をするようになってからは、少々不便だともらしていたこともある。

階段をくだった。

(――！)

まず気づいたのは、大量の足形だ。

赤い絨毯のあちこちが、茶色く汚れている。

それがそのままになっているということは、やはり使用人たちもいないということ。

(本当に、攻められたのだろうか?)

もしそうなら、攻めた国の誰かくらい残っていてもおかしくはないのに。

誰ひとりいないからこそよけいに、信じられないのだった。

戸惑いながらも、僕はローノの部屋を目指す。

自然と、大量の足形と同じ方向へ。

「ローノ……」

無事なのだろうか。

あまり好きではない相手ではあったけれど、心配する気持ちは抑えられない。

王がいない以上、その代行を任されているローノがいちばん危険なのだ。

またいつものように厭味くさい口調で不評をかって、無駄に殺されたりしていなければいいけれど……。

視線の先に見えるローノの部屋の扉は、見事に開け放たれていた。

その前まで走って、深く息をつく。

視線を部屋のなかへと投げた。

「……………」

汚れとなっている足形以外には特に乱れたところのない、いつものローノらしい部屋だった。

壁の両側にはびっしりと本棚が設置してあって、ローノの並々ならぬ努力を教えてくれる。

(僕だって、ローノのがんばりを認めないわけじゃないんだ)

心のなかで意味のない言い訳を呟いてから、足を踏み入れる。

いちばん奥の窓際にある机のところまで行くと僕は、足形以外にたったひとつだけ、いつもと違うものに気づいた。

机の上に、一冊の本が出しっ放しになっていたのだ。

「ローノらしくないな……」

几帳面な性格のローノは、たとえ読みかけの本でも寝るときはちゃんと本棚にしまうような人だった。

よほど急いでいたのだろうか?

僕はその本を手にとると、入口のほうへと戻った。

さいわいこれは、僕も前に借りて読んだことのある本だ。

〈レニティスの娘〉という、世界を放浪しながら生きる人々の話。

置いてあった場所も大体覚えている。

(確か扉の近くの、下のほうだったよなあ)

「……………あれ？」

しかし僕が考えていた場所にはすでに他の本が差してあって、もう一冊入るような隙間はない。

——そもそも、軽く見渡してみても本棚に隙間など見られなかった。

もしかして、と。

僕はかがんで、入れたかった場所に差してある本を抜き取った。

題名はついていない。

なかを、確認する。

「あっ」

あやうく落としそうになった。

(これ、ローノの日記だ！)

ローノらしい実にきちきちとしたきれいな字が並んでいる。

最後の日付は？ と急いでページをめくると、僕らが魔女に閉じこめられた翌日の分で終わっていた。

しかもその文字は、ローノの性格から大きく逸脱したものだった。

——予想どおり、タフィレンとアテリスが攻めてきた。〈王の遺言〉に従い、一時的にこの国を放棄する——

それから数行あいだをあけて。

——私の性格をよく知るリノソトスさまなら、この日記に気づかれるでしょう。あなたはお逃げなさい。これは陛下からの、最初で最後の命令です。あなたさえ無事ならば、国がどうなってもかまわない——

「っ……」

息を呑んだ。

僕さえ無事なら、あとはどうでもいいって？

そんな乱暴なことが乱暴な文字で書いてあるのだ。

そしてそれが——〈父の意思〉であると。

(ああ——)

あの人の言葉に、嘘はなかった。

父はちゃんと僕のことを考えていたのだ。

考えたうえで、僕と距離をおいていたのだろう。

「父さん……」

今さらあふれた僕の想いが、紙の上のインクを滲ませる。

「いけないっ」と、僕は慌てて袖を擦りつけた。

(そうだ)

今は泣いている場合ではないのだから。

気を取り直して、もう一度文章に目を落とす。

攻めてきたのは東のタフィレン・西のアテリスの両方で、僕に「逃げろ」と書いてある。

つまり僕は、山脈のある北か海のある南へ行かなければならない。

——いや、選択肢なんて最初からないのだ。

僕がひとりでも行けそうなのは、どうせ山しかない。

「――よしっ」

持っていた〈レニティスの娘〉をできた隙間に差しこんだ僕は、日記を手に机のほうへと戻った。

メモ帳の横に立ててある羽根ペンを借りて、二ページ先――つまり、本来なら今日の日記を書かれるはずだったページに、日付を書き入れる。

それから。

――僕は北へ行く――

そう書き加えた。

あの人は、自分もすぐに出られるだろうと言っていた。

そうしたらきっと僕と同じように、この国の状況に驚き、理由を探ろうとするはずだ。

結果必ず、ここにたどりつくことになるだろう。

だってこの調子では、他にヒントなど期待できない。

そのために僕が、少しでもそれを残しておかなければならないのだ。

ただ、誰にでもわかるヒントでは、万が一他の人がやってきたときに困るから――

僕は羽根ペンを机の上に戻すと、日記を閉じてまた同じ位置へと戻った。

(ここはローノの方法に従っておこう)

でも本棚の下のほうでは、背の高いあの人は気づかないかもしれない。

自分の視線よりも少し上の段に目を這わせた僕は、本の背表紙を順に読んでいった。

〈実録・国の動かしかた〉、〈憎いあの子を手懐ける〉、〈一と〇の挟間〉、〈飢饉から脱するための十の方法〉、〈文字のない言語・スーフォニア語(スーフォネルト)を学ぶ〉、〈海流と漁業〉――

そしてやがて、僕は一冊の本に目をとめる。

「勇者の話か、懐かしいなあ」

それは〈伝説の勇者・魔物退治物語〉という本で、ちいさい頃に読んだことのある本だった。

しかも全五巻の大作。

これの一巻だけが机の上にあったら、あの賢そうな人ならばすぐに気づいてくれるんじゃないかな？

考えて、手を伸ばした。

爪先立ちでぎりぎり届く高さだ、抜いた本がそのまま頭上に落ちてきて。

「いっ――」

声にならない悲鳴をあげた僕は、しゃがみこみ頭を抱えたまましばらく、その場から動けなかった。

「ここに来るのもこれが最後かもしれない」と、鐘の塔で考えていた僕。
まさかこんな形で最後になるなんて、思いもしなかった。
ときおり城のほうを振り返りながら、静かな街のなかをできるだけ急いで歩く。
走ってもどうせすぐに疲れて歩いてしまうから、結果的にはこちらのほうが速いような気がしていた。

(静かなはずだ)

「この国を放棄する」とローノが書いていたとおり、国内に僕以外誰ひとり存在していないようだった。

建物は荒らされ、壊され、あまり原型をとどめていない。

それでも死体があったり血の臭いがしたりしない分、気はほんの少しだけ楽だった。

(バカだ、僕)

こんなにもショックを受けるほど、この国が大好きだったくせに。

ずっと魔法のそばにいらればそれでいいなんて、どうして考えることができたのか。

気づくのが、遅すぎた。

せめてみんなが無事ならいいと、祈りながらも足を動かしつつける。

「あの本の……勇者みたいにはなれないけど」

誰もいないのをいいことに、決心を口に出して。

「僕は僕なりに、この国を――」

左手は父からもらった腰の棒に。

右手はあの人からもらったペンダントに。

そばにいらなくても、確かに僕を支えてくれる力がある。

なによりもそれを感じていた。

――今までのように、魔法に頼るのは楽だ。

だって魔法は本当に不思議な力を持っているし、世界を変えることもできる。

でもそれはあくまで魔法の力であり、少しも僕の力ではないから。

僕を信じ、背中を押してくれたあの人を、僕は裏切りたくない。

(父さんが望んだように、僕は自分の道を選んでみせる……！)

強い心が足をも支えているのか、疲れはほとんど感じなかった。

魔法の空間でずっと寝て起きるだけの生活をしてきたせいで、体力が余っていたのかもしれない。

徐々に近づいてくる山を見あげながら、どちらまわりをしようかと考える。

ファレスト山脈は、シェロニアを上から封じるような形で横たわっているのだ。

左右から狙われている以上その中央を縦断するのが最も安全ではあるのだけど、それは道なき道をゆくあまりにも険しいルートであり、そういう意味では最も安全ではない選択といえた。

(僕が越えられなければ、意味がない)

僕が生きて逃げなければ意味がないのだ。

多少危険が伴ってでも、左右どちらか寄りのルートを通るしかないだろう。

では、どちらに行く？

その答えが出る前に、僕は分岐点に差しかかってしまった。

足をとめ、右を見て左を見る。

当然のように人影はない。

(どちらに進んでも、同じなら――)

僕は腰の左側に差ししてある棒を手を取った。

今はもう父さんの形見である、謎の棒。

なんの素材でできているのかもわからないけれど、ちいさいながらもずしりとした重量感があった。両端のふちだけがやや厚くなっていて、横にして床に置けば中央の部分が少し浮いているように見える形だ。その曲面の部分にはびっしりと細工が施されており、芸術的な価値も高そうだということは、そっち方面の知識がない僕でもわかる。

もしかしたら、ただ飾って楽しむものなのかもしれない。

(でもそれなら、「常に持ってろ」なんて言わないか)

ローノは僕にこれを持ち歩かせるために、わざわざ専用のベルトをつくってくれたほどだ。

きっと父にとって、とても大切なものであったのだろう。

他国へ行くときも決して手放さなかったくらい。

そんなふうには父の想いがこもった棒なら、きっと僕の行くべき道を示してくれる――

そう思った僕は、片方の端を持ち身をかがめると、もう片方の端を地面につけた。

そのままではふちがやや厚くなっている分直立してしまうので、うまく転がるようにと棒に回転を加えながら手を放す。

まだ幼い頃、僕は城内に木の枝を持ちこんでは、こうやって遊んでいた。

回廊の分岐点にさしかかるたびに枝をまわし、倒れた方向に進んでゆくのだ。

その遊びに夢中になっていて、いつもならば絶対に足を近づけない塔のほうへと行ってしまったのも、今ではいい思い出。

当時は「塔に魔物が棲んでいる」と脅されていたのだ。

だから「近づいてはいけない」と。

けれど実際そこに棲んでいたのは、今まで見たこともないような素晴らしい景色と心地いい風であり、僕はひと目で気に入ってしまった。

同時に、みんなから騙されていたことに気づいた。

あのとき、僕は泣いて怒ったけれど、今ならちゃんとわかる。

みんなは別に僕を騙して喜んでいただけではなくて、もっと単純に、高い塔が危険だから近づかせたくなかっただけなのだ。

決して、嘘をつきたくてついていたのではないのだと。

そういうのが積み重なって、しだいに僕は自分が嫌われているのだと思うようになった。

みんなはそんな僕にそれ以上嫌われないよう、僕から離れた。

きっと、そういうことなのだろう。

(父さんだけじゃない)

みんなだってちゃんと、僕のことを考えてくれていたんだ。

――どうして僕は、気づけなかったんだろう？

「左、か……」

くるくると回転した棒は、迷う余地もないほどはっきりと左を示して倒れた。

僕はそれを拾いあげ、軽く土を払ってから腰のベルトへと戻す。

身体を左の道に向け、一步一步確実な足取りで、再び歩きはじめた。

(今度こそ、僕は間違えない)

間違っではいけないのだと。

進む足に、ひとつずつ想いを乗せて。

誰もいないのがわかっていても、耳を澄ませながら。

狙われているのだから、常に気を抜くわけにはいかなかった。

ひたすら歩く。

やがて山の中腹にさしかかると、放牧されている家畜たちがおいしそうに草をほおぼっているのが見えた。

相変わらず人は見えないけれど、牛や羊たちも殺されずにすんだようでほっとした。

同時に、ちゃんと残してってくれたことが嬉しかった。

だってそれは、ここに戻ってくる意思があるということだから。

「……そういえば、僕もおなかすいたなあ」

魔女の空間を出てから、初めて感じた空腹。

本当はもっと前からあったのかもしれない。

でもあまりの状況に、そこまで頭がまわらなかったのだろう。

(僕も家畜たちと同じように、その辺に生えてる草を食べられたらいいのに)

思うだけなら自由だけど、さすがにそうもいかない。

あまり期待しないようにしながら、僕は右腰に提げている小袋のなかを探った。

この袋は、城を出る前にもう一度自分の部屋に戻り持ってきたものだった。

非常事態のときにはこれだけでも持っていくようにと、ずっと昔に乳母のシェフミアが用意してくれていたもの。

記憶があまりにも古いのでまだあるのか不安だったけれど、以前教えてもらっていた場所と同じところにちゃんと置かれていた。

なかを確認する余裕もなくそのまま持ってきてしまったから、もし中身が当時のままなら食べものは絶望的だった。

袋のなかで、ごそごそと手を動かす。

別に悪いことをしているわけじゃないのに、ちょっと嫌な気持ちになってくるのはなぜだろう

。

(ん？　なんか紙に包まれたものがあるな……)

普通のものならば、わざわざ紙に包んだりはしない。

おそるおそる取り出してみると、その紙包みは僕の手にすっぽりと入るほどの大きさで。

しかし思ったほど、汚れてもしわしわでもなかった。

中身はなんだろうと、足もとに気をつけながらあけて見る。

もし本当に食べものなら、転んで落とすわけにはいかない。

一枚二枚と紙を外すと、出てきたのは赤黒い物体だった。

ずいぶん硬く、カラカラに乾いている。

においを、嗅いでみた。

(これ、干し肉だ！)

普段ならば、そもそも肉を長期保存する理由がないため、ほとんど目にする事のない代物。

でもそれは確かに肉のにおいだった。

しかも、軽く見る限りはまだ食べられそう。

僕が知らなかっただけで、袋の中身は定期的に入れ替えられていたのだろうか。

おそるおそる口に運んで、噛んでみる。

噛み切るにはあごの力と手の力両方、しかもフルパワー必要なほど硬かったけれど、口のなかに入ってしまうえば唾液という水分がある分、飲みこむのに不自由ないくらいには柔らかくなった。

正直そうおいしいわけではない。

でも今は、我慢するしかない。

わずかしかない干し肉を、よく噛んで少しずつ飲みください。

手を動かすたびに僕は、自分がどれだけ恵まれた生活をしていたのかを、思い知るのだった。

歩いているだけなのに、息が切れる。

のぼり坂は僕が思うよりもずっと厳しく、僕の体力を容赦なく奪っていった。

慣れない山道に何度も転び、伸びた枝に肌を引っかかれ傷を増やしながらも、歩くことだけはやめなかった。

陽が落ちても、月明かりだけを頼りに足を動かしつつけた。

僕が部屋から持ってきた袋のなかには、干し肉以外に石や金属のちいさな板なんかが入っていて、それが火をおこすための道具だということはわかったのだけど。

残念ながら、僕にはその使いかたまではわからなかった。

だから歩くしかなかったのだ。

それでも、月は常に僕のことを照らしてくれるわけではない。

意地悪な雲が光を遮って、足もとがまったく見えないほどまっ暗になってしまったときには、さすがの僕も足をとめた。

(月が雲に隠れてるあいだは、休んだほうがいいのかなあ)

前に進んでも、怪我が増えるだけかもしれない。

いっそこで寝てみようか？

と、野外で寝たことなど当然ない僕は、少しの好奇心もあってそんなことを考えた。

――甘かった。

(む、無理だっ！)

試しに寝っ転がってみたむき出しの地面は、僕が想像していたよりもはるかに硬く、また、歩いているあいだは気づかなかった寒さを感じてしまう。

こんなところで寝ていたら、凍死まではいかないまでも風邪を引いてしまいそうだった。

再び立ちあがり、身体中についた土を払った僕は、もう一度前を向く。

(きっと誰かが僕に、休むなって言ってるんだ)

そう言い聞かせて、また歩き出した。

手探りで。

ただひたすらに。

何度雲が邪魔をしても、もう休まなかった。

やがてだんだんと空が明るくなってくると、僕は一度足をとめ、長いため息をひとつ吐いた。

予想したとおり身体の傷は増えたものの、無事に朝を迎えられたことに対する安堵の息だ。

幽霊の存在など信じていない僕でも、やはりひとりの夜は怖い。

ましてこんな山のなかなら、魔物でなくとも野生の獣に襲われる可能性だってあるのだ。

黙って寝ていられなかったのは、なにも硬さや寒さのせいだけではなかった。

――こんなこと言ったら、ローノは鼻で笑うのだろうけど。

その面影を描くように、ついと仰ぎ見た空にはやさしい輝き。

(……太陽がこんなにも嬉しいものだったなんて、知らなかったな)

気づかなかったんだ、僕は。

その光も、あたたかさも。

失われてから初めて気づけたものが、その存在を主張するようにのぼってゆく。

これから一体どれだけのものを、僕は失い気づくのだろう？

旅の行く末を案じて考えた――そんなときだった。

がさがさと、急に周りの樹木が揺れはじめたのだ。

強い風が吹いたわけではない。

明らかに不自然な揺れかた。

僕は空から顔を戻して、ぐるりとあたりを見まわした。

(誰かいる……？)

気配は感じられないけれど、そもそも僕はそんなに鋭いほうではない。

特別な訓練を受けたわけでもないし、城の兵士たちのように剣を振るっていたわけでもない。

自分の感覚など、あてにならない。

そのことをよくわかっている僕は、疲れた足を引きずりながらも走り出した。

明るくなればこっちのもので、山歩き自体はだいぶ慣れたため転ぶことはほとんどなくなっていたけれど、鉛のような重さが僕の足を引っ張る。

足が足を引っ張るなんて、本当に冗談みたいな話だ。

「――い、逃げだぞっ」

「追いかける！」

後ろから声が聞こえた。

やはり人がいたのだった。

(なんだ!? どちらかの国の追っ手か?)

残念ながら振り返って確認する余裕などないから、僕は必死に足を動かしつつづけた。

動け！

捕まったら全部台無しなんだから！

自ら叱咤するも、疲れはてた身体にはあまり効果はなく。

徐々に間をつめられ――やがて追いつかれた。

後ろから右肩を掴まれ、土の上に押し倒される。

「……っ」

鼻を直撃することはさけたかったから、横を向いて顔の左側を犠牲にした。

でもそのおかげで、僕を追いかけていた人たちの姿をはっきりと見る事ができた。

(えっ?)

おかしい。

どう見ても、他国の兵士という感じではない。

ボロボロの服を着て、伸ばし放題の髪とヒゲ。

おまけに目つきが悪すぎる。

「捕まえたぞっ、兄貴」

「バ〜カ！　せっかくの上等な絹を、土で汚すなよ」

「これくらい洗えば取れるだろ。それより破かないことのほうが重要じゃないか？」

「……それもそうだな」

取り囲んでいるのは五人ほど。

僕が起きあがれないようにだろう、ひとり腰に乗っている。

「あなたたちはなんだっ、僕から降りろ！」

そう声を荒げたものの、彼らの会話からすでに予想はついていた。

(きっとこの人たちは、山賊だ)

でも他国の追っ手ではないのだとわかって、少しだけ安堵する。

狙われているのはどうやらこの〈服〉なのだ。

僕は用意されたものを着ているだけで詳しいことはわからないけれど、僕が王子である以上それなりのものを着せられていたのだろうことは、簡単に予想がついた。

「おまえこそなんだ？　お子ちゃまがこんない素材の服着てんじゃねーよっ」

「っ！」

言いおわると同時に、目のすぐ前の地面にナイフを突き立てられる。

やったのは僕の上に乗っている男だ。

気がつくのと、全員がその手にナイフを握っていた。

「おい、身ぐるみ剥いじまえ！　他にも金になりそうなものは盗っておけよ？」

先程「兄貴」と呼ばれていた男が命令を出す。

それを合図に、僕の身体は地面の上でぐるりと反転させられた。

「ちょ……やめろ！」

なにが楽しくて、こんな山のなかを裸で歩かねばならないんだ。

僕は上半身を動かして必死に抵抗した。

向こうだって服が破けたら困るのなら、そう乱暴にはできないはず。

そういう考えがあった。

「おとなしくしろよ、殴られたいのか？」

「――む？　ちょっと待て。そいつ、腰になにか変なもんつけてるぞ」

「なに？」

「あ……！」

左腰の棒が奪われる。

父の――シェロニアの形見が。

「返せ！」

「うるせえっ」

叫んだとたんに殴られて、口のなかを噛んでしまった。

血の味がじわり広がる。

「おまえはさっさと服を脱いでりゃいいんだよ！」

「く……っ」

「しかしこの棒、なにに使うんだ？ 細工はやけに細かいし、高く売れそうなんだがな」

子分から棒を受け取った男は、おもちゃのように宙に放り投げもてあそぶ。

それを横目に僕は、とうとう上着を一枚脱がされてしまった。

「おっ、こいつ首にも変なもんぶらさげてるぜ」

「なんだこれ？ 金細工か？ しっかり下手くそなもんだなあ。これどうする？ 兄貴」

「本当に金ならまた溶かせばいいんだ、一応もらっとけ」

「へい」

その言葉に一瞬、僕の頭のなかはまっ白に塗りつぶされた。

(また溶かせばいい、だって?)

そんな。

そんなこと一一許すわけにはいかない。

馬乗りになった男がペンダントに手をかけようとした瞬間、僕は懸命に腹筋を使って首を起こすと、思い切りその手に噛みついてやった。

「いってえ！」

それからむちゃくちゃに身体を動かして、なんとかその男の下を抜け出す。

「待て、この野郎っ」

それから僕がとった行動は一一とりあえず、〈逃走〉だ。

だって城からほとんど出たことのない僕には、初めてのことが多すぎる。

取っ組みあいのケンカなどしたことがなく、あの棒を返してもらおうと殴りかかったところで、結局また同じ状況になるであろうことは目に見えていた。

それよりならまだ、逃げたほうがましだ。

(もう、魔女には頼れないけど)

僕にはまだ、前に進める足がある。

それでもただ逃げるのは癪だから、なにか武器になるものはないかとあたりを見まわした。

向こうは全員ナイフ所持、丸腰ではあまりにも不利だった。

一一その前向きな行動が、僕を助けることになる。

「あ……！」

道の左側に広がる林の向こうに、テントの頭が見えたのだ。

しかも、ひとつじゃない。

僕はとっさに方向転換をし、山道をそれてその林へと入った。

足もとには木の根がはびこりいたるところから枝が飛び出し、当然道がある部分よりも走りにくくはあったけれど、それは山賊たちにとっても同じことだろう。

「すみませんっ、誰か！」

乾いた喉から、声をしぼりだす。

「誰かいませんか！」

声がひっくり返っても、かまわなかった。

一一魔女に頼らなくても、誰かに頼ったら同じこと？

心と頭のなかをよぎるそれを、僕は否定する。

だって魔女に頼ってはいけないのは、魔女が人智を超えた力を持っているからなのだ。

誰でも助けてもらえるわけではないし、助けてもらえたとしてもお返しができるわけでもない

。

(だから、ずるい)

僕は今でも、〈喜の魔女〉が好きだけれど。

もうやさしい魔女の手は求めないと、決心していた。

支えにするのは、心のなかでだけにしようと。

走りながらも、奪われそうになった出来損ないの鳥を握りしめる。

(誰かに頼るのが、いけないんじゃない)

大切なのは、その誰かのためにこちらもなにかをしてあげられること。

「誰か僕を、助けてください！」

林に終わりに、叫びながら飛びこんだ。

視界の先には――追いかけてくるやつらと似たような人たちが、いた。

畏だったのだろうか。

このテントは山賊のもので、僕は追いつめられてしまったのだろうか。

僕が動きをとめた一瞬を見逃さず、後ろから男たちが襲ってくる。

「ったく、手間かけさせやがって」

今度は首に腕をまわされ、さらに目の前にナイフを突きつけられた。

「うぐっ……」

それを見たテントの周りにはいる人々は、みんな一様に驚いた顔をしている。

(え——驚いた、顔……?)

この山賊たちの行動に驚いているのなら、彼らは仲間ではないのだろうか。

片目で痛みをこらえながら、僕は素早くあたりを見まわした。

テントは全部で十くらいあり、その周りでお世辞にもきれいとはいえない格好の男性たちが、なにやら作業している。

そして手をとめて、こちらを見ているのだ。

助けてくれそうな気配は——残念ながら、ない。

「ほら、さっさと脱がせろ！ 客の前ならこいつだって脱ぐかいがあるだろう」

あごに引っかかった腕が、軽々と僕を持ちあげる。

足は地面から離れ、男たちはこれさいわいと僕のズボンを脱がそうとする。

(冗談じゃないっ)

「やめろって言ってるだろ！」

近くにあった顔を蹴り飛ばした。

「こいつっ」

突きつけられたただけだったナイフが、とうとう僕の顔に振りおろされる。

——前に。

(えっ?)

白く細い腕がひよろり伸びてきて、今まさに振りおろされようとしていたその手を掴んだ。

見ると、いつの間にやってきたのだろうか、簡素な赤いロングドレスを着た女性が、そこに立っていた。

美しく波打つ金髪を、まぶしいほどに揺らして。

「なんだおまえっ」

「邪魔をする気か!？」

その表情は、なぜか、〈慈愛〉に満ちている。

「アナタたちは山賊、この子は被害者。それでいい？」

少しの動揺も見せず尋ねてくる女性に、僕は必死にうなずいた。

「そう……この辺に山賊がいるって、やっぱり本当だったの、ね！」

「ね！」のところを力こめながら女性は、捕まえているナイフを持った男の手をそのまま、

男自身のほうに向ける。

「ぐっ」

不意をつかれた形になったのか、男はそのせいで自分の顔を切りつけてしまい、僕の首を捕まえていた腕を緩めた。

おかげで僕とのあいだに少しの隙間ができたから、僕はそれを利用しひじで胴を強くつついてやる。

「っ……」

今度は完全に、腕が離れた。

地面に足がついた勢いで走り出すと。

「こっちにおいで」

ぐいと手を引っ張られたから、そのまま女性の後ろにまわりこむ。

「この女あ……そんなドレスで俺たちと戦おうってか!？」

「しかも丸腰だぜ。ずいぶんとなめられたもんだなあ」

(あ！)

僕をかばうように広げられているその手には、確かになにも握られていなかった。

さっきはナイフを振りおろそうとした男の手を簡単にとめていたから、その細身な身体からは想像できないほどの力があるのだろう。

でもだからって、男五人を軽くいなせる保証はどこにもない。

むしろ難しいと、僕には思えた。

(く……っ)

なんとかしたいと、僕は一度女性から離れて立ち並ぶテントのほうへと駆け寄る。

「ほら、ガキは助けたおまえをおいて逃げちまったぜ？」

「誰が逃げるか！」

そこにはまだ、驚きの表情で固まったまま動けないでいる男性たちがいたのだ。

僕はいちばん近い男性に掴みかかると。

「すみませんっ、なにか武器はありませんか!? お願いします、貸してください！」

戸惑いはなかった。

なぜなら、彼らは女性がしているのと似たような装飾品を身につけていたから。

おそらく女性の仲間なのだろうと思ったのだ。

すると声をかけられた男性は、はたと我に返った様子で。

「――ああ、とっておきの武器を貸してやろう」

そうにっこりと、笑ってくれた。

「本当ですかっ!？」

思わずつめ寄る僕に、「うんうん」と何度もうなずき。

「ブロート・エボウイ」

そばにいた他の男性に、なにかを告げた。

(え?)

驚いたのは、その言葉が初めて聞いたものだったからだ。

けれど告げられた男性は当然わかったようで、近くのテントに駆けこんで行く。

一体なんて言ったんだろう？

気にはなるけれど、今の僕には待つしか選択肢がない。

「とっておきの武器を貸してくれる」と言った、この男性を信じて。

――しかしそのあいだにも。

「なあおまえら、俺たちが悠長に待ってやるとでも思っているのか？」

女性と男たちの距離は、縮んでいる。

それでも女性はまったく動じずに、それどころか。

「そういえばそうね。じゃあ――」

また不意打ちで、いちばん左にいた男を華麗に蹴り飛ばした。

「こちらから仕掛けようかしら？」

さらにすぐその右の男を。

ドレスの裾などものともしない素早い動きで、次々にしとめてゆく。

(つ、強い……！)

僕が武器を手に、加勢する必要はないのかもしれない。

そう思った僕の肩を、誰かがぽんと叩いた。

振り返ると、これまで見たこともないくらい巨大な男性がそこにいた。

「あとは任せておきなさい」

そう告げるかのように、深くうなづく。

(この人が、とっておきの武器？)

どう見ても人間ではあったけれど、その比喩はきっと間違いではないのだろう。

このテント群のどこのテントに入れていたのか、縦にも横にも信じられないくらい大きかった

。

「こらテアルー、わしの出番をなくすんじゃない」

そう言いながら、のっしのっしと歩いてゆく。

「えっ――!？」

その身体の大きさに、さすがの山賊たちも驚いているのか、一瞬動きをとめた。

その隙を見逃さず、女性の――テアルーさんの蹴りが再び炸裂する。

どうやら足技が得意なようだ。

「さあ山賊さん、どうする？ アタシは蹴り専門だけど、この人は〈潰し〉専門なのよねえ。アナタたちみたいに細い人なら、生きて帰れないかもしれないわね！」

テアルーさんがあまりにも嬉しそうに言うから、山賊たちの表情は一気に恐怖へと変わった。

「……くそ、行くぞっ」

「え？ 兄貴～」

「収穫はあったんだ、満足しておけ」

「へーい」

そんな会話をしながら、よろよろと立ちあがり逃げていく。

その手には確かに、最初に奪われた僕の上着と例の棒が、しっかりと握られていた。

「あ……っ」

気づいたけれど、今は諦めるしかないのだろう。

せっかく助けてもらったのに、また願いごとをするなんてあまりに自分勝手だ。

おりをみて、自分でどうにかするしかない。

(それよりも、今は――)

僕はテアルーさんと巨人さんに駆け寄り、心から頭をさげた。

「助けてくださって、本当にありがとうございました！」

それは、城にいた頃にはあまり口にしたことなかった言葉だ。

誰のおかげで生きているのか、考えたことなんてなかったから。

でも僕はきっと今までも、こうして守られて生きてきたのだろう。

僕自身が気づかなかっただけで。

だから僕は、これまでの分もあわせて言葉に想いをこめた。

今の僕にはそれしかできなかつたから。

するとテアルーさんは下を向いたままの僕のおごを掴み、ぐいと上に引っ張った。

(いたたた)

ただ顔をあげさせたかっただけなのだろうけれど、なかなか乱暴だ。

「礼はいらないわよ、少年。アナタだってアタシを助けようとしてくれたんでしょ？」

「えっ？」

「そうだ、だからわしが呼ばれたんだよ」

「……………」

話が、よくわからなかった。

僕がなにも言えずに瞬きをくり返していると、横から他の男性が口を挟んでくる。

それは僕が最初に声をかけた人だった。

「つまりな、おまえさんがあのままテアルーの後ろに隠れていたり、逃げ出したりするようなら、最後まで助けるつもりはなかった、ということさ」

「あ……！」

(じゃあ僕が、一緒に戦うための武器を求めたから？)

だから助けてくれたのか。

だからそれを見極めるために、他の人は手を出さなかったのか。

「アタシたちは流浪の民・スーフォニアよ。――ああ、このあたりではレニティスって言うんだっけ？ ……まあいいや。だからね？ そう簡単には外部の人間を助けたりしないの。お金がもらえるなら別だけどさあ」

言いながら、テアルーさんはいたずらっぽく笑う。

(そうか……)

僕はローノの部屋にあった、〈レニティスの娘〉という本を思い出した。

昔読んだその本のなかにも、確かこんなエピソードがあったのだ。

レニティスは仲間意識が強く、外部との接触はあまり好まない。

よって仲間以外の人を簡単には助けたりはしないから、ときとして冷徹な民族と見られることもあったという。

でもそれは逆にいえば、仲間のことを助けようとしてくれるのなら手を貸すということ。

仲間を真に大切に想う気持ちが、そこにあるだけなのだ。

「それよりおまえさん、山賊に狙われるだけあってずいぶんといい身なりしてるじゃねーか。一体どこの坊っちゃんだ？」

「え？ ……と」

本当のことは言わないほうがいいだろう。

それに、もし今僕がシェロニアの王子だと告白しても、それを証明するものはなにもないのだ。

——唯一証明できそうだったものは、さっき奪われてしまった。

「僕は、シェロニアから逃げて……」

ゆっくりと口に出しながら、先を考えた。

しかし考えたそれを披露するまでもなく、巨人さんが突然僕に抱きついてきて。

「おおっ、あのシェロニアから来たのか！ それは大変だったなあ」

軽く泣きはじめてしまった。

泣かれるほどひどいシェロニアの噂が、こんな山中にまで伝わっているというのか。

国が放棄されてから、まだ数日しか経っていないというのに。

「あ、あの……」

巨人さんはなかなか泣きやまず、戸惑った僕が顔をあげると。

「じゃあもしかして、行くところないの？」

それがよくあることなのか、目をあわせたテアルーさんはごくごく普通に問いかけてきた。

(行くところ？)

訊かれて初めて考える。

ないのは確かだった。

だって僕の目的は逃げることであり、シェロニアから離れること。

目指す場所があるわけではないのだ。

僕がおずおずとうなずくと、テアルーさんは満面の笑みを浮かべて。

「じゃあしばらく、アタシたちと一緒に行動してみる？」

僕を流浪の生活へと、誘ってくれたのだった。

シェロニアを出る前に、俺は腹ごしらえをした。

食べたのはもちろん人間――ではなく、その辺の壊された家から失敬したパンなどである。

ついでに日持ちのしそうなものを、やはりその辺から借りた小袋に入れて、腰に提げた。

同意のうえの放棄とはいえ、建物が壊され生活必需品も残されたままのところを見ると、みなよほど急いで出ていったのだろうことがわかる。

(まったく、一体なんだっていうんだか)

王が死んだところで直系の王子がいるのだから、タフィレンもアテリスもそう焦ることはないはずなのだ。

王がそれらの国へ行き、なにをしていたのかはわからない。

でもそれはきっと、リノにはできないと決まったものではないだろう。

そうでなければとくに、ローノアードにそれを教えていたはずだからだ。

最初からできないとわかっている者に、選ばせる意味などない。

それなのに、両国はシェロニアに攻めこんできた。

王の代行者であったローノアードは、それを受けて国を放棄した――。

主権者によって放棄された国は、その国がどこのものになるかが決まるまで立ち入り禁止となる。

〈大陸法典〉でそう定められているから、今この国には俺以外誰もいない。

――のだが、そもそもそれをおとなしく守っていること自体おかしくはないか？

シェロニアと結ばれていた同盟はあっさり破ったのだ、〈大陸法典〉にこっそり背くことだってなんとも思わないかもしれない。

たとえば数名入りこんでたって、見張りがいるわけではないのだから、ばれることはまずないだろう。

それなのに。

何度も登場せざるをえない、この言葉。

それなのに、現にこうして誰もいないのは……？

(目的はもう、果たしたってことなのか)

最初に攻め入ったときに。

だから簡単に出ていったのだろうか。

「――っと」

考えながら歩いているうちに、俺は山脈を越えるための分岐点にさしかかった。

ファレスト山脈には、山脈の中央を縦断する道が存在しない。

もしそれをやろうと思ったら、いちばんきつい傾斜のところを、道を切り拓きながら歩かなければならないのだ。

距離的には最も近いが、とても上策とはいえなかった。

よって少し遠まわりにはなるが、東寄りか西寄りの道に行くしかない。

もしかしてリノの後ろ姿が見えないかと、左右を確認する。

残念ながらそれはなかったが、俺は違うものを発見した。

(なんだ？ 看板か……？)

左の道の脇に、古ぼけた看板が立っていたのだ。

近づいて内容を確認すると、今にも消えかかりそうな文字で。

——この先土砂崩れのため通行禁止——

そう書いてある。

選ぶまでもないようだった。

(このあたりは山脈のせいで雨が多いからな)

納得して分岐点まで戻ると、俺はそのまま右——東へと向かった。

そこからは、少し走る。

半分魔女の血が混じっているせいか、俺は基本的には普通の人間よりも頑丈だった。

ここまで歩いてきたおかげですっかり疲れはとれていたので、少しでもリノに追いつこうと思ったのだ。

しかし行けども行けどもリノの背中は見えず、とうとう日が暮れてしまった。

さすがに夜はリノも動かないだろうと俺は、適当な場所で暖をとりながら眠ることにした。

シェロニアに来るまではいろんなところを旅していたのだ、野宿にも慣れている。

人間以外の食料を確保するのも簡単だった。

——だが結局は、リノのことが心配でそう長くは眠ってられず、夜が明ける前に再び走り出す。

我ながら「なんて過保護なんだ」とは思うが、リノは山道を歩いたことなどないだろうから、心配は拭えなかった。

そうして空が白じんできた頃、俺はムーテルというちいさな町についた。

実はファレスト山脈を越えるためのふたつの道は、越えた向こう側でまた交わっているのだ。

その焦点にあるのがこのムーテルで、山越えする人のための道具や食料の販売、山越えしてきた人のための休憩所など、ちいさいながらもそれなりに賑わっている町だった。

運よくすでにあいている休憩所があったので、入っていくとカウンターにいた初老の男性と目が合った。

「おや、ずいぶん早い時間に山を越してきたんだね。なにか食べるかい？」

男性は店の主人らしく、鼻の上にのったちいさな眼鏡を抑えながら訊いてくる。

「……よくわかるな、俺が越してきた者だと」

ここにはこれから山を越そうとする者もやってくるのだ。

疑問に思って首をかしげた俺に、主人は笑って。

「そりゃあその、足もとを見ればね」

言われてとっさに下を見た。

(一一！)

道があるとはいえ、長いこと山を歩いてきたそこは驚くほどに汚れていた。

「なるほど」

感心の声をあげてから、カウンター席に腰かける。

朝早いこともあって、店内には俺しかいない。

「チャアトとパンをくれ」

「はいよ」

注文すると主人は、眼鏡を外してから手を動かしはじめた。

もしかしたら、これまで料理のなかに眼鏡を落としたことがあるのかもしれない。

ちなみに、チャアトというのはこのあたりでよく食べられるスープ料理のことで、材料は……
正直よく知らないが、牛の肉が入っていて、赤茶色をした食べものだった。

これがなかなかおいしいのだ。

料理が出てくるのを待ちながら、俺は店内の様子を観察する。

入口のあるこちら側の空間には丸テーブルが四つほどあり、俺がシェロニアで通っていた酒場に雰囲気がよく似ていた。

違うのは、店の奥にある広間だ。

そこは土足厳禁で靴を脱いであがらなければならないが、その分自由に座れるし足も伸ばせる、たとえ寝たって文句は言われぬ、休むには最適な場所だった。

だからこそこういう店は、休憩所と呼ばれている。

一一もっとも、今の俺には悠長に休んでいる暇などないのだが。

「はい、おまちどう」

火にかけてあたためるだけだからだろう、チャアトとパンはすぐに出てきた。

「ありがとう」

ごく自然に礼をいい、スプーンを取る。

(最初の頃は、それができなかった)

やさしくされることに慣れていなかったから。

俺が〈魔女の子〉だと知らない人々は、あたりまえのように俺に笑いかけてくれたが、その笑顔にどう反応していいかもわからなかった。

そんな俺を「恥ずかしがり屋だねえ」と誤解したやつもいたが、そう言われたときは本当に心から恥ずかしかったものだ。

スープを口に運びながら、ひとり思い出し笑いをしていると。

「面白い味でもしているかい？」

主人に不思議そうな顔をされたから、また笑ってしまった。

「いやーそれより主人、ひとつ訊きたいのだが」

笑顔をしまいこんで、尋ねる。

「少し前に、俺と同じように足もとを汚した子どもが来なかったか？ これくらいの背丈で、透けるような茶色の髪をした……」

もちろんリノのことだ。

この店がどれくらい早くからやっているのかはわからないが、他に店があいていない以上、リノだって寄るとしたらここしか考えられないのだった。

しかし主人は首を振り。

「迷子かい？」

逆に問いかけてきた。

俺はひとつ息を吐き、答える。

「まあ似たようなものだが、はぐれたんだ。山脈を越えるのに、西まわりの道は土砂崩れで通れないと書いてあったんで、東まわりの道を使ったんだろうと追いかけてきたんだがな……」

「土砂崩れ？ なんの話だい」

「えっ？」

スプーンを持つ手をとめ、まじまじと主人の顔を見る。

同時に、主人のほうもおかしなものを見るような顔で俺を見ていた。

「どちらの道も、土砂崩れなんか起こっちゃいないよ。現に昨日も西まわりでやってきた人がいた。……まあね、西まわりの道には山賊が出るらしいから、東まわりで来てよかったのは確かだけどね」

「————っ」

ではあの看板はなんだった？

それは自問した瞬間に自答できる問題だった。

(魔女のいたずら、か)

本当に忌々しい。

俺に好かれたがっているくせに、どうして嫌われるとわかっていることばかりするのか。

もしかしたらここに至る以前にも、魔女のいたずらがあったのかもしれない。

たとえばあの「僕は北へ行く」という言葉さえ偽物で、実はリノが南へ向かっているとしたら……？

(——いや、それでも、同じことなんだ)

結局俺は信じるしかない。

あれはリノの字だったと、信じて進むしかない。

すべてを疑ってしまっただけは、先へは進めないのだから。

それにあの魔女なら、きっと。

俺をリノから完全に離すことではなく、際どい距離でいじめることに喜びを見出すだろう。

なんだかんだで長いつきあいがあるからこそ、わかる感覚だ。

それなら——

「主人、その山賊ってやつらは、やはり金目のものを奪うのか？」

リノは王子だが、普段からそういったものはあまり身につけていなかった。

もし狙われるものがあるとすれば……あの、よくわからない棒だろうか。

すると主人は考えこむように手をあごにあて。

「そうだろうけどね、なにも金銀財宝だけじゃないらしい。売ってお金になりそうなものなら、たとえば着ているものすら盗むというよ」

「な……っ」

魔女の空間で会ったとき、リノは上等な絹を縫いあわせた服を着ていた。

おそらく普段から着ているものだ。

(可能性は、充分にあるな……)

「で、その山賊の隠れ家は？」

「おいおい、隠れているから隠れ家っていうんだらう？」

一度はそうおどけてみせた主人だったが、変わらない俺の表情を見て気づいたようだった。

「捜しているその子が襲われた可能性があるのかい？」

「わからない。だが、それも行ってみればわかることだ」

俺が言い切ると、主人は「そこまで言うなら」と苦笑を浮かべて。

「私も詳しくは知らないが、西寄りの山頂近くだとは言われているね」

「そうか」

それから俺は両手で皿を持ち、スープを一気に喉の奥へと流しこんだ。

パンは小袋のなかにしまい、かわりにコインを二枚置く。

「ごちそうさま」

立ちあがって出口へ向かうと、主人もそこまでついてきて。

「もしその子が来たら、引きとめておくよ。名前はなんていうんだい？」

ありがたいことに、そう言ってくれた。

「――〈リノ〉だ」

ローノアードの日記のおかげで、リノは自分の正体を隠さねばならないことを理解しているはずだった。

だからといってまったく別の名前にしてしまえば、俺がわからなくなるから、リノはきっとそう名乗ってくれるだろうと予想したのだ。

(リノは確かに、俺が追いかけるだろうことをわかっていたからな)

来た道を少し戻って、今度は東まわりの山道に入る。

半分ほど行ってもリノと会えないようなら、山賊に襲われたと考えていいだろう。

途中から山頂へと進路をとれば、隠れ家を探すのもそう難しいことではない。

けれどももし——もしリノを襲った相手が山賊ではなくて、タフィレンかアテリスのどちらかだったら？

それが考えられないわけではないんだ。

シェロニアから両国を通らずに脱出するためには、やはりこの山脈を通るしかないのだから。

でも同時に俺は、ひとつの確信を持っていた。

きっとやつらは、リノがすでに国外へ脱出したと思っているだろうと。

国が襲われたとき、リノが城にいなかった理由をやつらは知らない。

まさかそのあとリノが城へ戻るなど、本来ならば考えられないことなのだ。

だからやつらにしてみれば、リノはとっくに山脈を渡りきっているはずで、そこで待ちぶせすることにはなんの意味もないのだった。

(——まあ、半分くらいは俺の希望も入っているがな)

そうであればいい。

リノが無事であればいい、と。

考えながら俺は、西まわりの道とあまり変わらない、立ち並ぶ木々の壁に囲まれた細い道を歩いていた。

「……！」

その耳にふと、けたたましい犬の鳴き声が飛びこんでくる。

何事かと前方に目を細めると、この狭い道を塞ぐようにして馬車がやってくるのが見えた。

一般的なサイズの馬車ではあるようだが、山道を通るにはかなりぎりぎりなのだ。

おまけに、一台や二台の音ではない。

俺は仕方なく立ちどまり一歩林のほうに入ると、その馬車らが通りすぎるのを待った。

いちばん前の馬車を操っている御者が、「すみませんねえ」と頭をさげる。

そうして馬を操っていなければ、絶対に御者とはわからないような男だった。

褐色の健康的な肌には充分に発達した筋肉が見え、黒い髪は縮れて長く伸びていた。

何日か剃っていないだろうヒゲも伸び放題で、ヘルメットをかぶり炭鉱で働いていたほうがはるかに似合いそうだ。

(——ああ、そうか)

そこで俺は気づく。

彼らは〈レニティス〉なのだ。

レニティスとは、仕事を求めて世界中を放浪しながら生活する人々のこと。

よく種族なのだと思っている人もいるが、実はそうではない。

いちばん多いのは褐色の肌と黒い髪を持った人々だが、それ以外の人々もたくさんいるのだ。

また、その呼びかたも地方によってまったく違う。

このあたりはレニティスが一般的だが、もっと北のほうへ行くとメリレストやraisiaや
らミスラやら、いろんな表現がある。

独自の言語を操る彼らは自分たちのことをスーフォニアと呼んでいるらしいが、それらの意味はすべて〈流浪の民〉だ。

ただ待っているのもつまらないので、俺は通りすぎる馬車の台数を数えていた。

彼らは一体どれくらいの人数で行動しているのか、ちょっとした興味が沸いたからだ。

(人が乗っている箱型馬車が五台に、荷物が載った荷馬車が六台か)

どちらもわりと大きめの馬車で、箱型のほうは十人ほど乗れそうに見える。

小窓がついているもののカーテンが閉められているので、いくら俺の目がいいといってもなか
の様子を窺い知ることはできなかった。

荷馬車のほうに視線を移すと、移動先で彼らの住まいになるのであろうテントの材料や衣服、
生活必需品、食べものなどが、荷物を覆うようにつけられた大きな布の隙間から覗いている。

彼らはこの山中で生活していたのだろうか。

もしかしたら、シェロニアに行こうとした矢先にこんなことになって、とりあえず待機してい
たのかもしれないが。

(で？ うるさい犬はどこにいるんだ？)

鳴き声は徐々に大きくなりながら、まだ続いていた。

レニティスが犬を飼うのは、馬車の馬を守るためだというのを聞いたことがある。

それならば普通は馬の周りにいなければおかしいのだろうが、その犬はなぜかいちばん後ろを
駆けていた。

最後尾の馬車がゆっくりと俺の前を通過する瞬間、その御者と目があつた。

そいつは他の御者と違い、いかにもその道の格好をした男で。

「うるさくてすみません」

申し訳なさそうに、頭をさげてくる。

俺はちょうどいい機会だと、言葉を返した。

「いや……それより、ちょっと訊いていいか？」

列の最初や途中の馬車をとめてしまえば、後ろの馬車に迷惑がかかる。

だが最後尾の馬車なら簡単にとまれるし、このスピードなら追いつくのも難しくはないだろう

。

御者の男も覚悟していたのか、「どう、どう」と手綱を操ると馬をとめ、「なんですか？」
とこちらを向いた。

「このあたりで、これくらいの子どもを見かけなかったか？」

手で背丈を示しながら訊いてみると、男は「いいえ」と首を振る。

そのあいだにも犬は後ろからやかましく吠えていて、俺はそれに負けないようさらに大きな声で問いかけた。

「この辺には山賊が住んでいると訊いたんだが!？」

男は犬の声が切れた隙を狙って。

「私たちは遭いませんでしたよ」

そこで犬のひと吠えを挟んでから。

「では遅れますので」

そう断ると、手綱を引いて馬車を進めてしまった。

そのあとを、また犬が追いかけてゆく。

俺は道の中央に戻りその後ろ姿を見送りながら、ぼりぼりと頭を掻いた。

「ま、訊きたいことは訊けたからいいんだがな」

そんな呟きも、まだ鳴きつづけている犬の声にかき消される。

(一一行くか)

今度は心のなかで呟いて、また歩きはじめた。

この道にいなかったというのなら、やはり山賊に襲われた可能性が高い。

身ぐるみはがされるだけならまだいいが、下手をすれば人間そのものだって簡単に売買の対象にされてしまう世界だ。

奴隷として売られても愛玩用として売られても、リノにとってはつらいだろう。

そんなことになる前に、助け出してやらなければ――。

俺は前に続く山道を見捨て、道のない山頂のほうへと足を向けた。

道がないとはいっても、おそらく完全に〈ない〉わけではないのだ。

でなければ、住んでいる本人たちだってたどりつけないだろう。

必ずどこかに目印があるはずだ。

あたりを注意深く見まわしながら、一步一步確実に進んでいった。

踏みこむたびに足もとで草や根が折れ、俺の通った跡がくっきりと残る。

帰りの心配はいらないようだった。

「――！」

周囲を観察していた俺は、木の枝のかなり高い位置に白い布が巻きつけてあるのに気づいた。

それだけなら、たんに風で飛ばされたハンカチかなにかが引っかかっているのだろうと思うだけだが、残念ながら俺の視力はごまかされなかった。

(俺の足で百歩先くらいか)

同じように枝にくくられた布が見える。

きっとその、先にも。

これが普通の人ならば、次の布を目視することなど不可能だから、そこを目指して歩くといったことができない。

山賊たちだっておそらくは、その布を目印に方角で覚えているのだろう。
それならば、方位磁石さえあれば可能だ。
そうして白い布をたどること五回、とうとう俺は山賊の隠れ家を発見した。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

無言で見つめあっているのは、俺と山賊たちだ。

相手が何人いるのかはわからない。

少なくとも、一瞬では数え切れないほどの人数だった。

「……………なんだ？ おまえ」

やっと声を発したのは、そのなかのひとり。

おそらくリーダー格の男だろう。

ひとりだけやけに派手なバンダナを巻いていた。

かなり若そうだ。

声をかけられた俺は少し考えてから、答える。

「なんだと言われても、困るな」

そう、俺は本当に困っていた。

これから隠れ家に乗りこむつもりだったのに、なかからぞろぞろと出てきた山賊たちとばっちり鉢合わせしてしまったのだった。

「あっ、わかった！ こいつ山賊志望ですよきっと」

バンダナ男の隣の、ひょろりと長い男が手を叩く。

「……………そうなのか？」

うさんくさそうな目。

あたりまえだ。

きっと俺だって、そんな目をしているに違いない。

「いや、違うだろうな」

答えて場を繋ぎながら、俺は素早く状況を分析する。

(全員手に武器を持っているな)

これからどこかへ殴りこみにでも行くつもりだったのだろうか？

だとしたらどこへ？

じりりと、バンダナ男の足が動いた。

「出かけるのか？」

警戒しつつも、まるで昔からの友人のように声をかけてみる。

一瞬ぴくりと眉を動かしたバンダナ男だったが、それでも笑いながら。

「見てのとおりさ」

「そうか……」

(それなら隠れ家のなかには誰もいないのか？)

探るように見つめていると、バンダナ男が心底不思議そうに腕を組み。

「で？ おまえは結局誰なわけ？」

俺が殺気を隠しているからだろう、かなり油断しているようだ。

(ま、この人数だしな)

きっと俺ひとりに負けることなど、考えていない。

「俺は――」

多分何人かが、ごくりとツバを呑みこんだ。

「――〈魔女の子〉だ」

「……………えっ？」

あたりがしんと、静まり返る。

「聞こえなかったのか？ 魔女の子どもだと言ったんだ」

「ま、さか……っ」

「なあに、おとなしく言うことを聞いてくれりゃあ喰ったりはしないさ」

言いながら、俺は歩を進める。

信じたのか信じないのか、それでも山賊たちは左右に寄って俺の通る道をあけた。

中央に、バンダナ男だけが残る。

「ふんっ、どうせ嘘なんだろう？ そう言えばみないうことを聞くとしたら大間違いだ！」

冷や汗を浮かべながらも叫んだ。

「ならおまえがついてこい」

その首根っこを掴んで、ぐいと引き寄せる。

「俺が偽物だというのなら、怖くはないだろう？」

至近距離で見つめた、バンダナ男の顔が歪んだ。

「め、め、め、めがあ、あ、あか……っ」

そして口から、言葉にならない喘ぎがもれる。

気持ちが高ぶると、俺の眼は魔女と同じ赤い色になるのだ。

自分ではそれを確認したことはないが、よくこんな反応をされるので知っていた。

俺がバンダナ男を引きずるようにして隠れ家の入口へ向かうと、動きをとめていた他の山賊たちがいっせいに逃げ出す。

「わあああああ」

「喰われるぞ！ 逃げろーっ」

情けない叫びの余韻が、虚しく木々のあいだに残っていた。

「――ふんっ」

ひとつ鼻を鳴らしてから、横穴のなかに入っていく。

(本当はこんなこと、したくない)

俺は自分が〈魔女の子〉であることを心底嫌だと思っているし、そういう自分はその村へ捨ててきたはず。

それでも今、それを利用しなければならないのは、時間は――運命は俺たちを待ってはくれな

いからだ。

あの人数と戦ったところで勝つのは俺だろうが、それなりの時間がかかるのはわかりきっていた。

それに、だ。

リノを助けるのは、引いては自分のため。

自分が前へ進むためなのだ。

だからそのために〈魔女の子〉である自分の立場を利用するなら、それは間違いではないだろう。

――薄暗い隠れ家のなかを、進んでゆく。

目がいい俺には、暗くても大体のものが見えるため問題ない。

「は、放せっ！」

他の山賊はみな逃げてしまったというのに、バンダナ男は暴れてしつこく抵抗した。

そのたびに足をとめざるをえないので、耐えかねた俺はバンダナを奪い、〈ただの男〉にしてやる。

そしてそのバンダナで、男の腕を後ろ手に縛った。

さらに、今度はその縛った手を掴んで歩く。

つまり男は後ろ向きで歩くことになり、かつ腕を逆のほうに引っ張られるから。

「いだだだだだだだだっ」

肩が外れそうなのか、変な声をあげた。

「最近盗んだものはどこだ？」

それを無視して訊いてやると、さすがに諦めたようで。

「……………そこを、右だ」

ぽつり答えた。

この隠れ家は、山肌に掘られた洞窟だった。

まるで蟻の巣のように複雑につくられていて、案内役がいなければ目的地にたどりつけそうになかった。

(ひとり残しておいて正解だったな)

本当は隠れ家を調べおわったあと、なんの収穫もなかったら訊くつもりだったのだが、ちょうどいい。

左、右、右と、男の指示に従って歩いていくと、やがて少しひらけた場所に出た。

宝石を中心にさまざまなものが、ずいぶんと無造作に置いてある。

「売りもののくせに、テキトウなんだな」

「出すときにきれいならいいのさ」

男はやっと落ち着いたのか、そんなふうに応えた。

「いちばん最近盗んだものならそこだぜ。今朝下っ端のやつらが持ってきた」

腕は俺に支配されていて動かせないため、男はあごを使って示す。

そちらに視線を移すと、見覚えのあるものが視界に飛びこんできた。

「――！ これ、リノの服だ……」

駆け寄って手に取ると、そのなかからカラリとあの棒が落ちる。

これが狙われるかもしれないという見事に予想が当たっていて、俺はひとり笑ってしまった。

「ん？ なにがおかしいんだ？」

怪訝な目を向けてくる男に。

「いや――それより、この服と棒を持っていた子ども、どうしたかわかるか？」

「ああ、たまたまそばにいたレニティスの一団が保護したらしい。オレたちはさっき、そいつらに〈礼を言い〉に行くところだったってわけさ」

「え……？」

その言葉に、俺は耳を疑った。

(まさか、さっきの馬車のか？)

しかし俺が尋ねたレニティスの男は、子どもも山賊も知らないと答えた。

あのとき、犬がひどくうるさくて……

「あ……！」

(そうだ、あの犬っ)

馬を守るためにいるという、犬。

あの犬が最後尾の馬車に向かって吠えていたのは、それがいつもはいない馬車だったからじゃないのか？

それが〈魔女のいたずら〉であったから。

「……………はあ……」

思わず俺は、深いため息をひとつ吐いた。

嫌なのは、俺がここに来たおかげでこの棒を取り戻すことができたということ。

魔女のいたずらが百パーセント悪かったわけではないのだ。

手のなかの棒を、腰に提げた小袋に突っこむ。

頭が少し出してしまうが仕方ない。

服のほうは、リノには悪いが置いていくことにした。

レニティスと一緒にいるならば余分な衣服くらいあるだろうし、上等すぎる絹など今のリノにとっては足手まといにしかならない。

「――おい」

そこまで作業が終わったところで、ちょうど男に声をかけられた。

立ちあがり顔を向けると、男は今までとは少し違った、神妙な面持ちで俺を見ていた。

「なんだ？」

応えると、男はなにかを言いよどんだあと。

「オレを、喰うのか？」

その顔に、不思議と恐怖は見えない。

「オレを喰うのは勝手だが、そのかわり――あいつらには手を出すなよ？」

「……そうか」

男はここで覚悟を決めたのだ。

仲間が助かるのなら、自分は死んでもいいと。

だから俺に、従順になっている。

「『そうか』ってなんだよ！　ちゃんと約束しろよっ」

「それはできない」

「なにっ？」

「俺はもう、人間を喰わないと決めたから」

「な……っ」

その眼が落ちこちそうなほど、男は丸くした。

それから言葉の意味を咀嚼したのか、反抗的な口調でぽつりと呟く。

「なん、だよ……ただの脅しかよ……」

「喰えるのは本当だがな」

俺は笑ってやった。

「おい」

そして今度は俺が、声をかける。

「この服は置いて行ってやる。餞別だ。上等の絹だから、きっといい値で売れるだろう」

「はぁ!？」

「そのかわり――」

俺は男をその場に残して、部屋の出口へと向かいながら。

「仲間を大事に想えるその気持ちを、もっと別なことに生かせよ」

「っ……」

その言葉がよほど予想外だったのだろう、男の息を呑む音がはっきりと聞こえた。

男の動揺が。

(でもそれが、俺の本心だ)

自分の命を捨ててもいいくらい、仲間の命を大事に想えることなんてそうあるもんじゃない。

長いあいだ旅をしてきた俺だって、見つけられたのはリノひとり。

それなのにこの男は、あの山賊たち全員の命をかばった。

みな自分をおいて逃げてしまったというのに、こいつだけは誰をも裏切らなかった。

それはそれだけ、こいつが大きな器を持っているということ。

山賊などで終わるにはもったいない素材といえた。

だから表の世界で生きることを、諦めてほしくなかったのだ。

(シェロニアにいたおかげで、俺もずいぶんとお人好しになったもんだ)

暗がりの洞窟を光へと向かって歩きながら俺は、自嘲気味に笑った。

俺とリノの足を比べたら、明らかに俺のほうが速い。

しかし、今比べるべきは俺と馬の足で。

いくら俺でも、さすがに馬に勝てる自信はなかった。

(なんでこう、中途半端に〈魔女〉なんだろうな)

人よりも多少身体が頑丈なんてしょぼいものじゃなくて。

ほんの少しでも瞬間移動なんてものをできる力があつたなら、どんなにか実用的であつただろうか。

俺は〈喜の魔女〉に出会うまで、魔女たちが具体的にどんな力を有しているのか知らなかった。

――いや、出会ってしまった今でさえ、実はあまりよくわかっていない。

神出鬼没で、呪いといたずらが大好きなあの魔女は、きつともっと違う力も持っているのだろうと思う。

それを見せないだけで。

だから、そういう不透明な魔女の血を継ぐ俺にも、俺が知らない不思議な力が宿っている可能性はある。

以前はそれが死ぬほど嫌で、できればこのまま人間として死んでいきたいと思っていたのだが、今は――もしその力で、リノや、もしかしたらこれから出会うかもしれない大切な人を守ることができるのなら。

それもいいかもしれないと、思うようになった。

これからも、そう思えるように。

悪い力ではないように。

祈りながら俺は、ムーテルの町へと急いだ。

さいわいにも休憩所の主人は、俺と入れ違うようにしてやってきたレニティスたちのことをちゃんと覚えていて。

「実は心配していたんだ。彼らがシェロニアに行くと言ってここを通った直後に、両隣から攻められる事件があったからね。まあ私はてっきりどちらかの国に行ったのかと思っていたけれど、まさか山のなかにまだいたとは。本当にびっくりしたよ」

そう笑った。

「で？ 次はどこに行くとか、言っていたか？」

「ああ、今年は東の米が豊作らしい。時期にあわせて東へ向かうそうさ。とすれば、次に立ち寄るのは大道芸の町・メフィナだろう」

「ああ……」

その町なら、俺も行ったことがある。

ムーテルよりも少し大きいくらいの町で、中心には巨大な円形舞台があるのだ。

そこでは昼夜を問わず大道芸が行われていて、人々の目を楽しませていた。

また、大道芸人を志す者たちの憧れの場所でもある。

レニティスのなかには大道芸を仕事とする者もいるから、そこに寄るのはある意味必然のことだった。

「ありがとう、すぐに追ってみる」

頭をさげ、店内に入ることもなく行こうとした俺に。

「待ちなさい、私の馬を貸してあげよう」

「え？」

休憩所の主人は、必要以上に親切なことを言ってきた。

本当なら、そこでおとなしく喜んで借りておけばいいのに。

汚れすぎている俺には、それができない。

俺は身体を主人のほうに向け直すと。

「なぜだ？」

そこまでやさしくされる理由はないと、目で訴える。

すると主人は困ったように眉をさげ、胸の前で両の手を振った。

「そんなに睨まないでくれ」

それからあたりをキョロキョロと見まわして、人通りがないことを確かめると、ぐいと俺の腕を引き耳に口を近づける。

「実は、あんた以外にもその子を捜している人がいてね」

「――！」

そこで俺が脳裏に思い浮かべたのは、タフィレンとアテリスの刺客だった。

しかし――

「それがあの、シェロニアのローノアードさまなんだよ」

「え……？」

(ローノアード?)

それはもちろん、シェロニアが襲われたときリノのかわりに国を守っていた人物だ。

俺はてっきり、どちらかの国に囚われているのだと思っていたが……。

「ローノアードは無事なのか？」

「ああ、すぐに〈大陸法典〉によって保護されたからね。今はターリエットにいるはずだよ。そこへ向かう途中ここに寄って、もし〈リノ〉という名前の子どもが来たら保護してほしいと、言われていたのさ」

「……………」

ターリエットとは、大陸の中央にある建物の通称だ。

そこはどの領土でもない真に中立な場所。

〈大陸法典〉の制定・発布・改正を担う、どの国の人でもない真に中立な人々が暮らしている。

(そう、か)

シェロニアそのものが〈大陸法典〉によって保護されたということは、その王を代行してい

たローノアードもまた保護対象になったということなのだ。

そしてローノアードがそこにいる限り、タフィレンもアテリスも決して手を出すことはできない。

そこはある意味大陸上で最も安全な場所だった。

だがだからといって、リノまでそこに逃げこんでしまっただけでは困る。

なぜならその行為は、国を一―シェロニアを捨てることと同意だからだ。

つまり、今施行されている〈大陸法典〉による保護は、シェロニアという国を存続させるための保護ではないのだ。

あくまで、シェロニアがタフィレンのものになるか、アテリスのものになるか、それを話しあいで決めるために一時的に保護したにすぎない。

また、ローノアードはそのときたまたま王を代行していただけで、正統な後継者は他の誰でもなくリノなのだ。

だからリノの死が確認されない以上、リノ抜きでシェロニアの今後を決めるようなことがあってはいけない。

それも〈大陸法典〉に示されていることだ。

支配される側のシェロニアにも、どちらにつきたいか一応の選択権は用意されているのだった

。

命の安全を考えるなら、ターリエットに走るのがいちばんいい。

でもそれは、国の未来を売るということ。

(リノ一―)

おまえはどちらを選ぶんだ？

そしてこの主人は、どちらを選ばせようとしていたのだろう。

改めて俺は、睨みつけてやった。

(きっと気づいている)

ローノアードや俺が捜している相手が、一国の王子であると。

「リノを見つけたら、どうするつもりだった？」

低い声で問うと、主人はきょとんとした顔をして。

「どうってそりゃあ、どうしたいのか訊くつもりだったよ」

(ああ一―)

この人は味方だと。

俺はそのとき初めて思うことができた。

「馬を、貸してくれないか？」

今度は自分から告げる。

主人は本当に嬉しそうな様子で目を細めると。

「喜んで！」

俺を店の裏へと案内してくれた。

僕は他のレニティスたちと一緒に、テントを解体する作業を手伝っていた。

ここからすぐに離れるためだ。

「あの山賊たちが、仲間を連れてこないとも限らないからな」

僕に素晴らしい武器を貸してくれた男性――ベイフィルさんのその一言によって、とりあえず山脈の入口にある町・ムートルまで行くことになったのだ。

そこは、僕が山賊にからまれさえしなければ、あたりまえにたどりつくはずだった場所で。

逆にレニティスたちにとっては、来た道に戻ることになる。

そもそもテアルーさんたちは、シェロニアへ向かう途中だったのだという。

けれどつく前にあの事件が起こって、シェロニアに入ることができなくなってしまったから、仕方なくファレスト山脈の途中で待機していたという話だった。

そうして入国のチャンスを窺っていたけれど――シェロニアの王子である僕の登場によって、その可能性は完全に否定された。

僕はもちろん、自分が王子であることを明かしてはいない。

でも、しばらくあの国に立ち入りできないだろうことは誰よりもよくわかっていたから、そのことだけを伝えたのだ。

だから来た道に戻ることに、誰も不満はないようだった。

みんな慣れた手さばきで、移動のための作業を続けている。

僕もなにか役に立ちたいと、手の届く場所にあった柱にくくりつけられたロープを外しにかかった。

しかし。

「待って、リノ。そのロープを外す前に、こっちのロープを外さないと、その柱がアナタの頭の上に倒れるわよ？」

「えっ？」

不意にかけられた声に、僕は手をとめる。

もう半分ほど外してしまっていたから、手で柱を押さえたまま顔をあげたら、いつの間にか僕の後ろに立っていたテアルーさんが、自分よりも高い位置にあるロープを指差していた。

どうやら、この巨大なテントを解体するためには、かなり正確な順序でやらないと危ないようだった。

つまり、それを知らない僕は現状足手まといにしかならないということ。

そんな、手伝えない申し訳なさが顔に出てしまったのか、テアルーさんは僕にひとつ苦笑を見せると。

「まあ、アナタやアタシの背じゃ、こっちは届かないものね」

そうフォローしてくれた。

それから入口のほうを振り返って。

「ブロート・イトウトック・エティク！」

大声で誰かを呼んだようだ。

(ああ、そういえば)

レニティスたちは独自言語を持っているって、あの本に書いてあったっけ。

それでもちゃんと僕とも会話できているのがすごい。

彼らは一体いくつの言語を知っているのだろうか。

「アーミ・オウユック～」

テントの外から誰かが返事をした。

その声が例の泣き上戸巨人さんのものだったので、確かに彼なら届く高さだと納得する。

それからテアルーさんは、くるりこちらに向き直り。

「今ダンナが来るから、ちょっと待ってて」

「……ええっ？」

(だ、旦那!?)

それって、ふたりは夫婦ってこと!?

僕は思い切り一步退いてしまった。

「なんでそこで驚くのよ？」

軽く責めるような口調ながら、顔には笑顔を浮かべたままのテアルーさん。

正直言って、〈喜の魔女〉と同じくらい大人の魅力を放っていた。

全体的に細いのに、出るべきところは出ている、みたいな。

おまけに美人だし、やさしいし。

その気になれば誰だって捕まえられそうな――

(――って、なにを考えているんだ僕っ)

「アタシたち、そんなに似合わない？」

「い、いえっ、そういう意味ではなくて……」

「ちゃんと子どももいるのよ？ アナタと同じくらいの」

「えええっ!？」

さらに驚いて、思わずテントを押さえていた手を放してしまった。

僕の後ろから、ちいさな手がひょいと伸びてきてそれを支えてくれる。

「あらラトゥナ、ちょうどよかったわ」

また振り返ると、そこにひとりの女の子が立っていた。

テアルーさんの「ちょうどよかった」という発言から考えると、この〈ラトゥナ〉がふたりの子どもなのだろう。

その、やはりちいさな口が素早く動く。

「エドウナン・エット・オナティウサナウっ!？」

発言内容は当然まったくわからなかったけれど、その強い口調から怒られたのだということはわかった。

きっと、僕が柱から手を放してしまったからだ。

「ご、ごめん……」

迫力に圧されて頭をさげてみても、ラトゥナは納得がいかないようで、しばらく僕にわめきつづけていた。

――のだけど。

「エット・アラティウサナウ・イアナジアウー……んぐっ」

ラトゥナの後ろから伸びてきた手が、彼女の口をふさいだ。

当然僕にはその相手が見えている。

ラトゥナの父親である巨人さんだ。

ちなみに、名前のほうはまだ訊いていない。

「うるさい娘で申し訳ないねえ」

心からそう思っている顔で、巨人さんは謝ってくれた。

それからラトゥナには厳しい父親の顔を見せ。

「イウソクス・エッタマッドウ！」

おそらく怒っているのだろう。

そのあいだにテアルーさんが。

「子どもたちはスーフォニア以外と交流する機会がほとんどないからね。アナタが珍しいのよ、許してやって」

そうウインクしてくる。

(うわあ)

その仕草が、やはり魔女と重なる。

顔が熱を持つのをとめられなかった。

早くに亡くして母を知らない分、僕は他の誰よりも〈大人の女性〉によわいのだ。

そもそも魔女を求めていたのだから、きっと自分は母のかわりを求めているんだって……本当は、うすうす気づいていた。

「こらテアルー、子どもまで〈落とす〉んじゃない」

そんな僕の様子に気づいてか、娘を叱りおえた巨人さんがそんなことを口にした。

「なに寝ぼけたこと言ってるのよブロート。このテントさっさと片すわよ。もうこれが最後なんだから」

(巨人さんの名前、ブロートっていうんだ)

叱ったあとに叱られたブロートさんは、頭を掻きながらも。

「はいはい。じゃありノくんはラトゥナのほうを手伝ってくれるかな？ 子どもはみんなそっちを手伝っているから」

「わかりました」

どうりでテントのほうに子どもがいなかった。

どう考えてもこれは肉体労働なのだ、子どもの力でそう役に立てるものではない。

それからブロートさんはラトゥナになにかを告げると（きっと僕のことを頼んだのだ）、僕やテアルーさんが届かなかった位置にあるロープに手をかけた。

(ブロートさんまでいくと大きすぎるけど、背が高いっていいよなあ)

僕もいつかはあんなふうになれるのだろうか？

そんなことを考えながら見あげていた僕の手を、ぐいとラトゥナが引いてくる。視線をそちらに移すと、ラトゥナはなぜか少し顔を赤らめていて。

「ウカヤウ・オヤウキ」

多分、「行くよ」とでも言ったのだろう。

僕はうなずき、ラトゥナに引っ張られるままそのテントを離れた。

そうしてラトゥナに連れていかれたのは、これから移動に使うのであろう馬車のそばだった。数えてみたら馬車は全部で十台あって、半分は箱型で人が乗れるようになっているもの、もう半分は解体したテントなどを載せる荷馬車だった。

見ると、その周囲には幾人かの子どもがいて、荷馬車に衣類や日用品などを運びこむ作業をしている。

なるほど、これなら子どもでも充分にできる仕事だ。

現にみんな、僕よりもちいさい子のように見えた。

このなかではラトゥナがいちばん上なのだろうか。

「エエヌエエヌ・オコドゥ・アラック・オナウティック？」

「アヘエロック・イッタ・オウヤドゥ！」

何人かの子どもが話しかけてくれるけれど、わからない僕には応えようがない。

困っていると、ラトゥナがあいだに入って説明してくれた。

……た、多分。

これがもし説明ではなくて、悪口だったらどうしよう？

テアルーさんとブロートさんの子どもなら、きっとそんなことしないと思うけれど……。

そんなふうにくるぐると考えているうちに、子どもたちがいっせいに僕から離れていった。

(な、なに？)

戸惑いながらもその背中を目で追う僕を、遠くで振り返った子どもたちが手振りで「おいでおいで」と誘ってくれる。

心底、ほっとした。

だって、同年代の子たちとすらあまり遊んだことのない僕は、もし彼らと普通に会話が成立していても、うまく接することができるかどうか自信がなかったのだ。

だからある意味、言葉が通じないことは僕にとってプラスであったのかもしれない。

呼ばれて向かった先には、これから馬車に積みこむべきたくさん荷物があつた。

それをみんなで協力して荷馬車に積みこんだのだけど——全部終わった頃には、僕は疲労のためか倒れこんでしまったのだった。

思えば、寝ずに歩きっぱなしだった昨夜だ。

そうでなくとも、魔女の空間から出てからこっち、休んだ記憶はほとんどない。

食べものだってあまり口にしていないのだ、倒れるのもある意味当然といえた。

ムーテルに向かう馬車のなか、僕は深い深い眠りに落ちる。

子守唄がわりに、吠える犬の声を聞きながら。

身体が揺れている。

それはまるで、庭に備えつけられたブランコ。

「りのそー、もっと押して！」

「これ以上は危ないよう」

乗っているのはウォレイツだ。

唯一とっていい、僕と同年代の――

(友人?)

……わからない。

ウォレは僕を慕ってくれていたけれど、僕はあまりウォレが好きではなかった。

それは、ウォレがおっちょこちょいの国のおっちょこちょい大王だから、というだけではなくて。

「じゃあ放して！ 自分でこぐもん」

「あっ」

ウォレは僕の手を振りほどきブランコの上に立ちあがると、器用にひざを使ってこぎはじめた。

ブランコはどんどんと勢いを増し、やりすぎたウォレはやがて、自分の身体を自分で支えきれなくなる。

「ウォレ！」

「うわああっ」

叫んだ声とともに、地面に落ちた身体が鈍い音を立てた。

その反動で、主を失ったブランコがそばにいた僕に襲いかかる。

「……っ!?!」

おでこを強くぶつけ、瞬時に涙が滲んだ。

それでも我慢したのは、きっとウォレのほうが痛いだろうと思ったからだ。

「ウォレ……」

倒れたままのウォレに、ふらつく足どりで近づこうとした。

僕の足をとめるのは、シェフミアの叫び声。

「ウォレイツっ!?!」

僕よりもはるかに早く、城から飛び出してきたシェフミアはウォレを抱きしめる。

ここで、「一体なにをしていたの!?!」と僕を責めるような乳母なら、嫌いになれたのかもしれない。

けれどシェフミアはよくできた女性で、自分の息子がどんな性格をしているのかもよくわかっていたから。

「すみませんねえリノ坊っちゃん、またこの子が迷惑をかけて」

シェフミアが僕に向けるものはいつも、苦笑とやさしい言葉だけだった。

泣きじゃくるウォレをあやすあたかな手は、決して僕には伸ばされない。

どんなに待っても。

誰も伸ばしてはくれなかった。

――羨ましかった。

ウォレは僕とは逆で父親がいないけれど、そのさみしさを母親が十分に補っていた。

対する僕のほうは……一国の王である父は僕よりも国が大事だし、母親がわりのシェフミアだって他人より自分の息子のほうが大事に決まっている。

ウォレと僕は確かに、見かけは似たような境遇ではあったけれど、その実はまったく違っていたのだ。

だからウォレとは、あまり仲良くなれなかった。

自分の殻に閉じこもり、僕はただ待っていた。

(僕を包んでくれる手)

それが伸ばされるのを。

待っていたんだ。

そして――

「……!？」

掴んだ感触に、僕は驚いて目をあけた。

その手が記憶のなかと違って、あまりにもしわしわであったから。

〈喜の魔女〉の手はもっとう、白くてすべすべして……

「やっと起きたんかい」

「えっ？」

まだ混乱したままの僕は、突然かけられた声にもう一度驚いて顔を動かす。

(そうだ)

僕は誰かの手を握っているのだから、そばに人がいるのはあたりまえなんだ。

そんなことを考えながら、横になったままの視界に捉えたのはひとりのちいさな老婆だった。

どれくらいちいさいかというと、背は多分そう大きくない僕のさらに半分くらい。

さらに背中がかなり曲がっているから、よけいにちいさく見えていた。

その表情は――なぜか、赤い。

(あっ)

「ご、ごめんなさい！」

夢心地で握っていた手を思い出して、慌てた僕は袈裟に手を放した。

その瞬間馬車が大きく揺れ、僕の身体はごろりと転がり椅子から落ちる。

「うわあっ」

危うく老婆の足を潰しそうになったのだけど、老婆が見かけにそぐわない素早い動作でよけて

くれたおかげでそれは免れた。

「いたたた……」

椅子と椅子のあいだの、狭い足場で僕はむくり身体を起こす。

(やっと完璧に目が覚めた)

そもそも僕は、馬車のなかで寝てはいたけれど横にはなっていなかったはずなのだ。

だって、五台の箱馬車は十人ずつ乗るといっばいいいっばいで、とても横になれる余裕などなかったから。

それが、今この馬車のなかには僕と老婆のふたりきり。

他の人たちはどこに行ったのだろうか？

そんな目で老婆を見あげると、老婆はまだ少し顔を赤らめたまま、しわくちゃの顔でにやりと笑った。

「大丈夫かえ？ リノソトス」

「……っ!？」

そうしてゆっくりと、手を伸ばしてくる。

状況が、数年前と重なる。

手は――伸ばされた手は、信じたい。

けれど老婆が口にしたのは、間違いなく僕の名だった。

教えていないはずの、本当の名前だ。

「あ……」

僕は見つめるだけで、その手を掴めない。

素直に掴めたのは夢のなかだけで、今の僕はきっと、この手が本当に本物の魔女の手なのだとしても戸惑うだろう。

(あの人の手なら、ためらわないのに――)

かわりのように、僕は胸のまんなかにあるペンダントを握りしめた。

いびつな鳥の形を、指先で確かめるように。

「そう怯えんでも、魔女のようになって喰ったりはしないわい」

「――！」

「ふたりきりにしてもらったのは、おぬしに大事な話があるからじゃ。ほれ、ちゃんと座りんしやい」

老婆はそう言いながら、つま先で突っついて僕を促す。

「わ、わかったから蹴らないでくださいっ」

よわよわしい見かけとは違い、なんておばあさんだ。

僕は仕方なく、今度はちゃんと身体を起こした状態で椅子に座った。

それから必死に脳内をまさぐり、この老婆に関する情報を引き出そうと試みる。

(思い出せ)

レニティスの本に、そういえば老婆の話がなかったか。

確か、集団のなかには必ず知恵のある老婆がひとりいて、レニティスの娘たちを監督し、外と

の接触を取り仕切ることで、集団を確固たるものにしているのだと。

もしそれがこの老婆だというのなら、シェロニアの現状から僕の存在を予想できたとしても、おかしくはない。

僕は自分で「シェロニアから来た」と言ったのだし、盗られてしまった上着はともかく、ズボンなどはそのままなのだ。

そこまで考えると、僕は少し落ち着くことができた。

そして落ち着いたからこそ、もうひとつ盗られてしまったものを思い出す。

(そうだ、あの棒っ)

馬車は今どのあたりを走っているのだろうか？

山からあまり離れてしまえば、取り返すのが難しくなってしまうのだけど……。

「メフィナにつく前に、おぬしに確認しておきたいことがあるのじゃ」

唐突に口をひらいた老婆の言葉は、まるで僕の心情を読んだかのように、今いる場所のヒントになっていた。

(メフィナ？ って、大道芸の町、か)

シェロニアから出たことがない僕でも、有名な国や町ならわかる。

メフィナはムーテルから少し東に行ったところにある、腕のいい大道芸人が集まることで有名な町だった。

「ムーテルにつく前に」と言わないところを見ると、ムーテルはもう通りすぎてしまったのだろう。

(――仕方ないか)

僕はとりあえずそのことを頭の片隅に追いやり、老婆の話を聞くことにする。

「なんですか？」

声がよく届くように、少し前かがみになった。

「否定せぬところを見ると、おぬしは本物のリノソトスじゃな？」

「否定したところで、あなたが本物の〈レニティスの心臓〉なら、信じないでしょう？」

思い出しながら、僕は切り返す。

そう、本のなかでは確か、知恵の老婆をそんなふうに表示していたのだ。

すると僕の反撃がよほど意外だったのか、老婆は高い声を立てて笑った。

「ホッホッホ、噂よりも頭がまわるようじゃのう」

「……………」

一体どんな噂が耳に入っているのか、訊かなくても大体わかってしまう自分が嫌だった。

レニティスはとても閉鎖的な集団だ。

だからこそ、そう簡単によそ者を仲間にするのではない。

他族の者を仲間として認めるか否かは、その集団ごとに基準が異なるらしいけれど、僕が保護されたこの一団では、〈心臓〉である老婆・ラトリーズの判断ひとつに任されているようだった。

つまり、テアルーさんたちがどんなに僕を認めてくれても、このリーズ（そう呼び捨てにしてくれと言われた）がうなずかない限りは、仲間になれないということ。

そしてその判断は、メフィナについてそのときに、くだされることになっていたらしい。

馬車が動きをとめたのでリーズとともにおりると、テアルーさんたちが心配そうな表情を浮かべ僕らを待ちかまえていた。

その視線を受けとめ、僕の横で深くうなずくリーズ。

それを見たブロートさんは、また涙を流して喜んでくれた。

――でも、本当は。

(仲間だと認められたわけじゃない)

リーズは僕にこう言ったのだ。

「おぬしが本物のリノソトスなら、遅かれ早かれここを出てゆくことになるわい」

そして。

「おぬしは確かに、テアルーたちの言うとおりに、わしらの仲間になれる心を持っているかもしれん。しかしそれゆえに、仲間にはなれぬのじゃ」

僕が本当にみんなのことを想うのなら、ここから出ていかざるをえないだろうと。

だからリーズが僕の滞在を認めたのは、それが一時的なものだとわかっているからだった。

(先を見通している)

これから僕に訪れるであろう運命を、リーズはしっかりと読み取っていた。

まるで魔女のようだ。

――そしてもうひとつ。

「なにか失くしたのかえ？」

「えっ？」

「無意識じゃろうが、たまに腰の左側に手をあてているな？」

「あ……！」

リーズは、隠していた僕の心配ごとまで読み取ってしまったのだった。

ここで隠しても意味がないと、父からもらった大切な棒のことを話すと。

「山賊がものを盗むのは、どこかに売り飛ばして金にするためじゃわい、そのルートを見張っておけば取り戻すのも難しくはないじゃろう」

その筋の者に頼んでおいてやろうと、言ってくれた。

本当にありがたいことだった。

そのかわりに僕は、できる限りみんなには迷惑をかけないことを、約束した。

それが僕にできる唯一のことだったから――。

「ん？ どうしたんだい、リノ」

ブロートさんに泣きつかれたまま動かない僕を、テアルーさんが呼ぶ。

僕はふと我に返り。

「な、なんでもありませんっ。これからよろしくお願いします！」

(短いあいだですが)

と心のなかでだけつけたし、頭をさげた。

「そんな堅苦しいアイサツはいいからさ、早く舞台のほうに行きましょ？」

「舞台？」

「町の中央に、大きな舞台があるんだ。大道芸は主にそこで行われているんだよ」

補足してくれたのは、やっと泣きやんだブロートさんだ。

さらにラトゥナが横から、僕にたいまつを差し出してくる。

そういえば、あたりはもう薄暗い。

周りに目を向けると、みんなしてたいまつを片手に、歩いて移動する準備を進めていた。

僕が「ありがとう」と右手でそれを受け取ると。

「どういたしまして」

「えっ!？」

驚いたことに、ラトゥナは僕にもわかる言葉で返してきた。

その僕の表情がよほどおかしかったのだろうか、横で見ていたテアルーさんは笑いながら。

「ああ、その子、簡単な言葉ならわかるのよ。いずれはアタシたちみたいに、ちゃんと話せるようにならないといけないしね」

それから自分のたいまつを、ぽんと揺らして火の粉を飛ばすと。

「そうだわ、リノ！ よかったらこの子に言葉を教えてやってくれない？ アタシらが相手だとスーフォニア語(スーフォネルト)が通じると思って、なかなか上達しないのよ」

「え……と、が、がんばります……」

本当は無理だと、応えたいくらいだった。

だって僕はこの大陸語(ヘレンディア)しか学んだことがない。

なにかを人に教えたこともないし、僕がスーフォニア語を話せるならともかく、わからない状態で教えるのは至難の業であるように思えた。

でも今、テアルーさんはそのほうがいいと言ってくれたし、リーズとの約束がある手前、簡単に断ることはできなかったのだ。

「よろしく頼むよ！」

ブロートさんが余っている僕の左手を掴まえて、上下に大きく揺らす。

このブロートさん、体格はかなり大きいけれど、中身は子どものようにかわいらしい人だった

。

「じゃあ行こうか」

テアルーさんの言葉を合図に、みんな歩きはじめる。

このレニティスの一団は約五〇人からなっていて、全員がたいまつを手にはしているわけではないけれど、同じ方向に揺れるやさしい光は、とても幻想的であたたかかった。

しかし町の中央に近づくとつれ、各所に最初から設置されているランプのおかげでずいぶんと明るくなってきた。

やがては、たいまつもいらなくらいに。

(どうするんだろ？ このたいまつ)

どこかに処分する場所でもあるのだろうかとあたりを窺っていると、みんなはそのまま舞台のほうに近づいていって、舞台上でたいまつを使った芸をしている人たちにあげていた。

なるほど、それがリクエストがわりというわけだ。

新しいたいまつを受け取った大道芸人は、次々と違った芸を見せてくれる。

するとその横にもうひとり、たいまつ大道芸人がやってきて、競うように技を始めた。

そこからは、どちらがより多くのたいまつを受け取るか、そんな競争になっていた。

他にはどんな芸があるのかと、さらにあたりを見渡してみると、舞台いっぱいさまざまな格好をした大道芸人が立っていて、みんななにかしらの芸を披露していた。

巨大な円形舞台を囲む観客たちは、それらをひとつおり見てまわり、最終的には気に入った大道芸の前で足をとめるという。

だから芸をする人々は、自分の前で足をとめてもらおうと必死なのだった。

しかしテアルーさんたちは見慣れているのか、それぞれの大道芸を横目でちらりと見るだけで、どんどん進んでいってしまう。

対する僕は目にするものすべてが初めてで、ひとり興奮していた。

「ねえ、ちょっとあれ凄いよ！ ボール何個持ってるの!? あ、あっちも凄い！ あんなに細い棒の上でぐるぐるまわってるっ！」

放っておくとすぐに足をとめてしまうからか、ラトゥナが僕の手を引いてくれた。

確かに、もしこの人ごみのなかではぐれてしまったら、もう一度出会える気がしない。

自力で馬車のところまで戻れるならいいけれど、目印となるはずの舞台は丸く、かつ、この暗さだ。

絶対大丈夫なんて自信は、とても持てなかった。

おとなしく引きずられていると、前を歩いていたテアルーさんが不意に声をあげる。

「オクウサ・アラレッティア！」

スーフォニア語でなにか言いながら、手は誰もいない空間を指差していた。

それに従うように、ブロートさんが大きな身体を揺らしながら、もの凄い勢いで舞台の上を走ってゆく。

(え？ え!?)

もしや、ブロートさんもなにか大道芸をするのだろうか。

鉄の棒を折るとか？

と僕が首をかしげているうちに。

「あっ、ちょっと……！」

ラトゥナは僕をその場所のすぐ前まで送り届けると、手を放して人ごみのなかに消えてしまった。

気がつくのと、ついさっきまで前を歩いていたテアルーさんもない。

「心配しなくても、すぐに戻ってくるよ」

舞台の上から、ブロートさんに声をかけられる。

やはり、なにかをやるつもりらしい。

(そうか……)

テアルーさんたちは大道芸を見るためにまわっていたのではなく、舞台のあいている場所を探すためにまわっていたのだ。

だからあんなにも早足だったのだろう。

「もしかして、踊るんですか？」

レニティスといえば、夜が来るたびに踊り明かすといわれるほど踊りの好きな人々だった。

いや、実際にそうなのかわからないけれど、少なくとも僕が読んだ本にはそう書かれていた。

(テアルーさんが踊るなら、とても素敵だろう)

山賊を相手に華麗に舞っていたのを思い出す。

あの足技も、実は踊りで磨かれたものだったのかもしれない。

そんな僕の期待は裏切られることなく、ブロートさんはうなずいてくれた。

「そうさ、あの子の踊りは本当に素晴らしいよ。親のわしが言うのもなんだけどね」

「――え？」

それからほんの少し経って、戻ってきたふたり。

テアルーさんは見たこともない弦楽器を手にしていて――炎のごとく赤い、情熱的なドレスを着ていたのはラトゥナのほうだった。

町のはずれに張ったテントのなかで横になりながら僕は、先程目にしたばかりのラトゥナの踊りを脳裏に思い描いていた。

どこかまだ信じられないけれど、それはとても神秘的で、大人の色香に満ちた素晴らしいものだった。

それまで僕の隣にいたラトゥナは僕とそう変わらない歳の子どもで、とてもそんな踊りができるような子には見えなかったのに。

さすがレニティスの娘というべきだろうか、気がつくとならぬラトゥナの踊り以外は目に入らなくなっていた。

くるくると器用にまわる手と、感情を伝える指先の細やかな動き。

なめらかに動く上半身と、それを支える確かなリズムを刻む足先。

また、その踊りを盛りあげるテアルーさんの歌も素晴らしかった。

あの騒がしい空間のなかでも、凜とした声はしっかりと響き、掻き鳴らす弦の音は観客の耳をさらった。

(本当に、凄い)

不謹慎かもしれないけれど僕は、レニティスの踊りを見られただけでも国を出たかいたが思ったと思った。

僕が今まで目にしたもののなかで、いちばん美しいものだったから。

「なにをニヤニヤしているんだい、リノ」

不意に声をかけられて顔をあげると、いつの間に入ってきていたのかベイフィルさんの顔があった。

このレニティスの一団のなかで、僕が最初に声をかけたベイフィルさんは、それ以来テアルーさんたちと同じように気さくに話しかけてくれる。

実は他のレニティスたちは、そう簡単によそ者を受け入れる気がないのか、向こうから話しかけてくるということはあまりなかった。

僕が今いるこのテントのなかには他にも何人かいるのだけど、これほど静かなのがいい証拠だ。

「ニヤニヤって、別に……」

そんななか普通に話しかけてくれるのはありがたいので、僕は身体を起こして応える。

「さっきのラトゥナの踊りが、凄くよかったと思って」

「ああ、ラトゥナの踊りはうちの団のなかでもいちばんだからな」

ベイフィルさんはそう、うなずいたあと。

「ところで、外におまえを捜しているやつがいるんだが」

「え!？」

そのときラトゥナの踊りを追い出して、僕の脳裏を占めたのはもちろん――

(まさか、〈あの人〉?)

名前も訊けなかった。

けれどこの大切なペンダントを、くれた人。

でも油断するわけにはいかない。

僕を捜しているはずの人は、他にもたくさんいるはずなのだから。

「あの……〈リノ〉を、捜していたんですか？」

念のために確認してみると、ベイフィルさんは不思議そうに眉を動かしながらも。

「ああ、確かにリノって言ったぞ。この一団にリノと名がつくやつは、おまえしかいない」

「そうですか」

それならあの人である可能性が高い。

だってタフィレンやアテリスの人なら、僕を略称で捜したりはしないだろう。

たとえ僕がシェロニアの王子だとばれたって、彼らにはなんの問題もないのだから。

「ありがとう、行ってみます」

僕は立ちあがると軽く頭をさげ、テントの出口へと向かった。

すると、ちょうどこのテントに入ってきたラトゥナと目があい、また不思議そうな顔をされる

。

……こんな時間に、用事なんてないはずの僕が外へ出ようとしているのだから、あたりまえか

。

ラトゥナにちいさく笑いかけてから、僕はそのままテントを出た。

きっとベイフィルさんがスーフォニア語(スーフォネルト)で事情を説明してくれるだろう。

それを期待した。

テントの外——誰も、立っていない。

(あれ?)

僕がキョロキョロとあたりを見まわしていると。

「リノ！ こっちだ」

そばの茂みから声がする。

「……………」

僕が無言を返したのは、それがあの人声ではなかったからだ。

それどころか、今までに聞いたことのない声。

(なんか親しげに呼ばれたけど……)

「誰？」

思い切り不審がっていることを前面に出した声で訊いてやった。

すると焦ったのか、声の主が茂みから飛び出してきて。

「おいおい、おれを忘れたのか？」

それは二十歳くらいの目鼻立ちのはっきりした男だったけれど、やはり見覚えはなかった。

「忘れたというより、最初から知らない」

僕がはっきりと告げると、男は大袈裟に頭を抱えて「なにいっつ」とわめきだす。

「おまえってそんな薄情なやつだったのか！ 昔はあんなにかわいかったのに……まさか魔女に

変な呪いでもかけられたんじゃないだろうな？」

「えっ？」

僕が思わず訊き返してしまったのは、突然〈魔女〉という単語が出てきたからだ。

(しかも、呪いって……)

確かに呪いはかけられていた。

ただし、僕にではなくあの人に。

——けれど実は、僕自身に呪いをかけられていないという保証は、どこにもない。

もし本当に魔女の呪いで、そのせいでこの男のことを忘れていたのだとしたら？

「なんだ？ 心当たりがあるのか？」

「いや……」

魔女が僕にそんなことをするなんて、やっぱり思いたくはないから。

僕は口ごもるので精一杯だった。

そんな僕を知ってか知らずか、男はマイペースに話を進めていく。

「まあいいや。ところでリノ、おまえ、〈ハーレイオンの剣〉はどうした？」

「ハーレ……？ なに？」

僕がうまく聞き取れずに訊き返すと、男は身体中の息を吐き出したのではないかと思えるほど大きなため息をついた。

「おまえなあ、それも忘れたのか？ おまえが陛下からもらった大事な剣じゃないか！」

「——!？」

(剣……?)

僕はそんなもの、もらっていない。

僕が父から受け取ったものは、用途のわからないあの棒だけだ。

まさかあれが剣だということか？

半信半疑のまま、僕は口にする。

「剣なんて、もらってない……」

「じゃあそのベルトはなんだよ？ その穴は剣を挿すためのものだろう？」

「——っ」

やはり、そうなのか。

僕は思わず左手で、その部分を隠した。

(あの棒は、剣の〈柄〉なのか?)

なら身はどこにいった？

そこまで考えた僕は、自分で笑ってしまった。

(どこにいったかわからないのは、柄も一緒か)

僕が不甲斐ないばかりに、まだ盗まれたまま。

「なにを笑ってるんだよ！ 笑いごとじゃないだろう？ 本当にないのかっ？」

男がぐいと僕の胸倉を掴んだから、互いの顔が近づく。

(……!)

口調はそれほど強いものではなかったけれど、瞳は真剣そのもの。

どうやら狙いは〈それ〉のようだ。

お返しとばかりに、僕も睨みを効かせて。

「それなら来る途中山賊に奪われた。僕も行方を捜している」

「……本当か？」

「あなたが何者かもわからないのに、嘘をついてどうなる」

僕がそう言いおえたとたんに、男は「ふんっ」と鼻を鳴らしながら、僕を横に投げ捨てた。

地面に転がされた僕は、一言文句を言ってやろうと素早く顔をあげただけだ。

「この役立たずめ！」

その前にそう、ツバを吐かれたから。

「な……っ」

怒りと恥ずかしさで、それ以上声も出ない。

ただ、くるりと向けた男の背中に、タフィレンの国紋があったのだけは見逃さなかった。

(あ——!?)

男は確かに、僕の知らない相手だったのだ。

しかしそれ以上に驚いたのは、男がひとりで行動している点。

そしてわざわざ僕を呼び出してまで、あの棒——剣の行方を尋ねた点だ。

「……一体、どうなってる……？」

男の背中が完全に見えなくなるまで見送って、僕は地面に尻を預けたままひとり呟いた。

大々的にシェロニアを襲ったくせに、今さらことを荒立てたくないとも思っているのだろうか。

——いや、考えるべきはそこではないのか。

そもそもシェロニアに攻め入った理由はなんだった？

最初はただ領土が欲しいのだと思っていたけれど、それなら僕をこうして残していくのはおかしいのだ。

僕だって〈大陸法典〉のさわりくらいは知っている。

王の正式な後継者である僕がターリエットに行かなければ、シェロニアは誰のものにもならない。

それなのに。

僕は今、不要なのだと言わんばかりに捨てられた。

それはつまり——

「狙われているのは、最初からあの剣だった……？」

「そのとおりだ、リノソトス」

「——！」

鋭い声とともに、ひやりとした感触が首の後ろを襲う。

ナイフ、だろうか。

「悪いが、アテリスはタフィレンほど甘くない。一緒に来てもらうぞ」

「……………」

この周囲には、レニティスたちのテントがいくつもある。

僕が叫び声をあげれば誰か出てきてくれるだろう。

わかってはいたけれど、できなかった。

そうすれば間違いなくみんなを巻きこむことになるからだ。

(なるべく迷惑はかけないようにするって、リーズと約束したんだ)

それに、僕が剣を持っていないのも行方を知らないのも、本当のことだ。

たとえ拷問されたとしたって、僕が話せることなどなにもない。

どうせすぐに開放してもらえるだろう。

「立て」

そう考えた僕は、男の言葉に素直に従った。

背中を押されるまま、道のない林のなかへと歩き出す。

円形舞台とは逆の方向だ、このまま行けばきっと、町から出てしまう。

町の外に馬車でも待たせているのだろうか？

「おぬしは確かに、テアルーたちの言うとおりわしらの仲間になれる心を持っているかもしれん。しかしそれゆえに、仲間にはなれぬのじゃ」

そう告げていた、リーズを思い出す。

あれはこういう意味だったのか。

思っていたよりもずっと、早かったけれど。

(そういえば、ラトゥナにまだ言ってなかったな)

今日の踊りがとても素晴らしかったこと。

僕はこれまで、ラトゥナの踊りほど美しいものは見たことがなかったと。

それだけで国を出たかいがあったのだと、伝えておきたかった。

——そんなことを、思っていたからだろうか。

「リノお～？」

ラトゥナが初めて、僕の名を呼んだような気がした。

テントからはもうだいぶ離れていて、ここにラトゥナの声など届くはずもないのに。

なんて都合のいい耳だろうと、僕は後ろの男に気づかれないよう唇の端をあげた。

すると、また。

「リノーっ！」

もう一度、聞こえたのだ。

(まさかラトゥナ、僕をつけてきた!?)

ここで「戻れ」と叫んだって、ラトゥナには通じない。

駄目だ、このままじゃ——

「なんだ？」

さすがに男も気づいたようで、後ろの足音がやんだ。

その隙に早口でまくし立てる。

「あの、彼女と会わせてっ。テントに戻るよう伝えるから！」

「助けを呼ぶ気か？」

「呼ぶなら最初から呼んでる！ それにあの子、どうせスーフォニア語しかわからないんだっ」

「ふむ……」

男はそう呟くと、僕の正面にまわりこんできて。

「少しでもおかしい行動をとったら、あのレニティスの一団全員の命がないと思え」

僕の耳に、低く言い残した。

それから近くの木陰に隠れる。

「……っ」

足が震えた。

男が本気だってことが、よくわかる声だったから。

(勘違いすら、させてはならない)

なんとかうまくラトゥナを戻さないで……！

気持ちだけが先走って、上手に足を動かさない。

気がつくとき、緊張のせいかやけに冷えた指先はペンダントの上だ。

いびつな鳥を握りしめることは、もう癖になっていた。

(大丈夫、夫)

今僕を見つめているのは、きっと後ろの男だけじゃない。

僕はひとりで、ここに立っているわけじゃないんだ。

「たとえ身体が離れていても、どちらかが想う以上心は離れられないんだ。俺たちはそれを支えに、生きてゆくしかない」

魔女の空間で聴いた、あの人の言葉が頭に浮かんだ。

(そう、大丈夫なんだ)

僕がちゃんと想っていれば。

僕の味方じゃないかもしれない魔女だって、それでもずっと僕を支えてくれていたのだから。

父もあの人も、今の僕を支えてくれないはずがない。

ひとつ、息を吐いた。

「リノウ～？」

ラトゥナの声が、さっきまでよりも近くに聞こえる。

その場所に向かって、僕は確かな足取りで歩き出した。

僕が身振り手振りでもなんとかラトゥナを納得させ、その背中を見送ったあと、もとの場所に戻ってみると。

不思議なことに、そこに男はいなかった。

しばらくあたりを捜しまわってみても、見つからない。

もしや、僕が恐れていたとおり勘違いからみんなを襲ってしまったのかと思って、大急ぎでテントまで戻ってみても。

僕が魔女の空間からシェロニアに戻ったときのような、衝撃的な事件など起こってはならず、むしろみんな安らかな寝息を立てていた。

唯一、僕と一緒に眠る予定だったテントの人々だけが、ラトゥナを含め僕の帰りを待っていてくれた。

——僕がその、不思議な現象の理由に気づいたのは翌朝のこと。

「リノっ、リノ！」

すっかり僕の名前だけ覚えたラトゥナが、朝からとてもやかましく呼んでくれたので、まだ眠い目を擦りながらも起きたときだった。

「なに？ ラトゥナ……——！」

ラトゥナが手にしていたものを見て、一瞬で完全に、目が覚めた。

「ラトゥナ、それ……」

例の棒だったのだ。

「イッカス・アウトコ・エティック・リノ・ウサタウ・アッティー！」

ラトゥナは興奮しているのか、頬を上気させて一生懸命説明してくれているようだったけれど、当然ながら僕にはわからない。

しかしその棒が僕のものだということはラトゥナもわかっているのか、最後には僕に差し出してくれた。

「どうぞ？」

初めて見る、ラトゥナの満面の笑みと、精一杯の大陸語(ヘレンディア)。

僕はラトゥナとは少し違う理由で、頬を上気させる。

「……ありがとう」

心から、告げた。

(だってラトゥナが僕に届けてくれたものは、この剣だけじゃない)

他に誰がいる？

僕を追いかけてくれているであろうあの人以外に、こんなに早く剣を取り戻すことはできないだろう。

おそらく昨日僕を助けてくれたのも、あの人なのだ。

姿を見せないのは、なにか深い理由があるからに違いない。

そしてそれだってきっと、僕のため——

「本当にありがとう、ラトゥナ」

今は直接言えない言葉を、ラトゥナにくり返した。

考えてみれば、昨日助かったのはラトゥナが追いかけてきてくれたおかげでもあるのだ。

するとラトゥナは、一瞬きょとんとした顔をつくったあと。

「どういたしまして」

まるであたりまえのように、そう応えてくれた。

理由のわからない、涙があふれた。

(まったく、ひやひやさせやがって)

アテリスの刺客らしき男を羽交い絞めにしながら、俺は心中で悪態をついていた。

俺が間にあったからいいものの、もし少しでも遅れていたら、リノはどんな目に遭わされていたことか。

リノ自身拷問くらいは予想していただろうが、自分は本当になにも知らないのだと、アテリスを甘く見ていた部分があるのかもしれない。

(なにせ世間知らずだからなあ)

この男が自分で言っていたとおり、アテリスはタフィレンほど甘くない。

それは間違いなく真実だ。

アテリスの者なら、リノがなにも知らないとわかったうえでも、嬉々として拷問を続けるだろう。

俺はそんなアテリスを通してシェロニアへとたどりついた過去があるからこそ、よけいにシェロニアの平和さに面をくらったのだった。

「むぐぐぐぐっ」

なんとか逃れようと、俺の腕のなかでもがく男に目をやった。

(こいつだって、本当なら喰ってやりたいくらいだ)

生かしておいたところでろくな報告はしないだろう。

さいわい、タフィレンの男もそうだったがこいつもひとりで動いているようだから、こいつさえ始末してしまえば問題ない。

――のだが、「もう喰わない」と決めたのは俺自身だ。

殺すことそのものにはあまりためらいはないが、喰うとなるとまた別問題だった。

「……仕方ないか」

呟くと、俺はとりあえずその場を離れることにする。

ある程度リノと距離をとっておかなければ、戻ってきたリノがこの男を捜す可能性があった。

町の外へと向かって歩きながら、俺はついでのように男に呪いを植えつける。

「おいおまえ、ひとつ言っておくがな」

俺にはそんな力などあるはずもないが、それを信じさせることはたやすかった。

「あの棒――いや、おまえらにとっては剣なんだったな。あの剣をリノソトスが持っていないのは本当だぞ」

なあ、俺の眼は赤いだろう？

「山賊に盗られるのを、俺はちゃんと見ていた。あいつは俺の観察対象だからな」

「――！」

半分は嘘で、半分は本当だ。

「俺だけじゃない。あいつは本物の魔女にも、気に入られている」

再び関われば、命の保証はないと。

町と道との境界線で、俺は男を抑えつけていた手を放した。

切り倒された樹のように、地面にごろり転がる男の身体。

「言いたいことは、わかるな？」

念を押してやると、今度は首振り人形のように、男は首を振りつづけた。

魔女の脅し効果は絶大だ、それ以上の言葉など必要なかった。

——いや、本当は違うのだ。

肝心な言葉は、まだすべて魔女に封印されたまま。

むしろ俺は、さらに強い呪いをかけられていた。

リノが先に帰ったあと、魔女の空間で仕掛けられた最後のキスのせいだ。

リノは気づいていないかもしれないが、リノが瞳に呪いを受けたのも、何度かされている目蓋へのキスのせい。

そしてその呪いは、もちろん今も解けていないはずで。

今のところ俺以外に効果は表れていないようだが、魔女がいつ気まぐれを起こすか、それが心配だった。

そこまで考えて、俺はひとり笑う。

(まったく、な)

今の俺には他に、心配すべきことがあるはずなのに。

たとえば、山賊から取り戻してきて服のなかに隠してあるこの剣を、リノにどう渡すか——
作戦を練りながら視線をめぐらすと、腰が抜けたのかまだ俺の足もとで首を振っていた人形が、「ひいっ」と声をあげた。

「……もう行け」

俺の笑い顔がよほど恐ろしかったのだろうか、俺がそう言ってやると男は這いつくばるようにして逃げていく。

失礼なやつだが、あの様子ならばらくは大丈夫だろう。

万が一国に戻ったとしても、「剣は山賊に盗られた」ということを信じているだろうから、問題は無い。

「とりあえず、戻るか」

自分に命令をくださいよう呟いてから、俺は来た道に戻りはじめた。

リノがちゃんとテントに帰ったか心配だったから、足は自然と速まる。

魔女がまたよけいなことをしていなければいいが。

(——そうだ)

そうなのだ。

そもそも魔女が三つめの呪いさえかけなければ、俺が「どうやってリノに剣を渡すか」なんて、悩む必要はなかったのだ。

あのとき別れ際、魔女はこんなことを言った。

「あんたたちはもう、出会わない」

もひとつ呪いをかけたから、と。

俺がリノに直接渡そうと思わないのは、まぎれもなくそのせいだ。

魔女がああ言った以上、俺が会おうとすれば絶対にそれを妨害するはず。

そしてそれは当然リノにも影響を及ぼす。

――しかも、可能な限り、悪い形で。

だから俺は、リノに会うわけにはいかない。

それでもできることなら、俺がそばにいるのだということを知らせたい思いはあった。

最初こそ、なぜ姿を現さないのだと疑問に思うかもしれないが、離れた位置で見守るのもまたやさしさなのだと、ちゃんと教えてある今ならば、それはきっといいほうに作用するだろう。

(しかし、一体どうする?)

いくら考えてみても、いい案など浮かばない。

テントの入口に置いておくだけなんて、味のないことはしたくないのだが……。

考えがまとまる前に、レニティスたちのテントまでついてしまった。

十あるテントはひとつを除いてすべての灯りが消えていた。

残っているのはもちろん、最初リノがなかにいたテントだった。

入口とは逆のほうから近づいて、耳を澄ませてみる。

なかからは確かにリノの話し声が聞こえていて、俺はやっと心から安心した。

(さて……俺も少し休むか)

ムーテルで馬を借りてから、ずっと走りっぱなしだった。

そりゃあ俺よりも馬のほうがはるかに疲れているだろうが、俺だって色々と動きまわったせいで疲れているんだ。

ちなみに、レニティスの一団に追いついてから俺がまずやったことといえば、馬車の台数を数えることである。

案の定十台しかなく、俺はさらにどっと疲れを感じたのだった。

(魔女に振りまわされっぱなしだからなあ)

しかもリノ自身はそれに気づいていないから、俺の心労はふたり分だ。

――もっとも、今はそれでいいと、思ってもいたが。

どうせリノは完全には魔女を憎めまい。

真実を知って変に苦しむよりなら、半分は疑いつつも心の支えにしたままほうが、健全というものだ。

「ま、俺にとっては癪な話だがな……」

巻きこんでしまったのは俺なのだから、まさに自業自得な話なのだった。

寝ているあいだに見つからないようにと、俺はテントのそばに生えていた巨木の上にあがった

。

幹が太いだけに、枝も十分な太さがある。

ここで寝てもそう簡単には折れないだろう。

俺自身がバランスを崩して落ちてしまう心配は、実のところ枝が折れる確率よりも低い。

自慢じゃないが、俺は今までのいろんな場所で寝てきたのだ。

枝の上なんぞなんの問題にもならない。

そうして、普通の人間が見たらひっくり返りそうな場所で眠りについた俺だったが――その翌朝、対抗するように意外な音で目覚めさせられた。

(……ん?)

ビシバシと、肉体と肉体がぶつかりあう音。

(ま、まさか昨日のやつに襲われているのか!?)

寝ぼけた頭で俺は、そんなことを考えた。

しかし下を見てみると、くりひろげられていたのはそんな生易しいものではなかった。

「ハァ！ トゥ！」

「甘いわよラトゥナ！ 足が動いていないっ」

「ヤァ！ エイ！」

「そう、その調子っ」

(……………)

大人と子ども、女ふたりで組み手をしていたのだ。

いや、あれは踊りか？

新しい踊りなのか!?

ときおり、通常の戦いでは見られないような動きも混ざっていた。

俺が昨日ここについた頃にはみなテントに戻っていて、このなかの誰かが例の円形舞台上で踊ったのかどうかはわからないが、レニティスはこの地域でも踊りが上手な民族だとされていた。

よって、それが彼女たちであってもおかしくはない。

ただ今の動きを見る限りでは、それはやはり踊りというよりも組み手に近かった。

特に大人のほうの足技はなかなかのものだ。

気がつく俺は、その踊りだか組み手だかわからないものに、すっかり見入ってしまった

。

「いいわよ、ラトゥナ。今日はこのくらいにしましょ」

やがてかかった終わりの声に、はたと我に返る。

(ん?)

だがラトゥナと呼ばれた子どものほうはそれが聞こえなかったのか、まだ一心不乱に攻撃を続けていた。

「よっ！ こらせっ！」

しかもどこか、掛け声もおかしい気がする。

「ほらっ、終わりだってば！」

大人は再度声を張りあげたが、やはりラトゥナは無視をした。

しまいには大人が怒り出し。

「もう！ ラトゥナったら大陸語(ヘレンディア)を覚える気があるのっ？」

そう怒鳴ってから。

「ウォモ・イラウォ！」

強い口調でなにかをつけたした。

その部分は、彼女たちの独自言語・スーフォニア語(スーフォネルト)のようだった。

(ああ、そうか)

おそらくラトゥナは、スーフォニア語しかわからないのだ。

だが大人のほうは大陸語を覚えさせようと思って、あえてそっちを使っていたのだろう。

大人はさらに一言告げると、さっさとテントのなかに引っこんでしまった。

残されたラトゥナは、今度はひとりでなにかの練習を始める。

(あ……！)

今度こそ、本当に踊りなのだとわかった。

しかも相当熟練しているのか、実にしなやかな身のこなし。

なるほど、さっきまでの組み手も一切無駄にはなっていないようで、キレのいい動きを見せている。

ここまでの踊りは、そうそう見られるものではない。

しかもこんな、リノとあまり歳が変わらない子どもが、だ。

俺はその素晴らしい踊りをちゃんと見ようと、枝の上で姿勢を正した。

——それが、いけなかった。腰に提げていた例の剣を、うっかり下に落としてしまったのだ。

「んん？」

当然ラトゥナはそれに気づき、こちらに近づいてくる。

(まずいな)

いくら大陸中をまわってきた俺でも、スーフォニア語はあまりわからない。

それは魔女の呪い以前の問題だった。

いっそラトゥナが拾う前に俺が拾って逃げてしまうのもいいが、それをやると今後リノに剣を渡す機会が減ってしまうだろう。

怪しいやつと思われて、警戒されるかもしれない。

(どうする……?)

悩んでいるうちに、下までやってきたラトゥナが剣を拾ってしまった。

そしてなにか呟く。

「イナン・エイロック……？」

(——！)

そのとき俺は、やっと気づいた。

掛け声しか聞いていなかったからわからなかったが、この子は昨夜リノを追いかけてきた子なのだ。

あのとき、しきりにリノの名だけ呼んでいた。

「どこにいるの？」とも「返事をして」とも言わなかったのは、言葉を知らなかったからか。

(……よしっ)

俺はひとつの決心をして、高い木の枝から飛びおりた。

なにも知らないままでもリノを助けてくれたこの子に、剣を託してみようと思ったのだ。

「っ!？」

驚いて剣を取り落としたラトゥナに、あえてよけいなことは言わない。

「リノ」

ラトゥナが怖がる隙も与えず、俺は拾いあげた剣を差し出した。

「……？」

「リ・ノ」

もう一度、渡すべき相手の名を呼ぶ。

戸惑いの表情を浮かべたラトゥナは、最初木の幹の向こう側に隠れたのだが。

俺がそれ以上動かず、それ以上喋らないことを悟ると、おずおずとまたそばに戻ってきた。

そして口を動かしながら、身振り手振りでなにかを伝えようとしてくる。

自分が受け取っていいのか。

リノに渡せばいいのか。

多分そんな確認だ。

どうやら、ちゃんと伝わっているようだった。

「どうぞ」

と、俺はなるべく簡単な大陸語で促した。

さっきの大人はすべて大陸語で話しかけていたのだ、まったくわからないわけではないだろう

。

その予想どおり、短い俺の言葉でもラトゥナは目を輝かせた。

ちいさな手を伸ばしてきて、まだ柄しかない剣を受け取り。

「ありがとう」

はっきりと、口にした。

(おまえにやったんじゃない。それはリノにやるんだぞ?)

そういう意味をこめてもう一度だけ「リノ」と念を押すと、ラトゥナはうなずいたあと同じように「リノ」と口を動かした。

その目は、さっき踊りの練習をしていたときと同じくらい、真剣そのものだった。

そのあと俺は、剣がリノに渡ったことを確認することなく、メフィナをあとにした。

(あの子なら、大丈夫だ)

ちいさいながらも強いまなざしを目にして、そういう確信を持てたのだ。

それに、あの剣が狙われているのだとわかった以上、リノだって今までのように気軽な扱いはしないだろう。

少なくとも外からは見えないように、もしくは自身が持ち歩かないように対策を講じるはず。そうなるとどうせ、いくら俺の目がいいといっても確認は難しくなる。

――それよりも、だ。

今は気になることがいくつかある。

俺はそれを調べるために、一度シェロニア方面に戻るつもりだった。

(その前にやらなければならないことが、ひとつ)

借りたままの馬を走らせて、俺はメフィナから少し北に行ったところにある、クートリア湖に向かった。

そこは以前から魔物の目撃情報が多い場所で、湖が魔女の魔物召喚ポイントになっているのではないかという噂もあるほどだった。

当然普通の人間はそこには近づかない。

だからこそ、誰にも見られずに魔女を呼び出すには最適の場所だった。

もし本当に魔物が出たとしても、魔が差している俺や魔女を、やつらは決して襲わない。

その理由なんて俺にもわからないが、人間たちは〈ドーゾクケンオ〉なんて言って笑っていた。

形がどうであれ、自分たちに害をなすものであることに変わりはない、と。

鬱蒼と茂る森のなかを駆け抜け、百人の大人たちが手を繋ぎ丸くなった程度の円周があるクートリア湖の前に出る。

予想どおり人の気配ひとつない空間に、俺は安心して馬からおりた。

より湖に近づき、その中心に向かって。

「おい魔女！ 〈喜の魔女〉！ いるんだろう？ リノを助けなくていいから、居場所だけはちゃんと追っておいてくれっ」

これだけいたずらを仕掛けている魔女が、そばにいないはずはない。

俺が声を荒げた次の瞬間、湖の水面に波紋が広がり、案の定魔女が姿を現した。

相変わらず厭味なくらい、男を誘う格好をして。

「見返りは？」

低く返す。

「おまえの食糧」

「却下。人間ならいくらでも自分で狩れるわ」

俺は目を細めた。

「――なら、俺の心を少し」

「まあ！ ずいぶん自信ね」

笑う魔女に、俺は言ってやる。

「現時点では、俺のおまえに対する感情なんて憎しみだけだからな」

いくら愛情を向けられてもその結果俺を苦しめるなら、そこには憎しみしか生まれないのだ。

水面に浮かんだまま、揺れるドレスと黒い髪。

揺れる視線と――その心？

やがて魔女は、唇の端だけでにやり笑った。

返事をせずに、消えていった。

それを見届けて、腰に手をあてたまま佇む俺はひとつ息を吐く。

(信じるしかない、か)

ラトゥナよりはるかに、分の悪い賭けではあるが。

まわれ右をして、馬のところまで戻ろうとした。

俺をとめるのは魔物の低い唸り声。

「えっ？」

とっさに振り返ると、先程まで魔女が浮かんでいたあたりの水面から、緑色の魔物が顔を出していた。

形はどこにでもいる水生生物のように見えたが、問題はその大きさだ。

眼だけで軽く俺の顔くらいあるだろう。

まさか、魔女の気にでも引き寄せられたのか？

「――出て、くるなよ」

同じ人間であるレニティス以上に、言葉が通じないだろうことをわかっていて、それでも俺はあえて口にした。

「人を襲うな」と。

すると通じたのか通じないのか、魔物の姿は再び水のなかに消えた。

「ちゃぽん」と、鳴った水面の余韻だけが残る。

その音を背にして、今度こそ俺は馬にまたがった。

まず目指すのは、ムーテルの町だ。

あの休憩所の主人に、リノに追いつくことができた件と、この馬をしばらく借りることになる件を、報告しておこうと思った。

手綱を握りしめ、ムーテルを出たときよりは幾分軽い気持ちで、馬を走らせる。

そのあいだ俺が考えていたことといえば、先程ちらりと姿を見せた魔物のことだった。

(ずいぶんと久々に見たな)

大陸中を旅していた頃は、国や町を襲う魔物をときおり見かけたが、シェロニアに住むようになってからは一度も見たことがなかった。

左右を大国に囲まれ、上下を自然の鉄壁に挟まれているからか、シェロニアには魔物が入りこむ隙もないらしい。

そのかわりといっちはなんだが、タフィレンやアテリスなどはたびたび襲われることがあったようだった。

そして、そういう情報を持ち帰ってくるのはいつも、それらの国に定期的に足を運んでいたシェロニア王で――

(……ん?)

俺はふと、思考のなかに妙な引っかかりを覚えた。

生粋のシェロニア人は、あまり他国に出入りはしない。

また外からシェロニアにやってきた人々も、結局は俺のようにシェロニアを気に入って長期滞在する者がほとんどだ。

だからシェロニアは、別に閉じられた国というわけではないのだが、少し閉鎖的な部分があった。

ただその分王は友好的で、五年ほど前から病気に苦しんでいながらも、タフィレン・アテリス両国を訪ねることをやめなかった。

――だが、その理由は、知られていない。

王はなぜ二国を訪問していた?

王が帰るたびにもちたされる、魔物襲来の情報にはどんな意味があるんだ。

それじゃあまるで王がそこに行くから、魔物が国を襲っているみたいじゃないか。

(……! 逆、なのか?)

魔物に襲われる国を、王が助けにいつているとしたらどうだ?

タフィレンやアテリスがシェロニアを襲わなかったのは、もしやその行為と引き換えだった?

しかし、ひとつ問題もあった。

何度も言っているが、シェロニア王はその身に病魔を抱えていたのだ。

そんな王が行ったからといって、魔物をそう簡単に追い払えるとはとても思えない。

王に〈魔が差していた〉というなら不可能ではないだろうが、そんなバカな話はないだろう。

それはリノを観察していたせいで王のこともよく見かけていた、俺自身がよくわかっている。

(そうだ、無理だ)

昔話に語られるような、伝説の勇者とは違う。

魔物を退治するための〈剣〉など、都合よく転がってはいない。

「――あああっ！」

思わず俺は、手綱を強く引いた。

俺よりも驚いたであろう馬が、前のめりになりながらもちゃんと足をとめてくれる。

(剣なら、あるじゃないか!)

俺やリノはそうと知らなかったが、タフィレンとアテリスからやってきた刺客は、あの棒が剣であるのだと知っていた。

ローノアードが日記で書いていた〈あれ〉というのも、おそらくあの剣のことなのだろう。

だとしたら考えられるのは、シェロニア王がその剣を二国で振るっていた可能性――

「それなら、いろいろと納得がいくな……」

ひとりごちてから、俺はまた馬を走らせはじめた。

昨夜リノを襲ったふたりが、それぞれひとりずつで動いていた理由が気になっていたが、それは目的があくまで「秘密裏に剣を手に入れること」だったからだろう。

たとえば兵を率いてリノを捜し出し、レニティスの一団に襲いかかるなんてことをしたら、リノを捕まえたという事実がターリエットにもばれてしまうのだ。

そうしたら剣のありかを尋ねるよりも先に、リノをターリエットに保護されてしまう可能性がある。

リノがターリエットに見つかることでシェロニアの土地は確実にどちらかのものにはなるが、その剣にもし本当に魔物を退治する力があるのならきっと、それはターリエットが保管することになるだろう。

だが、それでは駄目なのだ。

ことを荒立てずにリノと接触しようとしているところから見ても、やつらが狙っているのは剣のみ。

つまり剣が手に入らなければ、意味がないということ。

(勇者が振るいし伝説の剣、か)

その剣の名も、地域によって呼びかたが違うはずだが、シェロニアでは確か――

リノを捜して向かったシェロニアの城で、手にした勇者の本を思い出した。

同時に、昨日耳にした刺客の言葉も思い出す。

「――〈ハーレイオンの剣〉、だったな」

どうしてもっと早く思い出せなかったのだろうと、自らの記憶力を悔やんだ。

それから俺は、じっくりと時間をかけてタフィレンとアテリスをまわった。

まわって、自分の予想が外れていなかったことを確認した。

シェロニアの人々が考えるよりも、それらの国はひどい状況にあったのだ。

俺が以前滞在したときよりもはるかに。

タフィレンでは、北から攻め入ってくる魔物たちを特定の地形に閉じこめることで、なんとか街のほうまで被害が及ばないようにしていた。

国の人々の話によると、そうやって集めた魔物たちをシェロニア王が定期的に訪れては片づけてくれていたのだという。

ただ、どうやって片づけていたのかは、やはり城の者以外見たことがないようだった。

では今現在はどうなっているかという、すでに何匹かの魔物はその地形に捕らえられている

。

だがシェロニア王が亡くなってしまった以上、いずれそこだつてあふれることになるのだ。

問題はそれだけじゃない。

今までは陸を歩いて移動する獣型の魔物がほとんどであったのに対し、鳥型の魔物も増えてきたということで、地形を利用して捕らえるだけでは対応できなくなっていた。

弓や網で捕らえようとしてもうまくはゆかず、一部街のほうに被害が出ている。

ターリエットを通して他国に協力を求めているという話だったが、今大陸全土で魔物の発生が増えていることもあり、そう簡単に手を差し伸べてくれる者は現れない。

(だから剣を捜している)

シェロニア王がいなくても、その剣があればどうにかできると考えているのだろう。

一方アテリスでは、捕まえた魔物を残虐に殺していた。

そのせいか、タフィレンよりもはるかに魔物に襲われる回数が多く、街も直すたびに壊されるといった状況のようだった。

しかし、もともと軍事国家で兵力はかなり強いため、魔物の襲来そのものにはあまり困っているふうには見えない。

むしろ楽しんでいるようにすら見えたのだが……やはりそう思っているのは兵士たちだけらしく、真に国を支えている平民たちに笑顔はなかった。

魔物を退治してくれるのはありがたいが、そのたびに家や畑を荒らされてしまう。

また、食べるものがなくなると魔物の肉や臓を渡され、平民たちが蓄えてきた食糧は兵士たちに持っていかれてしまうというのだ。

「なにも壊されずにすむのは、シェロニア王がやってきた日だけだ」

俺に話を聞かせてくれたひとりの老婆は、涙を流しながらその死を嘆いた。

(だから、剣を捜している?)

――いや、違うのだろう。

こんな残虐な兵を率いているアテリス王が、国民のために剣を捜すはずがない。

きっと他になにか理由があるはずだ。

俺には思いつかないような、とんでもない理由が。

そうして数週間にわたる視察を終えたあと、俺は再びクートリア湖を訪れていた。

道中ムーテルに寄り、結局この馬は買い取らせてもらった。

しばらく返せそうになかったから、それがいちばんいいだろうと思ったのだ。

休憩所の主人は喜んで申し出を受け入れてくれ、通常よりも安い値段で譲ってくれた。

これからさらに長いつきあいになるであろう馬に水を飲ませてやりながら、俺は静けさを保ったままの水面を睨む。

「――〈喜の魔女〉、おまえは魔物をなんとかできないのか？」

〈喜の魔女〉だけじゃない、世界には他に三人もの魔女がいるのだ。

しかも彼女らは移動するのもきっと一瞬。

うまく魔物を治めてくれれば、少なくともタフィレンが剣を狙う理由はなくなる。

ゆらりと、水面が揺れた。

「じゃあ逆に訊くけど、あんたはなんとかできるの？」

「――！」

だが魔女の声がしたのは、俺の前からではなく後ろからだった。

するりと、冷たい腕が首にからんでくる。

「放せ」

「話さなきゃ、放さない」

「またそれかっ」

魔女の息が首筋にかかり、ぞわぞわする。

断じて感じているのではない。

気持ち悪いのだ。

「……………できるわけ、ないだろ」

魔女に比べたら、俺なんぞずっと無力だ。

魔物に襲われないだけで、命令できるわけでもなければ考えていることがわかるわけでもない

。

「だがおまえ、魔物を呼び寄せる体質なんじゃないのか？」

以前ここを訪れたとき、魔女が去ったあとに魔物が顔を出した。

――今だって、魔女は俺の後ろにいるのに、目の前の水面は揺れたまま。

何気なく口にした自分の言葉に、俺は真実を見出す。

「考えてみれば……そうだ！ タフィレンやアテリスが魔物によく襲われるようになったのは、おそらく俺がシェロニアに住むようになったあとのことだ。俺に執着しているおまえが、シェロニア付近にいるようになってから、だろう!？」

振り返りながら、俺は首にからんだ魔女の腕を振りほどいた。

話したのだからそうする権利があるはずだ。

魔女もそれを覚悟していたのか、ひょいと俺から離れて笑う。

「そんなの、私のせいじゃない。私は私の喜びに無関係なことには手を出さない」

「無関係？ どこが無関係なんだよっ、充分に喜んでいるじゃないか！」

声を荒げる俺の後ろで、激しい水音があがる。

とっさに再び振り返った俺は、動きをとめた。

「な……っ」

前に見た水生生物が、今回は眼だけでなく身体まで水面上に出していたのだ。

見た目は蛙のようだが、その身体はありえないくらい大きかった。

しかしながら、決して襲われることのない俺たちは、逃げる必要もない。

かといってこのまま魔物と見つめあっているのもなあと、俺が動けないでいると。

「……………」

無言を通したままの魔女が、俺の横を通りすぎ魔物に近づいていった。

「おいっ？」

「――で？ あんたは今、なんのために私を呼んだの？」

「え？」

行動と発言が伴っていない。

が、言われてここに戻ってきた理由を思い出した。

俺は魔女の後ろ姿に、答える。

「リノは今どこに？」

魔女は魔物と向かいあったまま。

「予定どおり、東で稲刈りを手伝っているさ」

そう答えてから、湖に向かって手を伸ばした。

「そうか……」

正確な地名を出さないあたりがなんとも魔女らしいが、一応俺の頼みは聞いてくれていたようだ。

俺は礼くらい言っておこうと思い息を吸ったのだが、次の瞬間、それを新しい文句にすり替えねばならなくなった。

「って、おい！ おまえ、やっぱり魔物消せるんだろっ!?」

魔女が湖に手を掲げてから数秒、それだけで、目の前から巨大蛙の魔物が消えていたのだ。

魔女はこちらを振り返らず、そのまま水面の上を歩いてゆく。

「消したんじゃない、移動させただけよ」

そして湖の中央、先程まで魔物がいた場所までたどりつくと、くるりと身体を反転させた。

その顔に、笑みはなかった。

「私にこれ以上期待しないほうが、あんたのためよクローギ。魔物と遊びすぎると、〈楽の魔女〉が黙ってはいないわ」

「え……」

それだけ告げると、消えた魔物と同じように消えてゆく。

(〈楽の魔女〉?)

それは楽しみを失いし魔女。

〈喜の魔女〉の言葉を借りるなら、魔物との遊びが楽しそうであればあるほど、それを自分も享受しようと現れる、ということなのだろうか。

「んな、バカな」

呆れはてた俺は、後ろに倒れるようにして座りこむ。

どこか身体の力が抜けてしまったようだった。

(ちょっと待てよ……)

それじゃあ最初から、〈楽の魔女〉が仕組んでいる可能性だってあるのか？

自分が魔物で楽しむために他の魔女にちょっかいをかけるなんて、実に魔女がやりそうなことじゃないか。

この大陸に存在する四人の魔女は、特別仲がいいわけでも悪いわけでもない、非常に微妙な関係性を保っていた。

だから互いに干渉することも、ないわけではなかったのだ。

「〈喜の魔女〉だけでも手いっぱいなのに、他の魔女まで相手にしろってか——？」

半ば頭を抱えて、俺は呟いた。

そんな俺を慰めるかのように、横でのんきになりゆきを見守っていた馬が、俺の頭を突っついてくる。

しかも、何度も。

「わかったわかった、わかったからやめてくれ」

俺が顔をあげると、馬は満足したように高くいなないた。

(馬に励まされるとはな)

しかし馬の言うとおりに(?)、座って考えこんでいたってなにも始まらないのだ。

今の俺は前に進むしかない。

もし道の先に〈楽の魔女〉が登場しても、どう対応するかはそのときどきで判断するしかないのだろう。

気持ちを切り替えた俺は再び馬にまたがり、メフィナのさらに東を目指すことにする。

米で有名な国といえばミシュルだ、リノはきっとそこにいるだろう。

手綱を引こうと手をあげたが、ふと、ひとつ思い出してそのまま手をおろす。

足で馬の向きを変え、湖のほうを向かせた。

「——ありがとな」

まったくガラではないのだが、あとで文句を言われては困るので言ってやった。

それはさっき言い損ねた分と。

「魔物と遊びすぎると、〈楽の魔女〉が黙ってはいないわ」

その情報の分の礼だった。

それから、一刻も早くこの場を離れたい気持ちでいっぱい、必死に手綱を握った。
らしくないことはするもんじゃないと、心から思った。

ミシュルでリノを見つけるのは、そう難しいことではなかった。

なぜなら、リノと一緒に活動しているレニティスの一団が、稲刈りで大活躍していたからだ。

レニティスの人々は、なにも無計画に世界中を旅しているわけではない。

人手が必要な場所に、必要な時期に、きちんと働きにいけるよう計画を立てて大陸を移動しているのだ。

今回東を目指したのも、ミシュル方面で米が豊作だという情報を手にしていたからだろう。

ミシュルは昔から米づくりの盛んな国で、大陸一の生産量を誇っていたのだが、米づくりは重労働のわりに稼ぎが少なく、若い人々があまりやりたがらないため年々人手が減っていたのだ。

田を管理するだけなら少人数でも十分に可能だが、田植えや収穫の時期にはどうしても人手が必要になってしまうため、大抵はどこかのレニティスの一団が手伝いに参加していた。

そう、レニティスの集団は大陸中にいくつも存在している。

それでも仕事がぶつかったりしないのは、常に互いの居場所を確認したり情報交換をしたりしているためらしい。

現に今このミシュルに来ているのも、リノがいるあの一団だけだった。

(おまけにこの豊作、だもんな)

レニティスが来ていなかったら、一体どうなっていたことだろう。

だから「レニティスたちはどこだ？」と訊くだけで、すぐリノにたどりつくことができた。

俺がリノから離れて数週間。

そのあいだにリノはすっかりレニティスの暮らしになじんだようで、楽しそうに稲を刈っていた。

表情に暗いところは見られない。

おそらく剣は無事なのだろう。

リノの隣にはあのとき剣を託したラトゥナがいて、リノに一生懸命なにか話しかけているようだった。

それがスーフォニア語(スーフォネルト)なのか、リノは複雑な表情をしてうなずいている。

(ハハ、わかりにくいもんなあ)

その様子が実に微笑ましくて、陰から見ていた俺は笑ってしまった。

こういう素直な表情を、シェロニア城にいるときに見てみたかった。

それが叶わなかったのは、リノ自身の問題でもあったし、周囲の環境のせいでもあった。

どちらも解消されている今――願わくはずっと、この生活が続いてほしい。

リノにとっては、それがいちばんいいことなのだろうから。

「……………」

俺はリノから視線を外して、ゆっくりと目をつむった。

(そう簡単にはいかないことも、ちゃんとわかっているがな)

現時点で剣はリノが持っているのだ、タフィレンにもアテリスにも絶対に見つけることはできない。

とすれば、今後またリノに目を向ける可能性がある。

そしてリノ自身だって、二国以外にも捜されているはずなのだ。

その相手は、ターリエット。

理由はもちろん、〈大陸法典〉に則りシェロニアの行方を決めるため。

きっとまた、ひと波乱ふた波乱あるのだろう。

魔女だって黙ってはいないはず。

(だが、ひとりじゃないからな)

おまえの胸には鳥が棲んでいるだろう？

リノがそれを忘れなければ、大丈夫。

強く目をひらいた俺の耳に、次に飛びこんできたのはラトゥナの声だった。

「きゃあっ」

短い悲鳴に急いで目を向けると、ラトゥナのそばに一匹の犬がいた。

(なんだ犬か)

安心しかけた俺は、自分のよすぎる目に感謝する。

(だがあの犬、どこか変だ)

なあ、足が六本ないか？

全身を覆う毛も、とてもやわらかそうには見えない。

まるでひとつひとつが鋭利な刃物ような感じだ。

それに、この距離で見てもあの大きさなら、実際は――

自然と、舌が鳴った。

(ちいさいが魔物か！)

ラトゥナはそれ以上動けないのか、持っていた鎌を足もとに落とし、それから後ろに尻もちをついた。

唸る魔物は口からよだれをたらしながら、ラトゥナに近づいていく。

ラトゥナの悲鳴でそれに気づいたリノはといえば、こちらも固まっていた。

ラトゥナにいちばん近い位置にいるのだから仕方がない。

他の大人たちだって、遠くから見守るので精一杯のようだった。

そう、普通は魔物とやりあえる人間なんて、アテリスの兵士たちくらいなのだ。

先日ラトゥナと一緒に組み手をしていた強そうな女も、今は近くにいないらしい。

じりりと、俺は地面を踏みしめた。

(どうする……!?)

俺が出ていけば、追い払うくらいはできるだろう。

だが確実にリノに姿を見られてしまう。

リノと瞳があってしまう。

それはある意味、魔物に襲われるよりも危険な状況かもしれなかった。

「リノ……リノお！」

震えながらも、必死にリノの名を呼ぶラトゥナ。

その声にリノは我に返ったのか、勇ましくも手に持っていた鎌を握り直し少しずつラトゥナのほうに近づいていった。

(リノ、無茶するなよっ)

もしリノが気を失うようなことがあったら、そのときはすぐに出ていこうと身がまえる。

俺の視線の先で、手を震わせたまま歩を進めるリノ。

しかしその歩き出しが遅かったせい、魔物のほうが先にラトゥナに到達しそうだった。

それを悟ったのだろう、リノは勢いをつけて地面を蹴り――

「ラトゥナ、さがって！」

ぶんと、ラトゥナの前に鎌を振りおろす。

その刃先は見事に魔物をかすめたが、相手に傷をつけるどころか跳ね返されてしまったのだった。

鈍い、金属同士ぶつかるような音が、あたりに響きわたった。

「うわっ」

リノはとっさに手を放し、鎌と一緒に飛ばされるのを防いだ。

が、そのせいで無防備な状態のまま魔物の前に立つ羽目になってしまう。

「リノっ！」

呼びたい俺のかわりに、ラトゥナが呼んでくれた。

トッと地面を蹴り飛ばした魔物が、リノに襲いかかってゆく。

(リノ！)

だが――意外にも、最悪の事態にはならなかった。

「……………えっ？」

リノのわき腹あたりに噛みつこうとした魔物が、不意に動きをとめたのだ。

それからリノの身体を利用してひょいと地面に飛び戻ると、まるで何事もなかったかのように、まだ刈っていない稲のなかへと消えていった。

踏み台にされたリノは、その反動でラトゥナの上に倒れこむ。

「あっ、ごめんラトゥナ」

すぐに起きあがろうとしたようだが、ラトゥナがそれを許さなかった。

横になったまま、リノに抱きついたのだ。

「オノママ・イアウォック。リノ・アテクサット・ホタギラ〜っ」

泣きながら、なにかを訴えていた。

けれどやっぱりリノにはわからないらしく、あやすように背中をぽんぽんと叩いてやっている。

しばらくふたりがそうして横になっていると、やがて例の強そうな女がふたりのもとに走ってきた。

「ラトゥナ！ リノ！」

そのやけに心配そうな表情から、それがラトゥナの母親であることを悟る。

すると今度はラトゥナのほうが素早く身体を起こし、母親に抱きついていった。

「エノナ・エノナ・リノ・イウサタ・オノママム・アテクサット！」

ラトゥナが必死に伝えているのは、自分を助けたリノのことだろうか。

そのあいだにリノも身体を起こし、服についた土などを払っていた。

少しわき腹あたりを気にしているところを見ると、もしかしたらそこにあの剣を隠しているのかもしれない。

(――ああ)

だとしたら、さっきの魔物の反応も納得がいく。

それが自らを斬るかもしれない剣なのだと、わかったのだろう。

ラトゥナの母親は、自分の娘を左手に抱きながら、リノに近づいて右手を差し出した。

それに気づいたリノは、恥ずかしそうにその手を見あげ――取ろうと伸ばした手は、届かなかった。

「あ……っ」

突然母親が胸を抑えて苦しみだしたのだ。

「テアルーさん!？」

リノが呼んだおかげで、母親の名前がわかった。

「だ、大丈夫よ、なんだか急に胸が苦しくなっただけだから……うっ」

「お、お母さん！」

ラトゥナが大陸語(ヘレンディア)で呼んだ。

だがテアルーは、微笑みで返せなかった。

(……リノ?)

その様子を、リノはひどく動揺した表情で眺めていた。

それからなぜか、ゆっくりとまわれ右をする。

ふたりに背を向けたのだ。

「お母さん！」

「あ……大丈夫よ、ラトゥナ。もう楽になったみたい」

後ろから聞こえた声は、きっと。

リノを絶望の淵に、叩き落したのだろう。

馬車をおりた僕は、あまりのまぶしさに目をつむった。

「うわあ……」

目をつむってもなお、黄金の光が目蓋の裏まで突き抜ける。

とりあえず馬車のほうに向き直って、目を慣れさせようとしていると。

「こりゃあほんとに、文字どおりの豊作だわねえ。数年前、魔物に稲を喰い荒らされたって聞いたときはどうなるかと思ったけど」

馬車からひょいと首を出したテアルーさんが、感心した声をあげた。

「手伝いがいがあって嬉しいなあ」

その後ろから、ブロートさんが先におりてくる。

(うーん)

何度見ても信じられない光景だ。

失礼ながら人間とは思えないの身体の大きさ。

正直馬車よりもはるかに大きいように見えるのだけど、ブロートさんはちゃんと馬車のなかに収まっていたし、他に僕らも乗っていた。

一体どういう原理なのだろう？

「どうしたんだい？ リノくん、変な顔して」

「い、いえ」

まさか本人に、「なかには空気が入っているんですか？」なんて訊けるはずもない。

僕は慌ててごまかすと、やっと慣れてきた目でもう一度田んぼのほうを見た。

「稲って、こんなに美しいものだったんだ……」

大陸一の米どころ・ミシュル。

そう勉強はしていた。

米はおいしいものだと知っていた。

だけど、美しいものだとは知らなかった。

ぐいと腕を引かれて横を見ると、いつの間にかラトゥナもおりてきていた。

「オメドゥ・オノク・エモック・イウサタ・イラック・ウブネーズ」

ラトゥナに対してしつこく大陸語(ヘレンディア)で話すテアルーさんみたいに、ラトゥナはなぜか僕に対してしつこくスーフォニア語(スーフォネルト)で話しかけてくる。

おかげでほんの少しだけ、わかるようになっていた。

(本当に、ほんの少しだけど)

今だって、聞き取れたのは〈米(エモック)〉という単語だけだった。

「米がなに？ ラトゥナ」

訊き返すと、テアルーさんがかわりに答えてくれる。

「でもこの美しいお米を、自分たちが全部刈っちゃうんだよって言ってる」

「あれ？ 僕が言ったこと、ラトゥナに通じたんですか？」

そうでなければできない切り返しだったから、不思議に思った。

「違う違う。リノと一緒に、単語から予想したんでしょ。今のこの子なら、〈田んぼ〉と〈美しい〉くらいしかわからないはずよ」

多分また正確には通じていないはずなのに、ラトゥナはこくこくとうなずいていた。

それを目にしたブロートさんは「ハッハッハ」と豪快に笑い。

「イネディウト・ラトゥナ・オトム・エッティ・アキウソウ？」

スーフォニア語でなにかを伝えると、ラトゥナの顔が一瞬にしてまっ赤に染まった。

それから「バカ！」という意味の言葉を吐き捨てるように告げて、ラトゥナは他の馬車のほうへと走って行ってしまふ。

「なにを言ったんですか？ ブロートさん。途中ラトゥナの名前が聞こえたような気がしたけど……」

人名の発音は変わらない。

だから人の名前なら、僕でも聞き取ることができた。

「え？ いや、なんでもないよ」

ブロートさんはさっき僕がしたようにごまかし、そして笑顔のまま。

「それより、さっそく手伝おう！ 手伝わないと次の旅の資金がないよ」

軽く恐ろしいことを告げた。

もちろん冗談なのだろうけれど。

そうしてみんな馬車からおりると、前にも手伝いに来たことがあるのだろうか、慣れたようにそばの小屋へと入っていった。

でも僕だけは、みんながおりたあとの馬車をまわって、リーズを捜す。

話しておきたいことがあったからだ。

(ラトゥナからこの剣を受け取ったあと、すぐミシュルへの移動になっちゃったもんな)

服の内側に隠した、剣を軽く押さえた。

リーズの手を煩わせるまでもなく見つかったことを、報告しておかなければならない。

それと、タフィレンとアテリスの刺客のことも。

リーズなら、彼らの動きからなにか推測できることがあるかもしれなかった。

「……あれ？」

しかしそのリーズが、なかなか見つからないのだ。

箱馬車はこれで最後なのに、ここにいないとなると、リーズもあの小屋へ行ったということなのか？

馬車のなかに突っこんでいた顔を、戻す。

――と。

「もしや、わしを捜しておるのか？」

「うわっ」

すぐ横に、さっきまではいなかったリーズの姿があった。

「お、驚かさないでくださいっ」

「おぬしが勝手に驚いたんじゃろうが」

「うう」

僕が前にリーズと会ったのは、薄暗い馬車のなか。

それ以外の場所で会ったことはない。

だから、明るい陽の下にいるリーズはどこか不自然で、かつ、怖かった。

深いしわが影のせいでよけいに深く見え……ああ、ごめんなさい。

「い、今までどこにいたんですか？」

ちいさなリーズを見おろしながら、僕は自分のなかの思考をごまかす。

本来ならば、しゃがんで目の高さをあわせるところなんだけど、リーズの場合それをすると逆に怒られそうのでできなかった。

多分リーズは、そんなふうにごちゃごちゃと考えている僕を見透かしていて、でもそのうえで気づかない振りをして、答えてくれた。

「わしのような老いぼれは、稲刈りなど手伝えんからな。せめてみなが休むテントくらいは組み——」

「組み立てておくんですか!？」

僕が思わず話を遮ってまで大声をあげてしまったのは、それがあまりにも無理なことのように思えたからだ。

レニティスたちのテントは、ひと口にテントといってもかなり大きなもの。

高さだってリーズの何倍もあるだろう。

それをどうやって組み立てると……

「——組み立てやすいように、テントの材料を並べておこうと思ってな。わしのどんな知恵を用いても、さすがにテントを組み立てるのは無理じゃ」

きししと、リーズは歯を見せて笑った。

(ああ……)

さっきのラトゥナみたいに、小屋に走って逃げたいくらいだ。

そんな気持ちも見透かされて。

「逃げるなら、この馬車のなかにしておけ」

リーズはそう告げると、ひょいとなかに入っていった。

「大事な話があるのじゃろう？ 外じゃ、おぬしはわしを直視できないらしいからのう」

「そ、そんなことは——うっ」

追いかけて馬車に乗りこんだ僕は、動揺からか見事におでこをぶつけてしまったのだった。

タフィレンとアテリスの刺客のこと、そして戻ってきた剣のことを話した。

やはり暗がりがよく似合うリーズは、「ふむ」と唸ってから。

「なら、しばらくはおぬしが狙われることはないじゃろう。おぬしが剣を持っていないと思っている以上、見つかるまでは他の場所を捜すはず」

そうであればいいと願っていた僕は、リーズにはっきりと言ってもらえてやっと安心できた。

しかしリーズの視線は、相変わらず厳しくて。

「それで？ リノソトス。その剣が狙われることに心当たりはないのかえ？」

「それが……父さんが他の国に行くときに、必ず持っていったたということくらいしか……」

その証拠に、僕はこれが剣だということすら知らなかったのだ。

——いや、実は今でも少し疑っている。

なぜなら剣身にあたる部分がないからだ。

そんなもの、〈剣〉とは呼べないだろう。

リーズの瞳が、さらに鋭さを増す。

「もしかしたら、シェロニア王は勇者の真似ごとをしていたのかもしれない」

「え？」

それがあまりにも予想外な言葉だったから、僕はリーズを凝視してしまった。

そのあいだに、リーズの顔がどんと赤くなる。

「これ、見つめるでないっ！」

「あ、ごめんなさい」

そういえばリーズ、最初は手を繋いだだけでも赤くなっていたっけ。

案外恥ずかしがり屋さんなのだろうか。

「ゴホン」と、わざとらしい咳をしたリーズは。

「大陸には、数限りない勇者の伝説が残っておる。なかでも多いのが魔物退治の勇者の話で、各国に必ずひとつはあるほどじゃ」

僕はあの勇者の本を思い出した。

「ええ、シェロニアにもあります」

「勇者が持っていた剣の名は？」

「え？」

訊き返したのは、問いの意図がわからなかったからだ。

リーズは片目だけ細めると。

「勇者の名も剣の名も、地方によって違う。じゃが、ファレスト山脈より南の、俗にシェロニア地方と呼ばれる地域では同じ名で呼ばれておったはず」

「って、タフィレンでもアテリスでも同じということですか？」

「そうじゃ。おぬしが聞いた剣の名はおそらく——〈ハーレイオン〉」

「あ……！」

(そういう、ことか……)

二国が捜しているのは、伝説の剣と同じ名を持つもの。

だからリーズは、父が勇者のようにそれで魔物を斬っていたのではないかと言っているのだ。

でも――でもそれはきっと、ありえない。

父の身体がよわっていたのは本当で、本来なら他国に赴くことだって許されないような状態だった。

それが、出掛けていったばかりか向こうで魔物退治をしていただなんて、あまりにも笑えない話なのだ。

「信じる信じないはおぬしの勝手じゃがな。その剣が狙われているのは事実。それだけは、忘れてはならぬ」

「――はい」

戸惑いながらも、僕は口を動かした。

(そうだ)

理由がわからなくても、僕が守るべきものは、はっきりとしている。

この剣と、レニティスのみんなと。

今僕にできることは、それしかないのだから。

「話を聞いてくれて、ありがとうございます」と言おうとした。

僕をとめたのは、リーズが続けた言葉だった。

「まあもう、その剣が本物であったほうが、わしらとしてはありがたいのじゃが」

「え？」

僕がこの剣を持っているということは、再び襲われる可能性があるということなのに。

僕はまたリーズを凝視しそうになって、軽く視線をそらした。

(ああ、なんか〈あのとき〉みたいだ)

凝視するどころか、顔を見ることさえままたらなかったあの人は、この剣に隠された秘密を知っているのだろうか。

「ここ数年で、魔物の動きがより活発になっておるからな。このあたりでも以前襲われたことがあるし、最近でもちよくちよく見かけるといふ。しかしな、大陸全土でそうなおるゆえ、魔物退治専門のスーフォニア―おぬしにはレニティスと言ったほうがいいかの―やつらとも連絡がとれんのじゃよ。わしの団は戦闘力が低いのが悩みでな。頼りになるのはブロートのところの三人ぐらいでな」

「三人？」

確かにブロートさんは強そうだし、テアルーさんは実際強かったけど、あとのひとりって？

リーズの表情が、実に楽しそうに歪んだ。

「なんじゃ、知らんのかい。娘のラトゥナもなかなか強いぞ？ テアルーが毎朝鍛えておるからな」

「……………」

戦っているところを想像できない。

けれどあの夜の踊りの、キレのよさを思えば十分に考えられることだ。

テアルーさんの足技だって、踊りのように華麗なものだったのだから。

「さて、話はこれぐらいにしておくか。テアルーあたりがおぬしを待っておるかもしれん」

リーズの促しに、僕は居住まいを正し今度こそ。

「ありがとうございました」

深く、頭をさげた。

リーズに話したおかげで、僕自身の心の整理ができた。

それだけでも十分な収穫だった。

「じゃあ、みんなを手伝いに行ってきます！」

リーズを手伝うと言っても、きっと断られるだろう。

それがわかっていたから、そう口にして馬車を出ようとした。

僕に。

「そのときが来るまでは、この生活を楽しむといい」

リーズが初めて、やわらかく笑った。

その笑顔は、魔女ではなく記憶の彼方にある〈母さん〉と似ていた。

「――あらリノ、どうしたの？ 顔なんか赤らめちゃって」

みんながいるはずの小屋に入っていくと、リーズの予想どおりテアルーさんしかいなかった。

……そう、僕のなかではもっとも〈母さん〉に近い人だ。

言われてよけいに顔が熱くなる。

「な、なんでもないです！」

「なんでもなくないでしょ。ちょっと見せなさい。熱があるんじゃないの？」

「あわわ、大丈夫ですってば！」

おでことおでこをあわせられそうになって慌てた。

僕は抵抗しつつも、話題そらしを試みる。

「それより、みなさんはどこに……？」

「もう鎌持って行っちゃったわよ」

応えたテアルーさんの表情が、不意に真面目なものに変わった。

「遅かったのね、リノ。リーズと話をしてたの？」

「えっ？ まあ、その……リーズにいろいろと相談に乗ってもらっていて……」

「そう……」

その表情があまりにも真剣だったので、僕は思わず動きをとめる。

(テアルーさん……？)

おでこをあわせることは諦めたらしい。

けれど今度は僕を抱きしめてきた。

「うわあ」

「確かにリーズは頼りになるもんね。――でもよかったら、アタシたちにも話してよ。わりとアナタのこと気に入ってるのよ？」

「は、はあ……ありがとうございます……」

胸に顔をうずめて言うことではないような気がするけれど、テアルーさんの声が深刻そうで、今度は抵抗もできなかった。

しばらくそうして、抱きしめられていた耳もとで。

「あのね、これはラトゥナも知らないことだけど」

まるで内緒話のように、囁く声がかすぐったい。

「なんですか……？」

しかしその内容は、とても笑えるようなものではなかった。

「ラトゥナ、生まれたときはお兄ちゃんも一緒だったのよ」

「え――」

「生まれてすぐに死んじゃったけどね」

テアルーさんは僕の身体を放すと、今度はその場にしゃがんで顔の高さをあわせてきた。

その瞳は、きっと僕と同じくらい、潤んでる。

「アナタがアタシたちに助けを求めてきたとき、ピンと来たの。あんなにちいさくても、最後まで『生きたい』って必死に訴えていた瞳と、とてもよく似てたから」

「テアルーさん……」

だからいつも僕のことを気にかけてくれていたのか。

僕が〈王子〉だからやさしくしてくれたみんなみたいに――？

(……ううん、違う)

僕は最初から、そんなふうに考えてはいけなかった。

いい加減に気づけよ、リノソトス。

僕自身だって、魔女やリーズやテアルーさんに、〈母親〉を重ねているじゃないか。

だからってそのやさしさは偽物？

大切に想う気持ちが、間違いだっていうの？

(そんなわけ、ないよね)

もう僕は疑わなくていいんだ。

その視線の先に誰を見ているも。

心のなかで誰を想っているも。

目の前に立っている存在は、気持ちは、いつだって本物で変わらない。

「やさしくしてくれて、ありがとう」

心のままに告げたら、テアルーさんは「泣かせないでよ」と、笑った。

レニティスは、僕が本から想像していたよりもずっと機能的で素晴らしい集団だった。

ひとりひとりがそれぞれ、複数の職を持っているのだ。

だからこのミシュルにやってきたのも、稲刈りだけを手伝うためではなかった。

(数週間一緒にいて、僕はそれを学んだ)

ボロボロになった鎌は鍛冶の技術を持った男性たちが直し、刈り取ったあとの稲を利用して手先の器用な女性たちが小物入れをつくった。

次の季節に向けて暖炉をつくる職人もいれば、刈ったばかりの米を買い取る商人もいる。

娯楽の面でも、踊りはもちろん占いや楽士など多才で、若者が減り暗くなりがちな国を大いに盛りあげた。

僕にもなにかできないかとテアルーさんに相談したら、踊り子が踊るための歌を覚えるよう勧められた。

メフィナの舞台上、テアルーさんが歌っていたあれだ。

最初はもちろん、恥ずかしいから嫌だと思った。

けれど自分の歌でラトゥナが踊るところを想像すると……これがなかなか、いい。

だってそれは同時に、いちばん近くでラトゥナの踊りを見られるということでもあるのだ。

しかもあの歌はスーフォニア語(スーフォネルト)の歌だったから、それを覚えるだけで少しだけわかる言葉が増えることになる。

(それから、毎晩練習した)

まず発声練習から始めて、実際に声を出せるようになるまでも結構かかったけれど、テアルーさんはあきずに教えてくれたし、ラトゥナも応援してくれた。

おかげでたった一曲だけど、なんとか歌えるようになった。

楽器まではさすがに覚えられなかったから手拍子で、ラトゥナに踊ってもらったときは本当に嬉しかった。

(下手くそでごめん)

でも、ありがとう。

伝えたかったから、『下手くそ』と『ごめん』をラトゥナに教えこんだ。

逆に、ラトゥナからも教えられた。

本当に楽しい日々だった。

――こんなに早く、終わりが来るなんて。

唯一の武器であった鎌は、あっさりとはね返されてしまった。

おかげで僕は、まったく無防備な状態で魔物の前に立ちふさがり羽目になる。

「っ……」

明らかに犬とは違う獣。

いくら物語で魔物を見たことがあるといっても、実物は全然違っていた。

(怖い――でも、よけるわけにはいかない！)

僕の後ろにはラトゥナがいるのだ。

リーズはラトゥナも戦力として期待していたようだけれど、僕以上に震えているラトゥナにはとても戦う余裕はないようだった。

そうこうしているうちに、魔物が勢いよく地面を蹴ってこちらに襲いかかってくる。

僕はもうやけくそで、後ろへは通さないよう腕を広げた。

(この棒が、本当に魔物を退治するための剣なら)

剣身さえあれば、よかったのに。

そんなことが頭をかすめた、一瞬。

「うわっ」

僕の左わき腹あたりに噛みつこうとした魔物が、「やっぱりやめた」と言わんばかりに僕を踏み台にして地面に戻ったのだ。

その反動で僕は、後ろにいたラトゥナごと倒れこんでしまう。

(どういうこと?)

僕がそこに隠しているのは、まぎれもなくあの棒で。

魔物はそれを恐れて噛みつかなかったのだろうか？

横になったまま首だけあげて魔物の行方を追おうとしてみても、とっくに姿を消しているようだった。

――そして僕はもう一度、まったく同じ疑問を持たざるをえなくなる。

(どういう、こと……?)

魔物騒ぎを聞きつけて、やってきたテアルーさん。

抱きついたラトゥナ。

それから僕に目を向けて、ふいに――心臓を押さえる、テアルーさん。

襲う既視感に、僕は耐えられない。

それは数週間前、僕の視線で顔を赤らめていたリーズではなく。

もっと前に、顔を歪ませていたあの人。

リーズのときも思い出していた、〈呪い〉。

僕は地面に尻をつけたまま、身体を回転させてふたりに背を向けた。

(ま、さか……)

それは実験。

呪いを確かめるための。

「お母さん！」

心配そうなラトゥナの声が、よけいに僕をしめつける。

それから僕の耳に届いた言葉は。

「あ……大丈夫よ、ラトゥナ。もう楽になったみたい」

(――ああ)

そのとき僕は、神は本当にいないのだと、改めて思った。

呪いは。

あの人にかけていたはずの呪いは。

(違うんだ)

あの人の心臓にかけていたんじゃない。

「僕の〈瞳〉に、かけられていたんだ……」

呟いて、僕はふらり立ちあがる。

それから――走った。

「リノ!？」

呼び声も無視した。

(なんて勘違いをしていたんだろう?)

僕はもっと、あの人に謝らなければならなかった。

もっと魔女を、疑わなければならなかったんだ!

「リーズ!」

耐えられなくて、名を呼びながら走る。

「リーズっ!」

一刻も早く僕の懺悔を聞いて、罵ってほしかった。

テントのあるところまで戻ると、リーズが外に出てきていた。

遠くから呼んでいる僕の声が聞こえていたからだろう。

「なんじゃい喧しい」

そう笑おうとしたリーズの、表情も凍りつく。

「――なにがあった?」

「あなたが言ったとおりだ、リーズ。僕はここを出ていかなきゃならない!」

視線なんかでみんなを苦しめたくはないから。

僕は流れるものをとめられない。

「どうして今さらっ……これまではなんともなかったのに!」

「リノソトス! なにがあった?」

テントに誰も残ってなくてよかった。

僕には周りを気にする余裕もなかったから。

「――魔女の、呪いが……」

ちゃんと喋ることもできなかった。

けれどリーズは辛抱強く聞いてくれた。

そして僕の懺悔から、ひとつの可能性を導き出す。

「おそらくその呪いは、おぬしを真に想う者に対し発動するようになっておるのじゃろう」

「え……?」

確かに、あの人はそうかもしれない。

僕が知らないあいだにも、あの人は僕を観察しずっと見守っていたというくらいだ。

今だってきっと僕を、どこからか見守ってくれているはず。

(でも、テアルーさんは……)

僕のことを少なからず想ってくれているのは間違いないと思う。

でもそれは、死んでしまった子どもの身がわりとして、という部分が大きいだろう。

たとえそうであっても僕にとってはありがたいことだけれど、それがどうしてこのタイミングで？

「おぬしが、ラトゥナを助けたのじゃろう？」

「――！」

リーズは鋭い瞳で、真実を語る。

「命を懸けて、ラトゥナを守ろうとしたのじゃろう？ 自らの娘をそうやって守られて、心を動かさない親などおらんわい」

今度は顔を赤らめなかった。

眼球に、僕が映っていた。

「……じゃあ、テアルーさんは……」

僕のことをラトゥナと同じくらい、想ってくれたから。

僕とはもう、瞳をあわせられなくなってしまった？

(なんだろう、これ)

頬だけじゃなくて、心までかゆい。

想ってもらえるのは嬉しいけれど、それで僕の瞳が凶器になってしまうのなら――

「僕、出ていかなきゃ」

ぼつり呟いた。

だってこのまま僕がここにいたら、もしかして他にも心をひらいてくれる人が現れるかもしれない。

なかに入ってみたらレニティスはみんないい人たちで、最初は距離をおいていた人だって時間が経ってみたらけろりとしていた。

ずっと前からの仲間のように接してくれた。

(みんなを苦しめたくない)

でも自分を偽るなんて、できない。

「そうか……」

リーズはそれだけ言うと、ぽんぽんと二回、僕の肩を叩いた。

「たまには会いにくるといい。わしならその呪いの餌食にはならん。なにせ、おぬしが思っとるよりもずっと腹黒い女じゃからの」

そうウインクした顔が妙にかわいくって、僕は泣きながら笑ってしまった。

「行くならみなが寝てからにしな。今日一日ぐらい楽しんだって、神さまも文句は言わないさ」

「――はい」

リーズの言葉に、うなづく僕。

(でもね、リーズ)

この大陸には、やっぱり神なんていないんだよ。

その夜、僕はラトゥナにお願いして、一曲だけ僕の歌で踊ってもらった。

途中からは涙で歌にならなかったけれど、テアルーさんが楽器を弾いてくれていたおかげで助かった。

みんな僕が泣いているのは、やっと歌を覚えられて嬉しいからだと思っているようだった。

もしくは、魔物からラトゥナを守ることができて嬉しいからだ。

(一一うん、確かに嬉しいよ)

みんなから離れることで、僕はみんなを守ることができる。

これは喜ぶべきことだ。

〈喜の魔女〉に、この喜びをおすそ分けしたいくらい。

(ねえ魔女、あなたも僕を見守ってくれているんでしょう?)

僕の歌は聞いてくれましたか?

オィア・オウコブ・ウレルソウ・エラカン

愛よ、僕を忘れるなかれ

オィエスヤート・オウコブ・ウサノア・エラカン

忠誠よ、僕を放すなかれ

オィジョヨーク・オウコブ・ウレツス・エラカン

矜持よ、僕を捨てるなかれ

オヨッティス・オウコブ・ウォモ・エラカン

嫉妬よ、僕を想うなかれ

オユシュークフ・オウコブ・ウァブ・エラカン

復讐よ、僕を奪うなかれ

オユィジェイ・オウコブ・ウラビス・エラカン

自由よ、僕を縛るなかれ

オィアグカァ・オウコブ・ウサワク・エラカン

迫害よ、僕を壊すなかれ

オワイナティ・オウコブ・ウムツツ・エラカン

悲嘆よ、僕を包むなかれ

オイス・オウコブ・ウボサエトム・エラカン
死よ、僕をもてあそぶなかれ――

そして、つけ加えるなら。

オヤツ・オウコブ・ウサカン・エラカン
歌よ、僕を泣かすなかれ

オヨイジャム・オウコブ・ウリガル・エラカン
魔女よ、僕を裏切るなかれ

――そう、僕は気づいていた。

どんなことをされても。

どんな呪いをかけられても。

やっぱり僕は、魔女のすべてを憎むことはできないと。

できるのは、敵か味方かと、疑うことくらいなのだ。

(今回のことだって、そうだ)

僕は魔女の呪いのせいで、レニティスのみんなと離れることを決意した。

でも……本当なら僕は、剣のせいでもなく呪いのせいでもなく、自分から離れねばならなかったのだ。

「なありノソトス、おまえはなんのために逃げていたんだっけ？」

こんな事態になって初めて、自問した僕は気づかされた。

最初は確かに、ローノアードの日記に従っただけだった。

けれど今は、違う。

僕は自分が生き延びるためだけに、逃げてきたのではないのだ。

本当の目的は、その先。

(僕が生き延び――国を、シェロニアを取り戻すために)

それは父が望んだ自由のなかで、まぎれもなく僕自身が選んだ自由だった。

「必ずしも国を背負う必要はない」と。

「未来を選ぶことができるんだ」と。

あの人は言ってくれたけれど。

「あなたさえ無事ならば国がどうなってもかまわない」と。

父もローノも言ってくれたけれど。

それでも僕は、国を取り戻すことを選びたかった。

選んだはずだったのに――忘れたふりをしていたのは、レニティスのなかでの暮らしが、やけに楽しかったから。

そこには僕が欲しかったものがすべてある気がして。

一度は自由になったはずだったのに、僕はまた自分からそこに閉じこもっていたのだ。

しかし魔女の呪いは、そんな僕を現実へと引き戻し。

(夢を見る時間は、もう終わりだ)

ここからは先は僕が自分の夢を掴むために、走り出す時間なのだ。

背中を押してくれる魔女を、僕はどうやって憎めばいいんだろう――？

楽しいひとときを終えて、みんなが寝静まった頃、僕はこそこそと動きはじめた。

荷物はあらかじめ、こっそりまとめておいた。

移動のための馬は、リーズが用意してくれることになっている。

あとは僕が、この短いけれど充実した時間に、お別れするだけ。

(うわあ……)

テントから外に出ると、大きなかがり火を囲んでいたときには気づかなかった、星空に目を奪われた。

それを束ねる月は、きっと行き場のない僕を導いてくれるだろう。

そう、思えた。

あたたかい輝きの下を、ひとり歩く。

(馬は……あそこか)

ちいさな息づかいが聞こえていたから、迷うことはなかった。

近づくと、少しずつ影が見えてくる。

「――え？」

その影の形があまりにもおかしいから、僕は足をとめた。

(まさか、こんなときに魔物!?)

今日見た魔物は、犬に似た形をしていた。

馬に似た魔物がいてもおかしくはない。

馬車の馬を守るための犬だって、今はそっちの馬のそばで寝ているのだろう。

ごくりと、僕は息を呑みこんだ。

もっと近づいて確かめるべきか、それともどうにかしてこの剣で追い払うか、迷う。

この棒が魔物を退治するための剣だなんて、僕はまだ信じられない。

けれど昼間の魔物は、確かにこの剣に反応して逃げていったのだ。

じりりと、足を動かした。

――と。

「……リノ……？」

(え……！)

か細く呼ぶ声がした。

それは他でもなく、前方から。

「ラトゥナ、なのか？」

足を速めて近づくと、ラトゥナが馬にまたがっていたのだった。

僕は啞然としてしまう。

「なんで……」

次の句を継げない僕に、ラトゥナはなにかの紙を差し出してくる。

広げると、びっしりと文字が書いてあるようだったけれど、ここでは暗くて読むことができなかった。

「リノ？」

俯く僕の名を、ラトゥナが呼ぶ。

「ラトゥナ、馬を、おりて」

顔をあげた僕は、少しでも通じるよう言葉を区切って告げた。

「やだ」

意味は伝わっているようなのに、ラトゥナはおりようとしなない。

「どうして……」

(僕を行かせないつもりなのか？)

無理におろすこともできず、ただ戸惑っていた。

僕の耳に、ラトゥナの想いが忍びこむ。

「エイロック・エカドゥ・アテオボ」

「これだけ、覚えた」。

僕にはそう聞き取れた、スーフォニア語(スーフォネルト)のあと。

「うわっ」

手を伸ばしたラトゥナが、僕の耳を引っ張った。

それから、そっと。

「一緒、行く」

「っー！」

僕がラトゥナのほうに顔を向けると今度は、テアルーさんが僕にやろうとしていたようにおでこをあわせてきて。

「わたし、一緒、行く」

はっきりとそう、口を動かした。

「ラトゥナ……」

僕をひきとめるためではなくて。

一緒にここを出るために、待っていたのか。

「でも無理だ……一緒には行けない」

だって僕は狙われているのだ、今は大丈夫でも、いずれは危険にさらされるときが来る。

そのときラトゥナに限らず、誰かを守れる自信なんて今の僕にはない。

こうして離れる以外に、僕は誰も助けられない。

「ごめん、ラトゥナ、おりて」

通じるはずの言葉を、僕はくり返した。

ラトゥナは首を振る。

「やだ」

「ラトゥナ！」

あまり時間をかけていては、みんなに気づかれてしまうかもしれない。

焦る僕とは裏腹に、馬上ではラトゥナが泣き出してしまった。

(泣きたいのはこっちだよ……)

僕だって離れたくて離れるわけじゃない。

できることならずっと一緒にいたいって、思った。

思ってしまった。

でもみんなの想いを犠牲にはできないから。

それに――僕にはやることがある。

「僕は国を、取り戻したいんだよ」

言葉がわからないのをいいことに、僕は泣きじゃくるラトゥナに告げた。

剣を守るのだって。

逃げるのだって。

すべてはそのためなのだ。

(僕は今改めて、国を取り戻すことを選ぶよ)

「レニティスのみんなは本当にやさしかったし、あたたかかったけど……でもね？ ラトゥナ。

本当は僕だって、そのあたたかさをまったく知らないわけじゃなかったんだ」

ひとりで冷たい檻のなかに閉じこもっていたのは僕自身なのだと、あの人に教えられた。

レニティスのみんなと生活して、気づいた。

(本当は大好きだったんだ)

好きじゃないふりを、していただけ。

「だから僕は、僕にとっての仲間を、取り戻したい」

壊されてしまった国を。

奪われてしまった国民を。

――まっすぐに、見あげていた。

ラトゥナは僕の視線の先で、なぜか微笑む。

「……！」

それから。

「リノ、歌う。わたし、踊る」

大陸語(ヘレンディア)のあとに、自分の言葉で。

「エイロス・アーミ・エムィ」

「ラトゥナ……」

たったひとつの単語しか、聞き取れなかったけれど。

それは僕の心を動かすのに十分な破壊力を持っていた。

もう――断れなかった。

僕はラトゥナの後ろに乗りこみ、ラトゥナが馬から落ちないように両腕で挟むようにして手綱を握った。

城にいたときから馬は乗っていたけれど、ふたり乗りは初めてだ。

少しの緊張を感じながら、手綱を引く。

星の天井を頼りに、とりあえず道の伸びているほうへ。

ただひたすらに、僕らは走りつづけた。

けじめのように。

引き返すことのできない運命のように。

(あの人は、僕を追ってくれているだろうか)

ふと考えた僕は、腕のなかのラトゥナを見る。

あの人と一度、会っているはずのラトゥナを。

「ラトゥナ」

名を呼ぶと、ラトゥナは少し頭を動かした。

でも体勢が体勢だけに、後ろを振り向くことは難しい。

「あの人が剣を受け取ったとき、どういう状況だったのか。ちゃんと大陸語が話せるようになったら、教えて？」

ただ拾っただけならば、まずテアルーさんたちに持っていくはず。

けれどあのときラトゥナは、寝ている僕をわざわざ起こしてまで、僕にあれを渡した。

返してくれたのだ。

それは多分、あの人が僕に渡すよう伝えたからだろう。

そう予想していた僕。

ラトゥナにはどうせ通じないだろうと、思っていた僕は。

「うん、がんばる」

「えっ？」

あたりまえのように返事をしたラトゥナに、心底驚いた。

「が、がんばるってラトゥナ、大陸語通じたの!？」

「うん、がんばる」

「……………」

(なるほど、わかったぞ)

ラトゥナは意味を理解しているのではなく、〈大陸語〉という単語に反応しているのだ。

きっとテアルーさんがいつも、「大陸語ちゃんと勉強しなさい？」とか言っていたから。

「――ラトゥナ、ありがとう」

意味もなく礼を言っても。

「リノ、どういたしまして」

意味もなく返ってくる。

これと同じことなのだ。

「……驚いて、損した……」

「んん？」

首をかしげる後ろ姿が、かわいいのがなんとも憎らしい。

(仕方ない)

テアルーさんにも頼まれているし、これからは僕が責任を持って大陸語を教えよう。

そう、誓った。

強すぎる海風が、どこか心地いい。

(この調子で、魔女の呪いも一緒に吹き飛ばしてくれればいいのに)

高い太陽に照らされ、キラキラと輝く海面を見据えながら。

叶うはずもないことを知っていて、俺は考えた。

視界の先に、また一隻の船が現れる。

(西のタターズの貨物船だな)

目のいい俺は、この位置からでも船首の旗を確認できるのが楽だった。

近づいてからでは、港に停泊している船が多すぎてまぎれてしまうため、逆に確認しづらいのだ。

ではなぜそれを確認しているかというと、万が一にでもタフィレンやアテリス、そしてターリエットのやつらと接触しないためである。

もしやつらが、リノを捕まえる目的以外でここにやってきていても、うかつに近寄らないほうがいいに決まっている。

その場合は、これからやってくるリノとラトゥナを、すぐ別の町に移動させるつもりだった。

そう、ここはミシュルの北にある港町・ネラ。

ふたりが馬で駆け出した道を、そのまま通ってくればたどりつくはずの町だ。

それがわかっていたから、俺はふたりの背中を見送ったあと、こうして先まわりしてきたのである。

ネラまでの道は森のなかをかなり蛇行して通っているから、道は無視してまっすぐに走れる技術さえあれば、かなり早くつけるのだった。

(お、また船が来たな)

視界の端に捉えたそれを、中央に持ってきて正確に見つめる。

今度は漁船だ。

船の上方では数羽のカモメが名残惜しそうに旋回している。

大漁だったのだろうか。

――こんなふうに、さまざまな種類の船がひっきりなしに出入りするのがネラの港の特徴だった。

ネラはシェロニア同様、近くに海流の交わる場所があるため漁が盛んであるのに加え、町の中央を広い運河が流れていた。

その運河は大陸の中心・ターリエットまで続いていて、地上でものを運ぶよりも早いといわれるほどだ。

おかげでやってくる船が多く、港もそれに耐えられるだけの広さを有している。

当然、作業する船乗りの姿もやたらと多い。

(このなかに刺客が交じってても、果たしてわかるかどうか……)

重い荷物を運ぶことが多いためか、誰もかれも筋骨隆々とした身体つきで、強そうに見えてし

まう。

おまけにやけに陽気なやつが多いから、怪しくて仕方がないのだ。

海に身体を向けて立っている俺の後ろを、ひっきりなしに通るやつらを横目に、俺は少しげんなりしていた。

「おいおっさん！ さっきからそうやって海眺めてるが、暇なんだったら荷物運び手伝ってくれよ。オレたちカモメの翼も借りたいくらい忙しいんだっ」

突然後ろからかけられた声に振り返ると、二十歳くらいの茶色い髪の男が、右肩に荷物を載せた状態で立っていた。

健康的に焼けた黒い肌が、笑った口もとに見えるまっ白な歯をこれでもかというほど際立たせている。

(なるほど、〈おっさん〉か……)

これくらいの年齢のやつらから見れば、三十を超えているはずの俺なんてとっくにそう呼ばれてしまう立場なんだろう。

「……暇そうに見えるか？」

からかうように片眉をあげて言ってやったら。

「ああ、かなりな」

素直に真顔で返されて、俺は思わず笑ってしまう。

「なっ、なんだよ！ なんで笑ってんだよっ!？」

海の男は、やはり無駄に陽気だ。

ごまかすように、俺も真顔をつくると。

「いや、手伝ってやろうと思ってな」

「えっ、ほんとか!？」

男の表情がとたんに明るくなる。

そのくるりとした瞳と人懐こい笑顔のせいで、もっと歳若い少年のようにも見えた。

(リノにこんな兄貴がいたらな)

リノの境遇もシェロニアの運命も、きっといい方向に変わっていただろう。

少なくともリノがさみしさを感じることはなく、背負わされる責任も初めから半分で。

もっと伸び伸びと成長することができたのかもしれない。

——そんなことを考えてしまったら。

「ん……やっぱ嘘なのか？」

「え？」

「おっさん、口もとが笑ってるぞ！」

自分では気づかなかったから、指で触れて確認した。

確かに、笑っていたのだった。

「手伝おうというのは本当さ。ただおまえを見て、知りあいを思い出したんだ」

これはごまかしではなく事実だ。

すると男は「ラッキー！」と、あいている左手の指を鳴らして。

「オレたちの船はあっちだ！ さあ、気が変わる前に早く行こう！」

肩に載せていた荷物をおろして、俺に押しつけながら告げたのだった。

(まったく……)

海の男は無駄に陽気で、そして図々しい。

しかしそれでも憎めないのは、その愛嬌のよさと。

「全部終わったら酒でもおごるからさ！」

感謝を忘れない心がまえのせいなのかもしれない。

(俺だってどうせ、ずっとここでふたりを待つわけにもいかないしな)

船乗りたちから他の地域の話や、ターリエットの話聞き出すのもいいだろう。

船乗り同士なら、普段見かけないやつや本来船乗りでないやつを見分けられる可能性もあった

。

そうして男に背中を押されるまま俺がたどりついたのは、貨物船にしては小ぶりの船だった。

人間が乗るとしたら十五人くらいだろうか。

「ちいせえけどかっこいい船だろ！」

確かに、ずんぐりむっくりしてやたらとでかい他の船に比べたら、剣のようにすらりと縦に長い船体は、〈かっこいい〉もののよう思えた。

「そうだな」

と、素直に応えたら。

「あ〜っ、おっさんバカにしてんだろ!？」

また自然と口もとが笑ってしまっていたのか、誤解されてしまった。

「なに騒いでんだザノリス？ まさかほんとに助っ人つれてきたのかー？」

俺たちの声が届いていたのか、船のなかから荷物を抱えた人が出てくる。

それはこの男・ザノリス(?)と違っていかにも船乗りといった感じの、立派な体格の男だった。

見事に船とつりあっていない。

男は俺と目をあわせ、一瞬あんぐり口をあけたあと。

「ははっ、さすが船長の息子だな、ザノリス。力強くて速そうな、理想的なやつ連れてきたじゃねーか」

そう笑った。

「だろっ？ ずっと海見て暇そうにしてっから、ここぞとばかりに連れてきたんだ！」

「ここぞとばかりにっ、おまえな……」

「じゃあほら！ さっそく荷物を運ぶ運ぶっ！」

相変わらず強引なザノリスは、言いながら再び俺の背中を押した。

おかげで岸と船とを繋いでいる細い板の上に駆けこむ羽目になった俺は、ふらり体勢を崩し海に落ちそうになる。

なにも持っていない状態ならバランスを取れただろうが、重い荷物を持たされていたから無理だった。

「おっさん!？」

さすがのザノリスも驚いた声をあげて、多分後ろから手を伸ばしてくれたのだろう。

だが、届かなかった。

――だが、届いたものもあった。

見えない手が俺を支えて、身体を押し戻してくれたのだ。

なんとか渡りおえ船上にたどりついた俺は、荷物を足もとにおろすと、思わずその場にしゃがみこみ頭を抱えてしまった。

「大丈夫かおっさん！」

トントントンと、ザノリスが慣れた足取りで板を渡ってくる音がする。

「……ああ、大丈夫だ」

(二重の意味で、自己嫌悪に陥っているだけだからな)

板の上でふらついてしまったのはもちろんのこと、こんなどうでもいい部分で魔女に助けられてしまったのが情けない。

普段はたいして協力的じゃなくせに、こんなときばかり勝手に手を貸してくるのだ。

魔女はからかいがうますぎて、だからこそ俺は好きになれない。

それを魔女だってきっとわかっていて、楽しんでいる。

だから〈楽の魔女〉に目をつけられたという構図が、もしかしたら裏に潜んでいるのかもしれない。

(だったらやっぱり、〈喜の魔女〉のせいじゃねえか)

考えれば考えるほど、憎らしい。

「おっさん？ どっか痛めたのか？」

俺がなかなか顔をあげないからだろう、ザノリスが心配そうな口調で訊いてきた。

「……いい加減、その『おっさん』というのはやめろ。俺の名はクローギだ」

顔をあげて立ちあがると、ザノリスの顔をまっすぐに見てやる。

とたんにザノリスの表情に明るさが戻り。

「おっ、よろしくな！ クローギ！」

大丈夫であることをちゃんと悟ってくれたのか、今さらながら手を差し出してきた。

俺も手を差し出して握手を交わしながら、「なるほどな」と納得する。

船乗りが海の色を読む――つまり天候を正確に予想できることはわりと知られているが、人の顔色を読むことにも長けていることは、意外と知られていない。

だが船乗りというのはある意味、人との繋がりがすべての職業なのだ。

仕事は常にそこから生まれ、ものが動く。

社交的でない船乗りには誰も頼まないし、誰にも信用されない。

それでも、ザノリスほどの若さでそれを完璧に身につけているのは、俺がこれまで目にしてきた船乗りたちから見ても珍しいことだった。

もうひとりの大きな男が「さすが船長の息子」と言っていたように、幼いころから船乗りの英才教育でも受けていたのかもしれない。

「おいらはメディックだ。ほい、この荷物を頼むな。場所はザノリスについていけばいい」

大柄の男・メディックが、手に持っていた荷物を渡してくる。

そのあいだにザノリスは、自分から船のなかに入って行って荷物を抱えて出てきた。

「運べる荷物を増やすために、乗組員はオレらふたりだけでね。ひとりが船の番してると、荷運びできるのがひとりしかいないんだ」

「それでいつも、港で引っかけてくるのか？」

俺がそう、女を口説いているかのように切り返すと、ザノリスはくしゃりと笑って。

「――いや、クローギみたいに声掛けやすそうな人はあまりいないさ」

「え……」

かなり意外なことを言ってきた。

(俺が「声掛けやすい」だって?)

なんて、耳を疑うのに好都合な言葉なんだ。

それからまた、岸へと続く細い板の上を渡りながら。

「いつもは同じ組合の船のやつらが手伝ってくれるんだが、今日はちょっとタイミングがずれて、誰もいやしない！」

前に向かって叫ぶザノリスの後ろを、俺もついてゆく。

今度は自分のペースで歩けるから大丈夫だ。

それから二時間ほど、ザノリスの船・ナーディロール号の荷運びを手伝った。

おろしている荷物は、大陸の中央から運んできた衣服などで、積みこんでいる荷物はこれから中央に持っていくミシュル産の米だという話だった。

(ミシュル、か)

リノとラトゥナも、そろそろここについただろうか？

聞いてすぐ、そのことを考えた。

夜になったら、また捜しにいつてみよう。

もともとナーディロール号の船長であったザノリスの父親は、一年前の航海中、海に投げ出されそのまま行方不明になってしまったのだという。

しかもザノリスの目の前で。

それ以来、自分は親友のかわりにナーディロール号に乗るようになったのだと、涙ながらに語ってくれたのはメディックだった。

「その日、なんとかひとりで港まで戻ってきたザノリスが、泣きながらおいらのところに走ってきたときはどうしようかと思ったが……よくぞここまで立派に育てくれた！ おじさん感激っ！」

「オレも感激っ！」

ふたりとも酒が入っているため、テンションがおかしい。

そう、結局俺はまだふたりに捕まったままだ。

荷運びを終えたあと、約束どおり酒場に連れこまれそのまま一―かれこれ四時間は経っている。

（おかげで話はいろいろ聞けたけどな）

ナーディロール号のメイン航路はこの運河内ということで、タフィレンやアテリスの情報はなかったが、その分大陸内部の話の詳細を聞いた。

特に、ターリエットのことを。

「あそこに南のシェロニア王代理がとっ捕まってるってのは有名な話だけど、近々なにか動きがあるらしいんだ」

ザノリスの言葉に、メディックが大袈裟に「うんうん」とうなずき。

「人の出入りがやたらと激しいからな一。大陸議会がひらかれる前兆かもしれんよ」

（おかしな話だな）

この時期に大陸議회를ひらくといたら、議題は〈シェロニアの今後〉くらいしか考えられない。

しかしそれは、リノがターリエットに行かなければ、もしくはその死亡が確認されなければ成立しない代物のはずだ。

ターリエット側にはなにか策があるのか？

「なに難しい顔してんだよ、クローギ！ ほら、もっと飲めって！ さっきから全然飲んでないじゃないか〜」

言いながら、完全にできあがっているザノリスが酒を注いでくる。

俺はもちろんわざと飲まないようにしていたのだ。

このあとふたりを捜さねばならないのもあったし、俺自身酒があまり強くないという理由もあった。

それが魔女の血のせいなのかは知らないが。

「いや、いい。もう充分におごってもらった。俺はそろそろ行く」

立ちあがった俺の袖を、ザノリスが掴んでくる。

「えー？ 待てよクローギっ、まだ話したいことがいっぱいあるんだよ〜」

「そっちのほうも、もう充分だ」

笑いながら、少し離れた位置にある出入り口の位置を確認した。

俺は固まってしまう。

(――え？)

ちょうどそこから入っていたのが、リノとラトゥナだったからだ。

ちゃんとネラにたどりつけていたのは喜ばしいが、問題はふたりの年齢だ。

まだ酒が飲める歳ではないはずだが……。

リノとラトゥナは扉近くで立ちどまると、興味深げにあたりを見まわしていた。

当然、みんなが座っているなかひとりだけ立っている俺も目に入って――

(しまった！)

と思ったときには、もう遅かった。

すっかり忘れていた痛みが心臓を刺激し、俺は再び椅子へと戻らざるをえなくなる。

「お？ また飲む気になったか！」

喜ぶザノリスをしり目に、目ではまだリノを追っていた。

リノが俺に気づいたなら、きっと俺のもとへ来るだろうと覚悟する。

――しかし。

意外にもリノは俺に気づかなかったようで、ふたりの後ろからやってきたこの店の店主らしき人に連れられて、そのまま左側にあるちいさな舞台のほうへと行ってしまった。

確かに目はあったのに。

それはこの、心臓の痛みが証明しているのに。

(魔女はまだ、俺たちを会わせる気がないってことか)

そう考えるしかなかった。

そしてそれならば、見つかる可能性をできる限りさげておかなければならない。

ふたりからは決して目の届かない位置に。

俺はもう一度立ちあがると。

「戻ってくる」

そう告げて店の奥に向かった。

今度はザノリスもメディックもとめずに、軽く手を振ってくれる。

ようは「吐きにいつてくる」ということなのだが、全然気分悪くなさそうな俺がそう言っても見送ってくれたのは、それこそ顔色を読んできたからなのかもしれない。

(表から出るのは目立ちそうだからな)

なんとか裏口から出られればいいが……と、勝手に店の裏のほうへと入っていく。

さいわいみんな舞台に注目しているようで、誰も俺のことを気にとめる者はいなかった。

なるほど、リノとラトゥナは踊りのために呼ばれたのか。

やがてリノのハリのある歌声が裏まで響いてきて。

リノはもう、愛想笑いで恥ずかしさをごまかすような子どもではないのだと、その成長を嬉しく思った。

同時に、すっかり父親のような思考回路になってしまっている自分に、苦笑する。

(よもや俺に、父性なんてものが存在するとはな)

そりゃあ魔女にだって予想外のはずだ。

魔女自身、俺に惚れることが予想外のことであったように。

きっと神のいないこの世界は、〈予想外〉でできている。

だから俺は、やっと見つけた裏口の向こうから声がしても、驚かなかった。

「――んなガキじゃ、金目のものなんて持ってねえだろ」

「いや、それが意外とな。身につけているアクセサリーはミースラ独自のものだが、なかなか高値で売れるんだぜ」

気配を消して耳をそばだてると、見えてくる計画が。

「ミースラ？ 言われてみればあの踊りもミースラの踊りか。単独で行動してるミースラなんて初めて見たぞ」

「……なあ、それならもしかして、あいつら自身のほうが高値で売れるんじゃないか？」

「ああ、そうかもな」

(――！)

ミースラというのは、言うまでもなくレニティスのことだ。

このあたりの地方ではミースラと呼ばれているのだが――まさかラトゥナがレニティスの出身であることが、あだになってしまうとは。

(どうやら、最初から盗むのが目的で酒場に誘ったらしいな)

この酒場の二階は宿屋になっている。

行き場のないふたりに、「酒場で踊ってくれたらただで泊めてあげる」とでも言って誘いこんだのだろう。

俺は物音を立てないように注意しながら、結局ザノリスたちがいるテーブルまで戻った。

ザノリスもメディックも一瞬意外そうな表情をしたが、「おかえり」となにも訊かずに迎え入れてくれる。

たとえかなりの酒が入っていても、相変わらずのようだった。

改めて、小さな舞台のある左の壁際に目をやる。

ここが舞台から最も離れた位置だったのはさいわいだった。

舞台ではまだラトゥナが元気に舞っていて、ずっとリノの歌が聞こえてはいたものの、つい安堵の息がもれる。

(さて、問題は どうやってふたりをここから出すか、だな)

踊りが終わったら、俺の姿をわざと見せて追いかけさせるか？

しかしリノに俺の姿が見えないなら、意味がないかもしれない。

ラトゥナなら？

リノのそばを離れてでも、俺を追ってくれるか？

それとも俺がいるのだと、リノに伝えようとしてくれるか？

有効な手立てを思いつけないまま、時間だけが過ぎてゆく。

――そんななか。

まだラトゥナの踊りは続いているというのに、酒場全体がざわざわと騒がしくなった。

いや、騒がしいのは常にそうだが、騒がしさの質が明らかに違うのだ。

(ん？ 誰か入ってきたのか？)

みんなの目は、いつの間にか舞台上のラトゥナではなく出入り口の扉に向いていた。

俺もそちらに目をやり、そして――再び、固まった。

再び、確実に目があい。

その瞳からくり出されたウインクに、周囲からため息がもれた。

――恍惚の。

気がつくと、リノの歌もやんでいて。

やっぱり信じられないものを見るような目で、そいつを眺めていた。

その――〈魔女〉を。

「……っ」

なにか口にしかけてやめたのは、その名を呼んでしまったらみなにばれてしまうからか。

俺たちがそれを口に出さなければ、誰もそいつが本物の魔女だなんて気づかない。

なぜなら、本当は誰も魔女の姿を知らないからだ。

本物の魔女を目にしてもなお生きながらえているのは、ついこの瞬間まで俺とリノだけだったのだ。

大胆にあいた胸もと、太ももの高い位置までスリットの入った黒いドレスを着た魔女に、目を奪われない男はいない。

俺の前に現れるときは隠しもしない禍々しい欲気も、今ばかりは微塵も見えなかった。

そんなふうになの視線を一身に集めて、魔女はゆっくりと舞台に近づいてゆく。

リノはもう完全に歌を忘れていて、立ちあがっていた。

ラトゥナは戸惑った様子で踊りをやめると、「一体どうしたの？」というふうにはリノを振り返る。

その、瞬間だった。

ゆっくりと進んでいたはずの魔女の足が、まるで車輪に変わったかのように速まり――瞬時にラトゥナを捕まえると、そのままものすごい勢いで酒場を出て行ってしまったのだ。

あとに残ったのは、ちいさな悲鳴の余韻だけ。

(あいつ……っ！)

それがあまりにも早技であったから、みなとめた動きを戻すことができない。

ただ魔女に誰よりも免疫のあるリノだけが、いち早く動き出せていた。

魔女を追って外へ――！

追いかけて立ちあがった俺の手を、不意にザノリスが掴んでくる。

「――!? なんだった？」

急いでいるから、ぶっきらぼうな問いになってしまった。

見返したザノリスの表情はやけに真剣で。

「クローギ、オレ、わかっちゃった」

「えっ!？」

(まさか、あれが魔女だってばれたのか?)

眉をひそめた俺に、ザノリスが続けたのは。

「あの子があんたの、面白い知りあい、だな？」

「……なんだ？ その〈面白い〉っていうのは」

「そっちのことか」と安堵しながらも、気になったことを問うと。

「だって、あの子のことを思い出して笑ってたんだろ？ それってなんか面白いエピソードがあるってことじゃないのか？」

面白い、というよりは――

「微笑ましいエピソードなら、たくさんあるがな。親が子を見守るようなものだと言ったら、メディックはわかってくれるか」

まだ二十歳そこそこのザノリスにはわからないだろうと思ったから、隣で話を聞いていたメディックに振ってみた。

メディックがまだ独身であることは酒の肴に聞いていたが、ザノリスを我が子のように想っている様子は十分に伝わってきていたから。

案の定メディックは、穏やかな笑顔で「そうだな」と呟くと、俺の手首を掴んでいたザノリスの手を外させた。

それから。

「舞台の前にあるカゴに、あの子らの稼ぎが入っている。持って行ってあげるといい」

そう教えてくれた。

「ありがとう」と、答えた俺はさっそく舞台のほうへと向かう。

(そういえば、そうだったな)

大道芸の町・メフィナでは、お金を稼ぐためではなく日頃鍛えた技を見せるために大道芸が行われる。

だから祝儀のたぐいは禁止されていた。

しかし通常では、大道芸人たちは生活のために芸を行うのだ。

報酬をもらうのはあたりまえ。

また、酒場なら相手が酔っている分いつもより多めにもらえる可能性があった。

これはぜひ回収していかなければ。

――そんな、余裕があるのは。

魔女は俺を本気で怒らせるようなことはしないと、どこかで信じている部分があるからなのかもしれない。

やっとざわざわと動きを取り戻しはじめた人々のあいだを縫って、俺は言われたとおり舞台の前に置かれていたカゴに近づいた。

何人かが、俺がそれを盗もうとしていると勘違いしたのか声をかけてきたから。

「俺はふたりの知りあいだ。ちゃんと届けてやるから文句はないだろう？」

睨んでやったら、再び動きをとめた。

まるでさっきのように。

そうして少しずつ、なぜか俺から離れてゆく。

その理由を、俺が知ったのは。

「お、おまえのその眼はっ!？」

誰かの叫びからだった。

(――！)

魔女の登場に気が立っているせいなのか、赤い眼になってしまっていたようだ。

一体いつから？

ザノリスやメディックの態度が変わらなかったから、まったく気づかなかった。

しかし今は、それもちょうどいい。

「――〈魔女の子〉は、どこにでもいる。誰もその悪事を知らないと思うな」

「っ!？」

何人かが息を呑み、そして何人かが店を飛び出していった。

身に覚えがあるのだろう。

――いや、もしかしたらたんに、俺が怖いのかもかもしれないが。

もしさっきの女が魔女だと知れたら、おそらくここにいる全員、そろって気絶していることだろう。

それくらい〈魔女〉の威力はすさまじく、〈魔女の子〉である俺に対する恐怖も並ではない。

もっとも、四人しかいない魔女の数に比べたら子は多く、「一度は見たことがある」というやつらも少なくはないだろう。

だが、だからといって簡単に恐怖が克服できるほど、人の心は便利にはできていないのだ。

悲鳴をあげながら次々に裏口へと殺到する客をしり目に、俺はカゴのなかのコインを乱暴に腰の袋のなかに移すと、まっすぐ表の出口へと向かった。

俺の分の料金は、そもそもおごりの約束だったから問題ない。

(――それでも少し、後ろが気になるのは)

ザノリスやメディックにどんな視線を向けられているか。

それなのかも、しれなかった。

「すまない主人、少々予定を変更したいのだが」

扉をくぐるなり、俺は奥のカウンターに向かって声をかけた。

そのまま近づいていくと、宿の主人はさっと新聞から顔をあげ、こちらを不思議そうな目で見返してくる。

「なんだなんだ？ そんなに慌てて」

「面倒はごめんだぜ？」と続けながらも、なにかあったのかとカウンターのなかで立ちあがってくれるこの主人は、俺がひと目見て「信用できる」と判断した相手だった。

だからこそ俺はここに泊まるつもりで予約を入れ、先に馬だけ預けてあったのだ。

しかし今、俺がここにやってきたのは寝るためではない。

「急で悪いが、俺のかわりに子どもをふたり泊めてほしい。もちろん追加料金は払う」

(港の夜は寒いからな)

酒場を一步出た瞬間、頬に冷たい海風を感じ取ってしまった俺は、追いかけるよりも先に宿の確保を選んだ。

立派なひげを蓄えた主人は、俺の言葉がよほど意外だったのか大きく目を見ひらくと。

「子ども!? って、一体どれくらいの子もだ？」

その驚きようは、赤ん坊レベルの子どもを想像してしまったからなのか。

「心配するな、ふたりとも十五・六、ちゃんと分別のつく年頃だ」

俺が言ってやると、主人は案の定あからさまに安堵の息を吐き。

「それなら別にかまわねえが、部屋はひとつでいいのか？ あと、預かってるあんたの馬はどうするんだ」

「……部屋は俺が頼んでいた部屋そのままいい。馬も、自分の馬は連れていくからそこにふたりの馬を入れてやってくれ」

さすがに少し考えてしまったのは、リノが男でありラトゥナが女だったから――だが、レニテイスのテントのなかでだって一緒に寝ていたのだから大丈夫だろうと、勝手に判断した。

もしかしたらリノは嫌がるかもしれないが、ラトゥナのほうは逆に一緒になければ不安がるのではないかと思う部分もあった。

俺は腰に提げた袋から、ふたりの稼ぎとして預かってきたコインをすべて出す。

ひとり分の宿代と馬の分はすでに払ってあったから、残りはひとり分なのだが、それはふたりが酒場で稼いだ分だけで十分に足りていた。

だから俺はあえてそれを出したのだ。

自分たちで得たお金で借りた部屋のほうが、ふたりは素直に泊まってくれるだろうし、嬉しいだろうと思ったから。

(いつまでも甘やかしてばかりもいられないからな)

ただ、もともとが心づけであるためちいさい単位の小コインしかなく、全部取り出したらえらい数になってしまった。

それでも主人は嫌な顔ひとつせず、その粗野な見た目とは裏腹に、カウンター上に置かれたコインを丁寧に数えていくと。

「おい、ちょっと多いぞ？」

「残りはふたりにやってくれ」

「――！」

その言葉だけで俺の〈信頼〉が伝わったのか、主人は照れくさそうに鼻の頭を掻いた。

それから眉尻をさげて。

「あんたはどうするんだ？ 部屋なら厭味なくらいあいてんだ、泊まっていけばいいだろ」

これが他の宿屋ならば「金のため」と透けて見えるような言葉も、この主人の手にかかればそれこそ厭味も消え失せる。

(だがまさか、本当のことなど言えるはずもない)

それ以前に、〈言えない〉だろう。

魔女の呪いはそう簡単には解けない。

過去に何度も唇を重ねられている俺は――俺の言葉は。

きっと俺が思うよりずっと、限られているのだ。

だから俺は、その言葉を聞かなかったことにした。

この主人なら、それでわかってくれると思った。

「――紙とペンを、貸してくれないか」

主人の唇から、ひっそりと苦笑がもれる。

それからカウンターの下のほうをまさぐって。

「喜んで」

(……！)

そんな言葉とともに、差し出してきた。

(喜んで、口を噤んでやるって？)

ちゃんと伝わったようで、俺も嬉しかった。

その反面、「こんなことで喜べるなら魔女も楽なのに」なんて、バカなことを考えた。

――それが、魔女にも伝わっていたのだろうか。

借りた紙とペンで、宿を取ってあることを伝えるリノ宛ての手紙を書いている最中に。

「えっ!？」

書いた先から、手紙が消えてゆく。

一文字書くたびに、一文字分消えるのだ。

さすがの俺も声をあげて驚いた。

当然主人は、それ以上に驚いている。

(魔女……おまえがこの手紙を渡してやろうというのか？)

そう、この手紙を書いたところで、今度はどうやって渡すのかがまた問題になるはずだった。

しかし手紙が消えるなんて仕業が、魔女のせいではないはずはなく。

だとしたら、その理由はリノに渡すためにほかならない。

それ以外の選択肢では、俺が魔女を許さないから。

俺は手紙を書きつづけた。

最後まで一一書きおわる、直前。

手紙はすべて消えた。

きっと名前を書かれることを、嫌ったのだろう。

それでも今までの魔女の行為を思えば、十分な譲歩だった。

(一体どういうつもりなんだ?)

酒場に現れたことといい、今といい一一昼間に俺を助けたことといい。

魔女が妙に協力的なのは気持ちが悪い。

一体なにを、企んでいるんだ?

心のなかで鋭く魔女を睨む俺に。

「驚いたなあ、あんた手品師だったのか」

自慢のひげをなでながら、主人はとぼけた顔でそんなことを言うてくる。

だから俺も、とぼけて。

「一一ああ。泊まるふたりは、俺の弟子なんだ」

そう言ってやった。

(本当の手品師は、魔女だけだな)

俺たちは所詮、魔女が手品をするための道具にすぎない。

そして魔女が驚かすための、観客にすぎないのだ。

一一それからしばらくして、俺が捜すまでもなく〈三人〉はこの宿に現れた。

そう、意外にも魔女はまだ、ふたりと一緒にいた。

月明かりのもと、リノが馬の綱を引いて歩く横で、魔女は気を失っているらしいラトゥナを抱え歩いていたのだ。

俺はその様子を、宿の向かいの茂みから見守っていた。

リノはともかく、魔女はそのことに気づいているはずなのに、おそらくわざとなのだろう、ひと目たりともこちらを見ない。

まるでふたりは自分のものなのだとおぼんじりだ。

(まさかあいつ、一緒に泊まるつもりじゃないだろうな!?)

魔女が人間用のお金を持っているなど考えられないことだが、あの魔女ならその色香だけでなんとかしてしまいそうで怖かった。

現に、酒場にいた男たちはあの一瞬でほぼ完全に魅了されていたのだから。

にわかには心配になる俺の耳もとで。

「〈母親〉と一緒に寝ることが、そんなに心配するようなことかしら？」

不意に聞こえた囁きは魔女のもの。

そして首筋にかかる息に、俺は身をよじらせた。

「気持ち悪いことするな！」

反射的に振り返りその場を一步退くと、すぐそこにさっき宿へと入っていったはずの魔女が

いた。

暗がりのなかでもはっきりと、背景から浮いて見えている魔女。

「それに、誰が〈母親〉だ誰が！」

続けた俺は、少し怒っていた。

リノが魔女に――大人の女性に〈母親〉を重ねていることは、もちろんわかっていたのだ。

しかしこの魔女の口からは、そんなこと確認されたくもない。

だいいち母親ならば、子どもを困らせるようなことはしないはずだろう？

俺がいつものように思いきり睨んでやると、魔女は「ハッ」と笑って。

「私が親切にすればしたで、結局あんたはうさんくさがるのね、クローギ」

「おまえの普段の態度考えたらあたりまえだろっ!？」

「あんまり大声出すと、あの子に気づかれるよ」

「くっ」

俺が言葉につまった隙に、魔女はくるりと背を向けた。

「おいっ、なにを考えている……!？」

そのまま消えてゆく魔女に、今度はちいさく叫んでやると。

「常に、私だけが喜べる瞬間を――」

言葉は最後まで聞こえなかった。

消えた言葉の終わり。

消えた魔女。

そして――翌朝。

馬の体温で暖を取りながら眠っていた俺は、宿から誰かが飛び出してきた音で目を覚ました。

潜んでいた茂みから顔を出してみると、それは宿屋のひげ主人で。

主人は魔女のごとく抜け目ない目ざとさで俺を見つけると。

「ああっ、やっぱり近くにいたか！　すぐに来てくれ、あんたの子どもが大変なんだ！」

「……はっ!？」

(今なんて言った?)

俺の子ども？

昨日は確かに「子どもをふたり頼む」と言ったが、弟子ならまだしも俺の子どもだなんて一言も言っていない。

俺はしぶしぶ出ていきながら。

「いつからあいつらが俺の子どもになったんだ？」

逆に訊いてやると、主人はきょとんとした顔をして。

「違うのか？　奥さんとケンカして家を出てきて、でも腰を据えて話しあうことになったから子どもたちを宿に預けて一度戻ったんじゃないかねえのか？　それで、やっぱり心配になったから見にきてたんだろっ？」

「っ!？」

(なんてたくましい想像力だ……)

啞然とした俺は、声も出せなかった。

そもそも、魔女がふたりを送り届けたりなんかするから、こういう面倒なことになるのだ。しかもそれでは魔女が〈母親〉で俺が〈父親〉ということになってしまう。

……いろいろと、勘弁してほしい。

「――一体、なにがあったんだ？」

気を取り直して、俺は訊いてみた。

「大変だから来てくれ」と言われても、ほいほいと近づける俺じゃない。

近づけるものなら最初からそばにいるのだ。

すると主人は、そんな俺をもどかしく思ったのか、むんずと手を掴んできて。

「いいから来てくれ！ 男の子が消えちまったんだよ。そしたら女の子が泣きやまなくてな」

「な……！」

(消えた？)

消えた魔女のように、リノも消えてしまったというのか――？

だが逆にいえば、リノがその場にはいないのなら俺だって近づける。

だから俺は、引かれる腕に逆らわず歩いた。

そうして通されたのは、二階の一室だ。

そこにはラトゥナだけがいて、リノが寝ていたのだろうベッドにうつ伏せて背中を揺らしていた。

「ラトゥナ……？」

脅かさないようにちいさく呼んでやると、びくりとひときわ大きく、その背中が揺れた。

それからゆっくりと、振り返ったラトゥナの手に握られていたものは――

(ん!? あの剣じゃないか……!)

魔物を倒すための大切な剣を手に、俺の顔を確認したラトゥナがゆっくりとこちらに近づいてくる。

「ラトゥナ」

俺はもう一度名を呼ぶと、身をかがめて手を広げ、その到着を待った。

ラトゥナと直接顔をあわせたのは、これで二度目だ。

けれどラトゥナは俺を忘れることなく。

俺を恐れることもなく。

ためらいなく、この腕に飛びこんできてくれた。

ラトゥナはリノがあの手を大切にしていることを知っている分、それを届けた俺に対しいい感情を持ってきていたのかもしれない。

誰かを抱きしめた経験などない俺はその加減に困ったが、せめて壊さないようにとやさしく、背中に腕をまわす。

「ほーら、やっぱり親子なんじゃないか」

その様子を見ていた主人が口をひらいたが。

「どこの世界に、言葉の通じない親子がいるんだ」

俺は言ってやった。

「へ？」

それからにやりと笑うと、腕のなかのラトゥナに視線を戻して。

「ラトゥナ、リノはどこに行った？」

多分〈リノ〉という単語だけに反応して顔をあげたラトゥナだったが、当然答えられるはずがない。

それでも涙は一応とまっていたようだから、少し安心した。

「言葉がわからないのか？」

「ああ、スーフォニア語(スーフォネルト)しかわからないんだ」

「そうか！ ミースラの子かあ」

感心したような声をあげる主人を後目に、俺はぐるり部屋のなかを見まわした。

宿のなかでも下位宿のため部屋は狭いが、きれいに掃除された空間にベッドがふたつ並んでいた。

俺は自分が予約していた部屋でいいと言ったのだが、ちゃんとふたり用の部屋に替えてくれていたようだった。

ベッドとベッドのあいだには、ちいさな机があり――

(ん……？)

机の上に、白い紙が置かれているのが見えた。

そして俺の目なら、ここからでもその紙に書かれている文字が読めた。

リノの手紙だ。

俺はラトゥナが完全に泣きやんだのを確認してから、そっと手を放し立ちあがる。

手紙を取るためにベッドの向こう側に移動すると、ラトゥナも一緒についてきた。

手紙の内容は、こうだ。

――魔女に愛されしあなたへ

行かねばならない場所ができました。だけど、そこには剣もラトゥナも連れていくわけにはいきません。勝手なお願いですが、僕が戻るまでのあいだ、剣とラトゥナを頼みます。リノソトス――

短い手紙ではあったが、そこに書かれていたのが本名であったから、リノの本気さはなによりも伝わってきた。

(行かねばならない場所？ 一体どこに――)

まさかシェロニアに戻ったのか？

だがなんのために？

「――！」

考えるため動きをとめた俺の服を、ラトゥナがぐいと引いた。

なにが書かれてあったのかと訊いているのだろうが、答える――伝える手段のない俺は、とり

あえずつくりものの笑顔でごまかしてやった。

「なあ、これもあんたの手品なのか？」

「え？」

不意に尋ねてきた主人の声に顔を向けると、主人は今までとは違う真剣な表情でこちらを見返していた。

(かばうのも限界、というわけか)

宿の主人なのだ、夜でも誰かが勝手に出ていったら気づかないわけがない。

そんな主人は存在しない。

魔女でもない限り、そんなことはなしえない。

それを誰よりも、わかっていたから。

「——大丈夫だ、主人」

息を吸って、続けた。

「もう二度と、ここには来ない」

「えっ？ そ、そんなつもりで言ったんじゃ」

「わかっている。ただ、俺が迷惑をかけたくないんだ」

「……………すまない」

俺はリノの手紙を片手に。

ラトゥナはリノの剣を片手に。

残りの手は、繋いで。

俺たちは部屋を出た。

宿を出た。

言葉がなくても、目的は同じだ。

リノを、捜すために。

港はすでに賑わっていた。

それを見越して足を運んだ俺でも、思わず驚いてしまうほど。

(なんだ?)

船乗りたちは昨日と変わらず荷物運びに躍起になっているが、その表情は明らかに昨日とは違っていた。

どこか必死さが見えるのだ。

運んでいる荷物の量も大きさも半端ではなく、人の手だけではまかないきれずに馬を使っていた。

しかし通常なら船乗りは、「自分たちが乗るものは船だけ」という気持ちは強く、船以外の乗りものは一切使わないほどのプライドを持っているはずで――

(一体、なにがあった?)

まさか魔女が港を荒らしたとでもいうのか?

昨日の魔女の様子では「絶対にありえない」などと言い切ることはできず、俺はすれ違う馬に気をつけながらあたりを見まわしていた。

この時間港には男ばかりで、ラトゥナ以外まったくと言っていいほど女がいないため、逆にかなり見られているような気もしたが、俺がそちらに目を向けるとみな、ふいと顔をそむけ知らないふりをするのだった。

どうやら昨日の酒場は、大勢の船乗りたちが行きつけの酒場だったようだ。

俺が〈魔女の子〉だという情報はすっかりまわってしまったのだろう。

それでも走って逃げ出さないのは、そばにラトゥナがいるからか?

喰うときはどうせラトゥナから喰うのだろうと、安心しているのかもしれない。

(だが、さすがにこれでは話も聞けないな)

もしラトゥナが大陸語(ヘレンディア)を話せたなら他の対応もできただろうが――いっそのまま馬に乗って、南を目指してしまったほうが早いのか?

歩いていた足をとめ、考えをめぐらせる俺の顔を、繋いだ手の先のラトゥナが見あげてきて。

「リノ・イム・ウーキ?」

なにか訊いてきたが、リノの名しかわからなかった。

また曖昧な笑顔しか、返せない。

(情けない、な)

いい歳して子どもひとり守れず、不安にさせるだけ。

そもそも俺がリノから離れさえすれば、魔女が罫を仕掛けてくることはないのだとわかってはいたのに、それ以外の不安要素がありすぎて離れられなかった。

結果こうして招かれたのは、魔女が絡んでいる分俺にとっての最悪の事態だ。

巻きこんでしまった傷を、自分自身でさらに広げていることになるのだから――

「また海を見にきたのか?」

(一一！)

不意にかけられた声に振り返ると、そこには昨日会ったザノリスが立っていた。

その手は腰にあてられていて、他の船乗りたちのように荷物を運んでいるわけではないようだ。

一一いや、それもそうなのだ。

荷物運びは昨日ですべて終わらせた。

それは手伝った俺もわかっていた。

ではなぜ、ここにいる？

あとは旅立つだけのはずなのに。

相手の思考を読むように睨んでやると、ザノリスはちいさく笑って。

「そう警戒するなよ。ただ確認したかったんだ」

「……確認？」

「あのあと、ちゃんとふたりと会えたかなって」

「ああ……」

そうして視線を、ラトゥナに向けた。

するとラトゥナはその視線からさけるように、俺の後ろへとまわりこむ。

踊っているときは、それはそれは大胆な振りを見せるラトゥナも、舞台をおりればただの少女

ましてラトゥナは、まだレニティスの集団から離れて数日しか経っていないのだ。

戸惑うのも無理はない。

そんな事情など知らないザノリスは、ラトゥナの子どもじみた仕草にまた笑って。

「もうひとりはどうしたの？ もしかして、はぐれた？」

気軽に問いかけてくるその態度は、他の船乗りたちとは違い昨日とまったく変わらない。

むしろ俺のほうが戸惑ってしまう。

「あ、ああ……だから情報を探しにきたんだ」

「あ！ そうか、もしかして昨日港にいたのもそのためだったのか？」

本当は違うのだが、説明が面倒なのでうなずいておいた。

ザノリスは「んー」と右手で頭を搔きながら。

「昨日ならともかく、今日はみんなそんな暇ないかもな。いや、あんたがどうって問題じゃなくてさ」

「なにかあったのか？」

昨日とは明らかに空気が違うのは、俺のせいだけではないと？

「あったもなかった、大ありさ！ 今朝早くにターリエット直通の船がついたんだ。ヘマをすれば比喩でなく首が飛ぶ仕事だ、おかげでみんな大真面目！ もう必死！」

(一一!?)

嫌な予感がした。

思わずラトゥナと繋いでいる手に力が入ると、ラトゥナも握り返してくる。

言葉がわからなくても、俺と同じようになにかを感じているのかもしれない。

「直通ということは、ターリエット内部の情報も入ってくるのか？」

どこか緊張して尋ねると、ザノリスは少し目を細めて。

「ああ、もうすぐ〈ターリエット新聞〉が刷りあがってくるはずだ」

それは聞いたことがあった。

伝聞では広がっていくうちに誤った情報にすり替わってしまうこともあるため、あえて紙に印字してから情報を流しているのだと。

「ほらきた！ あいつだ、あの赤いベレー帽のやつが、情報員だ」

不意にザノリスが俺の後ろを指差す。

振り返ってみると、俺がその人物の存在を確認したとたんに見えなくなった。

そう、あつという間に人々に囲まれてしまったのだ。

しかし囲んでいるのは、どうやら船乗りたちではないようだった。

船乗りたちは相変わらずターリエット船の対応に必死で、新聞に群がっているのは普段あまり港には来ない町の住人らしい。

ターリエットの情報は気になるが、そのなかに入りこんでいくのはさすがに気が引けて。

「もらいにいかないのか？ クローギ」

心底不思議そうに訊いてくるザノリスに、答えてやった。

「俺が行ったら、俺しか残らないだろ」

俺が〈魔女の子〉だと知っているのは、なにも船乗りたちだけでないだろう。

するとザノリスは、唇の端で苦笑しただけだった。

相変わらず俺を怖がる様子は微塵もない。

「議会に向けていよいよ動き出したな！」

「しかしこれ、ものすげえ脅しだぜ!？」

やがて新聞を読みおえた住民たちの会話が聞こえてくると。

「――！ おいっ、ラトゥナ？」

不意にラトゥナが俺の手から離れ、そちらのほうに走って行ってしまった。

(ああ――そうか)

しかし考えれば、新聞をもらってくるだけなら大陸語が話せないラトゥナでもなんとかなるのだ。

みなお金を払っている様子はないし、おそらく無料なのだろう。

追いかけてその場で待っていると、意外と要領よく新聞をもらって戻ってきたラトゥナが、誇らしげな顔で俺にそれを差し出してくる。

「どうぞ？」

それはまるで、あのときの再現。

俺がラトゥナに、リノの剣を渡したときの。

俺が「どうぞ」と告げた言葉に、ラトゥナが応えた。

しかし今は、その逆。

「――ありがとう」

受け取りながら俺が告げると。

「どういたしまして」

ラトゥナが笑った。

きっとラトゥナもあのときのことを思い出しているのだろう。

読めないとわかっていても一応、ラトゥナにも見えるようにしゃがんでから新聞をひらいた。

ザノリスもひょいと覗きこんでくる。

そこには、衝撃的な見出しが躍っていた。

――シェロニアの頭脳・ローノアード、処刑す――

「な……っ!？」

たとえターリエットであっても、罪を犯していない者を処刑できるような権限はないはずだ。

それともローノアードがターリエット内でなにかやらかしたのだろうか？

記事を読み進めていくと、なるほど先程の住民たちが話していた〈脅し〉の意味がわかってくる。

つまりこういうことなのだ。

次の大陸議会がひらかれる一週間後までに、シェロニアの現王にあたるリノがターリエットに赴かなければ、その時点でローノアードを処刑すると。

国が失われたからといって逃げつづけるのは、〈大陸法典〉に違反していると訴えているわけだ。

(だが、こんなのは詭弁だ)

それが正しく戦争に負けた結果であるのならまだしも、シェロニアの場合は血を流さないための故意の放棄だった。

まして、それを考え実行したのはリノではなく、少なくともリノ自身には国の権利を守るために逃げる猶予があるはずだった。

いつものターリエットなら、きっと間違いなくそれを許していたのだ。

人の命を盾にするなど、とても考えられないこと。

「ターリエットがここまでするなんて、どういうこった？」

おそらく俺よりもターリエットの情報に詳しいであろうザノリスですら、そうして首をかしげてしまうような状況なのだ。

(こんなものを見て、リノがターリエットに行かないわけがない)

魔女だっておそらくそれを見越していて、新聞の内容をリノに教え連れ出したのだろう。

「ターリエット・シーイ・リノ・オヌリアーグ？」

ところどころ、わかる単語をまぜて訊いてくるラトゥナ。

おかげでザノリスもピンときたようで。

「なんだ？ そいつ、ターリエットに行ったかもしれないのかっ？」

リノがこの新聞で呼ばれている人物だとわかったわけではないのだろうが、そう訊いてきた。
「その可能性は、かなり高いな」

そして魔女が味方についているのなら、距離などものともせず、もうたどりついている可能性すらあるのだ。

実にやっかいな話だった。

(魔女のやつめ……)

ある程度目的が見えているアテリスやタフィレンよりも、目的の見えない魔女のほうが恐ろしい。

手段を選ばない魔女のほうが。

さて、どうやってふたりを追いかけるか――？

考えをめぐらせはじめた俺の耳に。

「よし！ ならオレん船乗りなっ。ターリエットまでチョッパヤで連れてってやるよ」

「……は？」

飛びこんできたあまりに予想外な申し出は、もちろんザノリスのもの。

「なんでオレがあんなちいせえ船乗ってると思ってんだ？ スピードを稼ぐために決まってるんだろ！ もともとこれから大陸内部のほうに向かう予定だったしな。ほらっ、さっさと行こうぜ！」

荷物を持っていないのをいいことに、右手で俺の腕を掴み、左手でラトゥナの腕を掴んだ。

そうしてそのままぐいぐいと歩いてゆく。

正直言って、それはありがたい申し出なのだ。

しかしここで簡単に頼ってしまうわけにいかないのは、ザノリス側にかかる負担があまりにも大きいから。

魔女に目をつけられるかもしれないし、それ以前に〈魔女の子〉である俺を乗せることで、荷運びの仕事が減ってしまうかもしれない。

「おい、ザノリスっ？」

半分引きずられるようにして歩きながら声をかけると、ザノリスは前を向いたまま。

「あんたが〈人喰い〉で〈人殺し〉だったことくらい、顔を見ればわかるんだよ」

「――！」

「だが今は、違うんだろ？ まだ手が汚れているなら、そんなお嬢ちゃんと手を繋げるはずがない。だからオレは大丈夫だと確信したんだ」

セリフの最後だけ、こちらを振り返って片目をつむった。

「――そうか、おまえが確認しにきたのは」

ふたりのことではなく、俺が「本当に安全な男であるのかどうか」だったのだ。

そうして、ナーディロール号で留守番をしていたメディックとも合流した俺たちは、さっそくターリエットに向かって出発した。

通常的大型船なら一週間はかかる道のりを、この小型船はわずか三日でゆけるといふ。

狭い運河でも前の船を追い越すことができるのが最大の特長で、運ぶ量よりも速さを重視する

客に重宝がられているそうだ。

「のう、おまえさんが捜している子どもの名前、なんていうんだい？」

ネラの港を出て少し経ったあたりで、メディックが何気なく訊いてきた。

俺は少し迷ったが、変わらないふたりの態度に感謝をこめて。

「リノ、だ」

本当のことを答えたら、横で聞いていたザノリスが手に持っていた飲みものを落とした。

「なにやってんだっ？ ザノリス」

「あっ、すまん！」

新聞を読んだザノリスは気づいたのだろう。

それでもやはり、黙っていてくれるつもりのようで。

「リノか……オレの名前のなかにもいるなあ。クローギがオレを見てそいつのこと思い出したのって、もしかしてそのせいかな？」

おどけたように笑った。

「どうだかな」

応えながら、俺は考える。

(ザノリスの、まだ幼さの残る笑顔でリノを思い出した)

でもそこに見えていたのは、きっと笑顔そのものではなく――やはり、さみしきなのだろう。

ザノリスも父親を亡くしている。

かわりのような人はそばにいても、完全にかわりになどなれはしないのだ。

それでも、笑っているから。

前に進もうとしているから。

似ていると、思ってしまったのだろう。

(リノ――)

やはりローノアードを救うために、ターリエットを目指したのだろうか？

そのせいでシェロニアの運命が決まってしまうとしても？

それともローノアードを助けたら、自分もターリエットを脱出するつもりなのか。

大陸議会が始まる前にそれができれば、もしかしたら議会が延びることもあるかもしれないが……期待しているのは、魔女の手？

それとも俺の？

――もしもそうなら、やはり嬉しい。

俺に償うチャンスを与えてくれるというのなら。

期待に答えたいと思うし、心配そうな顔を見せているラトゥナだって、なんとかしてやりたかった。

予定どおり三日後、無事にターリエットへとたどりついた俺たちは、その入口に立っていた。

「ターリエットは巨大な塔さ。入口以外に人が出入りできるような隙間はない。つまり、他のやつらに見つからないようリノに会うってのは無理ってことだ」

ザノリスにそう言われていたように、見あげる塔の側面には窓らしきものはひとつもない。

金属製の堅そうな壁だけがなめらかな曲面を描いていて、ものを引っかけられる場所さえないようだった。

ただ、気になるのは。

(引っ掻き傷か？ あれは)

目のいい俺だからわかるが、かなり高い位置に獣の爪痕のようなものが見えた。

以前魔物にでも襲われたことがあるのか。

そんなことを考えながらひたすらに見あげていると。

「オヌリ・リノ・イナァカン・オノック？」

きゅっと、俺の手を握りしめたラトゥナが訊いてくる。

おそらく「このなかにリノがいるのか？」とでも訊いているのだろう。

そう予想した俺はこくりとうなずき。

「ああ。だから――正面から、行くぞ」

言葉とともに覚悟をつくって、さらに一步前へ。

玄関に見張りなどはおらず、壁と同化した扉にノッカーがついていた。

それを鳴らしてみる。

「――誰だ？」

待つこと数秒、扉の向こうから直接、誰かの問いかけが聞こえてきた。

「シェロニアの者だ。リノソトスの忘れものを届けにきた」

「なに？」

こうして訪ねてくる者が珍しいのか、扉の向こうの男は驚きの色を含んだ声をあげる。

「〈ハーレイオンの剣〉と、ラトゥナだ。そういえばわかるだろう」

「――!? ちょっと、ちょっと待ってろ！」

言いおわると、走り去る男の足音が聞こえた。

(この反応……)

剣のことはもう、ターリエットにも伝わっていると考えて間違いないようだ。

それはつまり、リノに直接渡さなければ奪われてしまう可能性があるということ。

ターリエットはどの国に対しても中立な立場を取る、大陸を平和に保つための機関であり、原則的には持ち主がはっきりしているものを勝手に奪ったりはしない。

だが、ローノアードを使った脅しをかけてくるほど余裕のない今、どこまでその原則を守ってくるのか疑問だった。

「ラトゥナ」

名を呼んでそばにしゃがむと、俺が預かっていた剣を返す。

「リノ、リノに渡すんだぞ」

あのときと同じように、くり返しながら。

するとラトゥナはちゃんと理解してくれたのか、やっと会えるとわかったのか、嬉しそうな笑顔で深くうなずいてくれた。

両手で抱くようにして剣を持つラトゥナを入口の正面に立たせ、俺はその後ろに背中あわせに立つ。

もしも本当にリノが出てきたら、こちらに近づいて剣を手にする配慮だった。

(わざわざ置いていったものを、なぜ届けにきたんだと怒るか?)

それともそこに、逃げ出すチャンスを見出すか?

きっとそばにいるのだろう魔女は、どう出る?

ある意味、すべてが賭けだった。

やがて聞こえてくる、複数の足音。

金属同士擦れあうような音。

キィと高い音を伴って、扉があいた。

周りの風が動いたから、後ろを向いている俺にもわかった。

そして――

「ラトゥナ!? ほんとに来ちゃったのっ?」

聞こえたのは、確かにリノの声。

「リノ……リノ!」

俺の背中から離れて、ラトゥナが走り出す。

おそらくリノは、それを抱きとめたのだろう。

また金属の音がした。

もしかしたら、足枷でもつけられているのかもしれない。

振り返れないのがもどかしい。

すすり泣くラトゥナの声の隙間から。

「ねえ」

呼びかけられたのは、俺なのか。

「ありがとう、剣を持ってきてくれて」

まだ俺の名を知らないリノは、決して呼ばない。

呼べない――はずだった。

「ん!? きみはクローギ? クローギじゃないか!」

かわりのように、リノ以外の者が俺の名を呼び。

聞き覚えのあるその声に呼応して、リノも。

「クローギ? それがあなたの名前なの?」

(あ――!?)

名を呼ばれた瞬間。

俺のなかで、なにかがゆっくりと〈外れた〉ような気が、した――。

眠るかわりにミシュルを飛び出した僕らは、長時間馬に乗ることがほとんどなかったせいか、隣の町へとたどりつく前に限界を迎えてしまった。

疲れと、高くなってきた太陽のあたたかい光が眠気を誘ってきて、油断すると落馬しそうになるのだ。

ラトゥナが僕の服を掴む手も、どこかよわよわしい。

「ラトゥナ、ちょっと休もうか」

腕のなかのラトゥナに声をかけて、僕は馬の足取りを調節する。

(どうせ、テアルーさんたちは追いかけてなんかこないだろうし)

リーズがうまく言ってくれるはずだ。

だってこれは、リーズの意味でもあるのだから。

森のなかを蛇行するように伸びている道の途中で、馬をおりた。

馬も休ませられるように、近くに小川でもないかと耳を澄ませてみると、さいわい道から少しはずれた方角から聞こえてくる音があった。

「ラトゥナ、向こうに、水！」

ラトゥナを振り返って、指を差して、わかりやすい単語だけで伝える。

すると「わかった～」と応えたラトゥナは、我先にといわんばかりに道のない木々のあいだに飛びこんでいった。

さっきまでぐったりしていたくせに。

(ほんとにわかったのかなあ)

最近のラトゥナはわかっていなくても「わかった」と応えるから、油断できない。

「あんまり走ったら危ないよ！」

足もとには縦横無尽に木の根がはびこっているのだ。

僕自身山で苦労したことを思い出しながら忠告してみても、聞こえているのかわからないのか、ラトゥナは気にしない様子で進んでいた。

レニティスの集団から離れられたことが、そんなに嬉しかったのか。

(あ！ そういえば、手紙……)

馬に乗る前に、ラトゥナが僕に渡してくれた手紙を思い出す。

しかしそのときは暗くて読めなかったから、腰の袋のなかにしまっておいたのだ。

ラトゥナを追いかける足をとめ、その手紙を取り出して広げてみる。

――リノソトスへ

馬を用意しているところをラトゥナに見つかり、こんなことになってしまった。ごまかすのは簡単じゃったが、ラトゥナの昔からの夢を知っているだけに、ごまかしきれんかったよ。実をいうとラトゥナは、ずっと〈外の世界〉に憧れていたのじゃ。レニティスの外の暮らしに。そのために踊りをがんばっておったが、亡くなった男児の分も自分を大切にしてくれる両親には、どう

しても話すことができんかったようじゃ。大陸語(ヘレンディア)を早く覚えようとする、テアルーが不審がることもあっての、じゃからわざと覚えんかった。逆にテアルーが心配するくらいにな。しかしまあ、「絶対にラトゥナを連れてゆけ」とは、もちろん言わん。連れてゆくも置いてゆくもおぬしの自由じゃ。ただもし連れてゆくなら、いつかラトゥナに伝えておくれ。「いつでも戻っておいで」と。スーフォニア語(スーフォネルト)には文字がないので、ラトゥナに手紙は残せないのじゃ。頼んだぞ。ラトリーズー

そこには〈答え〉が、書かれていた。

(夢——か)

その言葉の重みが、僕の胸に甘くのしかかる。

「リノ、歌う。わたし、踊る」

ラトゥナが告げた続きには、その単語が確かにあった。

だから僕は断れなかったのだ。

ラトゥナを馬からおろせなかった。

(レニティスの外で、僕の歌にあわせ踊るのがラトゥナの夢だというのなら)

いつか向かいあえなくなる日が来ても、僕の隣で踊ってくれるというならば。

「断る理由が、ないよね？」

ラトゥナがそばにいないのをいいことに、胸もとの鳥に問いかけた。

答えはない。

答えがないのが答え。

だから僕は、前に進める。

「リノーっ」

小川を見つけたのか、ラトゥナが僕を呼ぶ声がする。

「今行く！」

叫び返してから、手綱を引いて馬と一緒に歩いていった。

——そうして森の途中で十分に休憩しすぎたせいか、やっと隣の町にたどりついた頃にはもう陽はだいぶ傾いていた。

(夜はどうしようかな……)

僕ひとりであれば、数週間のレニティス生活でだいぶ慣れたから、野宿でもなんとかなりそうだったけれど。

ラトゥナが一緒だとさすがにそうもいかない。

しかし僕が今持っているお金は、テアルーさんたちの仕事を手伝ったときの駄賃くらいで、とても宿に一泊できる金額とは思えなかった。

右手では馬の綱を引き、左手はラトゥナと繋いで、とりあえず町のなかを歩いてみる。

ここは港町のように、この時間にも港にはまだ人があふれていた。

同じように活気に満ちた港があった、シェロニアを思い出して少し切なくなる。

「リノ」

「えっ？」

不意に名を呼ばれてラトゥナを見ると、くりりとした目をこちらに向けて。

「ラトゥナ、踊る、踊る！」

踊りたくてたまらないというように、その場で足踏みをした。

「あっ、そうか」

これだけ人がいるなら、ラトゥナの踊りでお金を集められるのだ。

それは立派な芸であり職なのだと、僕はちゃんと学んでいた。

踊って目立ってしまったら、剣を狙っているやつらに見つかるかもしれないという心配もないわけではないけれど、そんなことを言っていたらなにもできない。

これだけ人が多ければ大丈夫だろうと、高を括ることにする。

「……いいよ、ラトゥナ。ここで踊ろうか！」

レニティスの輪を離れた僕らの、最初の舞台だ。

僕はそばにあった、多分本来は船を繋いでおくのだから杭に馬を繋ぐと、リーズの手紙を利用しちいさな入れものをつくって、ラトゥナの前に置いた。

強い海風に飛ばされないよう、なかに少しの石を入れて。

そうしてラトゥナの斜め後ろに立ち、準備は完了だ。

(最初の一音が、肝心だ)

まだレニティスたちの前でしか披露したことがないのだと、今さら気づいたけどもう遅い。

人をまず振り向かせるためには、僕の歌が必要なことから。

せめて遠くまで届くように、大声を張りあげた。

「アラーケロット・オニティウキリアット・アギロドゥ・オユラミジャァ〜！」

歌による前口上。

忙しそうに荷物運びをしていた何人かが、こちらを振り返る。

すかさずラトゥナがその場でお辞儀をし、年齢のわりに長い手足をすらりと広げた。

ラトゥナの服装は、レニティスの女性たちがよく着ているような、二枚の布を繋ぎあわせたシャツにロングスカート。

そして目の粗いショールを羽織っている。

本来ならばこうして、人の前に立って踊るような格好ではなかった。

けれどラトゥナは、僕の歌にあわせそのショールをうまく使って踊りはじめる。

裾の長いスカートの端からは色っぽく脚を出し、それはまさに目の覚めるような踊りだった。

一度動き出してしまえば、どんな服装だろうと魅力的なものに変わってしまうのだ。

一曲が終わる頃には人垣ができていて、置いていたちいさな入れものにもかなりのコインが入っていた。

口笛や拍手が飛び交い、僕らをたたえてくれる。

大成功だ。

「ありがとうございました！」

僕が見てくれた人たちに向かって告げたら、ラトゥナも慌てた様子で。

「たっ！」

だけつけ加えたから、拍手が笑いに変わった。

(ラトゥナ.....)

ちょっと恥ずかしかったけど、頑張ってくれたから怒らないことにしよう。

ラトゥナ自身も、踊っているときは全然平気そうだったのに、さすがに自分が笑われているのだとわかっているのか顔を赤らめていた。

一度移動したほうがいいかな？ と、置いていた入れものを拾いあげながら考えていると。

「やぁお嬢さんたち、若いのにいい芸を持ってるね」

誰かに声をかけられて、僕は顔をあげた。

すぐそばに、初老というには少し早いぐらいの男性がひとり、立っていた。

「ありがとうございます」

僕が応えると、今度のラトゥナは口をひらかず、頭だけぺこりとさげた。

しかしその仕草がやけにかわいかったせいか、その男性がちいさく笑ったから。

「エドナン・オヌアラウ〜っ？」

口をとがらせたラトゥナがなにか言った。

口調も、明らかに怒っていた。

「ああ、ごめんごめん、笑ったことを怒っているのかい？」

「多分.....」

僕にも正確なことは言えないから、そう答えておいた。

すると男性は、困ったように目を細めて。

「よかったらうちの酒場で踊ってもらおうと思ったんだが、無理かな？」

それは予想外な申し出だった。

「え.....酒場に舞台があるんですか？」

「舞台と呼べるほど大きいわけじゃないがね。どうだい？ お嬢さんの機嫌さえよければ、頼みたいんだ。踊ってくれたら酒場の二階の宿に泊めてあげるよ」

「――！」

予想外だけど、願ってもないことだ。

「？ ？」

僕らの会話が理解できないラトゥナは思い切り首をかしげていたけど、僕の表情を見てなにかいいことがあったんだと読み取ったようだった。

ぱっと両手を上にあげると。

「やったー！」

突拍子もなくそんなことを口にする。

(ラトゥナ.....)

せっかく覚えた大陸語を使ってみたいんだろうけど。

また笑われて、また不機嫌になったことは、言うまでもない。

それでも、僕が向かおうとする場所にラトゥナがついてこないわけはなく。

案内された酒場に入って、ちいさな舞台を目にしたラトゥナはなにをしにきたのかちゃんと理解したらしい。

自ら走って行って舞台のまんなかに進み出ると、くるり一回転して華麗に礼をした。

それだけで、すでにかなりお酒が入っているであろうお客さんのあいだから歓声があく。

(酒場かあ)

まだ子どもと呼べる年齢である僕にはなじみのない場所だ。

でもあの人なら、こういうところに入りしりしているんだらうか？

父やローノアードは酒場なんか行きそうにないから、金細工の鳥をくれた人を思い出した。

もしかして先まわりしてくれてはいないかと、扉近くから客席を見まわしてみても、さすがに見つからない。

剣が僕のもとに戻ってきたメフィナからあと、あの人存在を確認できる出来事はなにも起こってはいないけれど。

ときおり感じる視線は、魔女のものでありあの人のものであるのだらうと、僕は決めていた。

だからいつ見られても、恥ずかしくないように。

顔をあげて前に進もうと。

「リノー！」

待ちくたびれたのだらう、舞台上からラトゥナが僕を呼んだ。

いくらレニティスの輪から外に出たかったといっても、ラトゥナだってさみしくないわけはないのに。

そんな様子を微塵も見せないラトゥナは、実はとても強い子なのかもしれない。

ラトゥナに近づいていくと、僕も舞台上にあがった。

さっきまではまっ平らな地面の上で踊っていたから、それに比べればちいさくても立派な舞台がある分やりやすかった。

舞台の前には、最初からご祝儀用のカゴも置いてある。

(よーしっ、やるぞ！)

心のなかで気合を入れて、僕はもう一度歌い出した。

まだ一曲しか覚えていないから同じ曲だけど、さっきとは違うお客さんだから恥ずかしくない。

僕の歌にあわせて踊り出すラトゥナは、さっきよりもさらに大胆だ。

普段はむしろ子どもっぽいのに、踊ればこんなに色っぽくなるのが本当に不思議。

まるでテアルーさんが乗り移ったかのような腰の動き、足の運びは、ともすれば歌う僕を目まで釘づけにしてしまう。

そうなるとリズムが狂ってしまったりするから、あんまり見ないようにしたいのだけど……困ったことに、無理だった。

今日のラトゥナは、どうしても目で追いたくなってしまう。

いつになく魅力的なラトゥナ。

――だけど、そんなラトゥナよりもはるかに魅力的なものを、僕は目にしてしまった。

ラトゥナの踊りのせいではなく、お客さんたちがざわついた。

そこでやっとラトゥナから目を放せた僕は、お客さんたちが顔を向けている方向を見やっ
—思わず歌をやめる。

(なっ……!?)

扉から入ってきたのは、僕が求めてやまなかった魔女だった。

黒のロングドレスは胸もとが大きくひらいていて、男性たちの視線をこれでもかというほど
さらっている。

歩く姿はどこまでも優雅で、繊細で、たおやかで。

僕だって相手が魔女だと知らなければ、違う意味で見入っていたのかもしれない。

魔女はまっすぐに僕を見据えながら、こちらに近づいてくる。

「どうして、あなたが—」

呟いた僕に反応したのは、僕が歌をやめたせいで踊りもやめざるをえなかったラトゥナだった

。
ラトゥナがこちらを振り返り、首をかしげた、瞬間。

「きゃ……っ」

ちいさな悲鳴が聞こえた。

そう理解したときには、視界のなかからラトゥナが消えていた。

僕に捉えられたのは、扉から出ていく魔女の長い髪先。

ひらりと、視線をかわすように。

「っラトゥナ！」

魔女に連れていかれた。

守らねばならないラトゥナを。

リーズから預かった、大切なものを。

僕がそばにいたから、魔女が手を出した！

それは明らかに僕のせいだった。

追いかける足に、戸惑いはない。

完全に動きをとめているお客さんたちのあいだを抜けて、酒場を出る。

出るとそこにはまだ、魔女の姿が見えた。

僕を誘うために速度を落としているのか？

それが罠だとしても—僕は行くしかない。

夜も深まりすっかり冷たくなった海風を頬に受けながら、走る。

魔女との距離は縮まらないまま、夕方にいた港のほうまで戻ってきてしまった。

夜に出港する船もあるせいか、灯りは多くついているものの、人影はほとんどなく静まり返っ
ている。

深夜の厨房みたいな、妙な怖さがあった。

(――！)

港の端で、徐々に魔女との距離が縮まる。

魔女が足をとめているのだ。

まるですべるように移動していた魔女は、まったく疲れた様子もなく、両手で気を失っているらしいラトゥナを抱え、涼しげな顔で僕を見返す。

対する僕は肩で息をされていて、魔女を睨んでやる余裕すらない。

それでも、弾む息の隙間から。

「ラトゥナを……返して……っ」

言ってやると、魔女の唇が少し笑った。

それから一歩ずつ、踏みしめるようにゆっくりと、僕に近づいてきて――

「驚かせたお詫びに、〈明日の目〉をあげる」

過去に何度かしたように、かがんで僕に顔を近づけてきた。

きっとまた、呪いをかけようとしているのだ。

(逃げなきゃ……！)

これ以上の呪いは、いらぬ。

他の人を苦しめる羽目になる呪いなら。

そんな呪いをくれる魔女は、好きになんてなれない。

――わかってはいるのに、足が動かなかった。

反射的につむってしまった目蓋の上に、やわらかな感触が訪れる。

このキスは。

このぬくもりは。

どうして僕が望んだものじゃないんだろう。

次は一体どんな運命を引き寄せる――？

戸惑いながらも考える僕の脳裏に、ひとつの場面がよぎった。

(え……)

それはこの港。

まだ太陽が低い時間帯。

運河から入港してくる船に、飛び交う紙。

それはどうやら新聞らしい。

もっとよく見たいと眉をひそめると、閉じた目蓋の裏にその内容が映し出された。

これも魔女の仕業なのだろうか。

そしてその、内容は――

「なに、これ……」

無意識に、口からこぼれていた。

(僕がターリエットに向かわなければ、ローノを殺すって？)

大陸議会までに、戻らねば。

ローノが僕の罪を、かわりに償うという。

そんな理屈ってない。

僕が戻ればシェロニアは失われる。

つまりこれは、〈ローノの命〉と〈シェロニアの存続〉を秤にかけるということ。

誰も犯していない罪を、償わねばならないということ。

「こんなことって……」

その内容を見ているのが嫌で、僕は目をあけた。

魔女は相変わらずラトゥナを抱えたまま、一步離れた正面に立っていて。

笑う、唇。

(でも違う)

このターリエットの結論に、きっと魔女は関与していない。

この魔女はそういう罫は仕掛けない。

だって僕は、魔女を信頼している。

何度でも言おう。

僕は魔女を疑いながらも、信頼しているから。

まっすぐに見つめ返していると、不意に視界を遮るものが現れた。

最初は光。

けれど徐々に明確な輪郭を示していき、やがて紙になった。

もしやさっき脳裏で見た紙なのかと手を伸ばして掴んでみるけれど、違った。

それはもっとちいさいものだった。

「あ……っ」

手紙だ。

ちょうど灯りの届く範囲にいたから、その場で読むことができた。

――リノへ

宿は借りておいた。シャロット通りにあるアンフィル・セターリカという宿だ。その辺の人に訊けば場所を教えてくれるだろう。ひげ面の、一見怖そうな主人だが信用できる。安心して泊まるといい。代金はおまえたちが酒場で稼いだなかから出しておいた。残りは主人に預けてあるから宿で受け取ってく――

リーズの手紙とは違い、終わりに名前はない。

名前がないどころか、途中で終わっていた。

書きおわる前に魔女に取りあげられたのだろうか。

その場面を勝手に想像して僕は、まったくもってそんな場合じゃないのに笑ってしまう。

(やっぱり、ここに来てたんだ)

そしてこの文面だと、僕らが宿をなんとかしようと思っていたことに気づいていたのだろうか。

酒場の男性が宿に泊めてくれると言っていたのは、もしかして罫だった？

(――！)

でも、だとしたら。

ラトゥナをさらった魔女は。

僕をそこから連れ出した、この魔女は。

一体、誰の、味方なのか？

「彼をまくためにどうすればいいのか、わかるわね？」

見据えた先の魔女が、笑顔のまま口をひらいた。

その艶っぽい声音も、男を誘うためのもの。

「あなたが、手伝ってくれるの？」

「まだ僕に味方してくれるのか」と、問いかけてみると。

「私が手伝うのは、喜べることだけよ」

「あなたが喜ぶこととは？」

また問いを返したら、魔女の表情から笑みが消えた。

呪文のように、ゆっくりと唇が動く。

「彼の愛を、私にくれたら」

「……っ」

今度は返せなかった。

それが謎かけなのか、本心なのか、僕にはわからないから。

(魔女が愛していたのは、あの人なの？)

それなら納得できることもたくさんある。

そもそも僕にちょっかいを出してきたのだって、あの子の気を惹くためだったのかもしれない

。

僕を助けてくれたのだって――？

最初から、すべてが罠だったのか。

わからない。

そんなこと、僕にわかるはずもない。

――それでも。

魔女があの人を喜ばせたいなら。

目的がそれ〈だけ〉なら。

僕にも、わかる答えがある。

そらしかけた瞳を、こらえて。

「それなら、僕に協力すればいい」

(そうしたらあの子は、きっと喜んでくれるよ？)

うぬぼれでもなんでもなく、僕は本気でそう思った。

すると魔女は――僕の前で初めて、大声を出して笑ったのだった。

それがさも「大陸―おかしな茶番だ」と、言わんばかりに。

そして魔女がやっと笑いおえた頃、三人であの子が用意してくれた宿へと向かった。

馬は魔女がそばまで呼び戻してくれた。

ラトゥナはまだ気を失ったままだけど、魔女の説明をうまくできそうにないからそのほうが都合よかった。

歩いているあいだ、魔女はなぜか上機嫌で周囲に笑顔を振りまいていた。

おかげですれ違う人々がみんな魔女を振り返って大変だ。

酒場でもそうだったけれど、みんな〈魔女の存在〉は知っていても実物は見たことがないから、全然気づかないのだ。

でも考えてみれば、僕だって魔女を魔女と認識したのは目蓋へのキスのせいだった。

先にその姿を目にしていたら、信じられなかったかもしれない。

きっと僕が最初にかけられた呪いは、魔女を正しく認識するためのものだったんだろう。

宿につくと、手紙にあったようにひげ面の主人が迎えてくれた。

三人いたことに驚いたようだったけど、魔女が自分は泊まらずに帰ることを告げると、なにかを悟った様子で何度もうなずいていたのだった。

魔女は、用意されていた部屋までラトゥナを運んでくれた。

さらにベッドに寝かせて、顔にかかった髪を払ってあげている。

そのやさしい手つきに、悪意は少しも感じられない。

「子どもは、好き？」

「子どもは不味いから喰いたくない」と、魔女の空間であの人が言っていたことを思い出して問いかけてみた。

すると魔女は手をとめて。

「彼以外は好きじゃない」

こちらを見ないまま――感情のこもらない声で、答えた。

相変わらず、本心かどうかは読み取れない。

「じゃあ僕も、嫌いなんだね」

自嘲気味に笑いながら言ってみたら、意外にも魔女は驚いたようにこちらを見て。

「あんたは――わからない」

「え？」

「好き嫌いの範疇の、外側にいるから」

魔女は明らかに動揺していた。

それを目にした僕も、動揺していた。

「なんで……」

「それは私にもわからない。彼のせいかもしれないし、そうじゃないかもしれない」

「……………」

(魔女にとって僕は、特別な存在だというのは?)

好きでも嫌いでもないけど。

僕を〈違う〉と、判断してくれるのか。

他の人間とは違うと。

〈僕〉という存在の意味を、見出してくれるのか。

あの人や、父と同じように……！

「――僕を、ターリエットに連れて行って」

告げたら、魔女はラトゥナから手を離して、まっすぐに立ちあがった。

「あなたならできるでしょう？」

続けた僕に、魔女は。

「シェロニアが消えれば、彼はかなしむ」

「消させない。僕は、そのために戻るんじゃない」

「どちらも救えるほど、あんたの手は大きかったかしら？」

笑いを含んだ声は、しかしきっと僕をバカにしたものではない。

今ならそれが、わかる。

「だって僕の手だけが、そこにあるわけじゃないから」

「――！」

無意識に、胸のなかの鳥を握りしめた。

僕のこのちいさな手を、支えてくれる手は確かに存在するのだ。

僕がそれを、忘れない限り。

間違いなくそこにいるのだと、あの人言った。

だから僕は、いくらでも頑張れる。

「あの人に手紙を残していくよ。お願いだから、それは消さないで」

言いながら、僕は初めて自分から、魔女に近づいた。

このままじゃ届かないから、ベッドの上にあがって魔女の顔に近づく。

魔女はまっすぐに僕を見返し、そして瞳が、うなずいたように思えた。

だから――「ありがとう」と。

僕も魔女の目蓋にキスをした。

不思議と魔女は、それをよけずに受けとめた。

受けとめてくれた。

(ありがとう)

多分僕は、「好きだ」と言われるよりも嬉しかったんだ。

会ったらきっと、怒られるのだろう。

もしかしたら、呪いのせいで向かいあえないかもしれない。

そんな覚悟と期待(?)はしていた。

「――なぜ、来たのです？」

だから開口一番、思い切り目をあわせて、思い切り冷たい口調でそんなふうに言われて、僕はつい笑ってしまったのだった。

「笑いごとですか！」

そこをまた叱られて、自分で口もとを隠す。

「ごめん。ごめんなさい。だってローノが、あまりにも予想どおりなこと言うから……」

「怒られるとわかっていて来たのですか？ あなたにそんな度胸があったとは驚きです」

(ああ――)

久々に耳にしたローノの憎まれ口が、こんなにも嬉しいのはなぜだろう？

すべての言葉は本気などではなく、生来のやさしさから出ているものなのだと。

真に国を想うからこそなのだと。

やっとわかるようになった僕は、以前ほどローノが嫌いではなくなっていた。

僕がただ微笑んで返すと、一歩離れた位置から僕を見おろしているローノは、意外そうに目を大きく見ひらいた。

それからひとつ、ゆっくりと息を吐き出して。

「……少しは、成長したようですね」

どこかさみしそうに笑って、僕から目をそらす。

なんとなく、僕もその視線を追いかけて顔を動かした。

そこには壁に備えつけられた丸い窓があって、外の風景を映し出していた。

――といっても、今僕らがいるこの部屋は五階にあるため、もっと窓に近づかなければ空しか見えないのだけど。

そう、魔女の力を借りてターリエットまで飛んできた僕は、塔の住人たちによって賓客としてあたたかく迎え入れられたのだ。

とりあえず大陸議会が終わるまでのあいだの滞在を許され、この、少なくとも僕の自室よりもはるかに豪華な部屋を与えられた。

――けれど。

右の足首には重い枷が、しっかりとめられてしまった。

そこから繋がる鎖は、塔の最上階まで続いているという。

その話が本当かどうかはわからないけれど、ただ僕が「逃げ出す可能性がある」と思われていることだけは確かだった。

僕とは違って繋がれていないローノは。

「私の日記は、見ましたか？」

そう告げたあと、僕の答えを待たずに再びこちらを振り返った。

しかし僕とは視線をあわせず、その瞳が捉えているのは足枷のようだった。

「あなたは、なにものにも繋がれる必要のない存在だった。私の命も、国の未来も、考えずともよかったです」

(ローノ……)

それからやっと、僕と目をあわせて。

「なぜ、なんのために。みなあなたのことを名前と呼んでいたと思っているのですか」

「……うん」

実のところ僕は、王子としてシェロニア城にいた頃、自分の名を呼ばれることがあまり好きではなかった。

誰もかれもが僕を「王子」と呼ばずに「リノソトス」と呼んでいたから。

王子という立場以上の価値などない僕なのに、その立場すら否定されているような気がして、嫌だったのだ。

「『うん』って、それはどういう返事ですかっ？」

呆れた声音で返すローノは、僕がからかっているとでも思っているようだった。

眉間には深い縦じわが刻まれている。

その表情も久しぶりで、見ることができて嬉しいと言ったら、ローノは怒るだろうか？

「ちゃんとわかってるって意味だよ。今、は」

苦笑交じりに答えてから、続ける。

「僕を王子と認めていなかったからじゃなくて……たとえ僕が王子でなくなっても、みんなが僕を呼べるように、でしょう？」

「――！」

その答えは、僕が初めてあの人を認識したそのときに、教えられた。

ともに囚われていた、あの魔女の空間で。

「王はな、きっと自分が長くないことを知っていたからこそ、おまえをそばにおかなかつたんだろ」

「もっと言えば、おまえになにも教えないのだって、おまえ自身に未来を選ばせるためなんじゃないのか？」

「そう、未来だ。必ずしもおまえが国を背負う必要はないと、そういうことだと思うがな」

告げていたあの人言葉には、ひとつの偽りも含まれていなかったのだ。

それは今ローノの言葉によって裏づけられ、答えとなって僕に降りそそぐ。

「でも――でもね、ローノ」

僕は座っていた椅子から立ちあがると、一步ローノのほうに近づいた。

がしゃりと、鎖の音が鳴る。

「僕は助けたいと思ってしまったんだ。ローノも、そして国も」

「リノソトスさま……っ!？」

「僕は諦めてないよ、ローノ。国から離れて多くのことを学んだ、学べた。離れてみて初めて、自分がどれほどみんなに愛されていたのか知ったんだ。だから、どれも失いたくない！」

そこまで言い切ったとき、不意に部屋のドアがあいた。

(あ……!)

入ってきたのは、僕の世話係に任命されているらしい男性だ。

ローノと同じくらいの歳に見えるけれど、ローノよりもはるかに有無を言わさない雰囲気をもっていた。

「今日の面会はそこまでだ」

「――わかりました」

ローノは感情を抑えた声で静かに応えると、僕に一礼してくるり背を向ける。

(ローノに会いたって言ったら、簡単に許可をくれたから覚悟していたけど)

そう長い時間はもらえないみたいだ。

明日の時間までに、訊きたいことをまとめておかなければ。

遠ざかるローノの背中を見送りながら、僕はそんなことを考えた。

――ついでに「ローノの長い髪がさらに伸びたな」とか、「あの歳でまだ背が伸びてるんじゃないか!？」なんてそんなことも。

ローノが完全に部屋から出てしまうと、乱入してきた男性もそのまま出ていった。

どうやらローノを連れ戻しにきただけのようだった。

広い空間に、ひとりになる。

すると思い出してしまうのはやはり、置いてきたラトゥナと剣のこと。

そして、あの人のこと。

椅子に座りなおして、僕は天井を仰いだ。

(ふたりはちゃんと合流できたかな)

そして僕を、捜しにきてくれるだろうか？

来てほしいのか、来てほしくないのか、実は僕にもわからない。

「ローノも国も助ける！」と息巻いたって、最良の方法を考えついているわけじゃない。

今の僕は、ただ――運命に、期待しているのだ。

いない神には期待できないから。

自分が動くことで、周りが動くことで、変わる運命に期待している。

これまで僕を支えてくれた、たくさんの手が。

操る糸はきっと、誰も予想できない奇跡を形づくるのではないかと。

(考えてみれば、最初からそうだった)

シェロニアが放棄されたことと、僕とあの人が魔女の空間にいたことは、本来なんの繋がりもない出来事のはずで。

でもそのふたつが同時に起こったからこそ、僕は今まで逃げることができたし、テアルーさんやラトゥナたちに会うことができた。

あの人や魔女との繋がりも、深まった。

それらは偶然の賜物であって、かつ、もし僕が自分から動いていなかったなら、交じりあうことのなかった運命なのだ。

そして――剣の、存在も。

「陛下があなたに自由を選ばせようとしたのは、〈ハーレイオンの剣〉のせいなのです」

翌日また部屋にやってきたローノは、自分からそう語り出した。

その淀みない口調から、ローノも僕に話しておきたいことをまとめてきたのだとわかったから、おとなしく聴いておくことにした。

「伝説の勇者の剣？ まさかローノまで、父さんが魔物退治してたって言うの？」

僕が切り返したら、ローノは意外そうに眉をあげて。

「ご自分でお調べになったのですか？ そのとおりですよ」

「えっ!？」

リーズが僕に語ってくれた予想は、どうやら当たっていたようだった。

「ですが、あれは物語のように魔物を斬るための剣ではありません。魔物が本来生息していた世界に帰すために、空間を斬る剣なのです」

大真面目な表情で、冗談みたいなことを口にするローノ。

魔物は魔女によって他の世界から召喚されているらしい――という噂は、確かに以前からあった。

少なくとも動物が突然変異した存在ではないと。

なぜなら、それにしてもあまりにも数が多すぎるからだ。

増える速度も。

「でもローノ、あの剣には剣身がないよ」

「目に見えないものを斬るのに、目に見える剣身が必要ですか？」

「あ……！」

そう言われると、納得してしまう。

僕はあの棒を一度も剣らしく振ったことがなかったけれど、もし振っていたらその力は表れていたのだろうか。

(そういえば、犬型の魔物がラトゥナを襲ったとき――)

噛みついた先にちょうどあの剣があったからか、魔物はなにもせず逃げ去った。

あれはもしかして、剣が自分をもとの世界に帰してくれるものだとわかって、それ以上襲わなかった？

「陛下は体調がすぐれず、また一国の王であることもあり、国の周囲に現れる魔物しか帰してやれないことを悔やんでおりました」

続けたローノの言葉に、僕はやっと気づく。

(ああ、だから)

「だから父さんは、僕が国を選ばなくてもかまわないって……」

大陸をめぐる魔物に苦しめられている人々を救うなら、それもいいと。

自分が果たすことのできなかった望みを、僕に託していたのか。

ローノは少しつらそうに目を細めると。

「そう。――本当は、私がかわりにその役をできればよかった。結局あなたがどちらを選んでも、その両肩に背負わされてしまう命の重さは変わらないのだから」

「ローノ……」

僕のことをそこまで考えてくれていたなんて、思わなかった。

ローノがなにに対しても一生懸命だったのは、決して僕の地位を奪うためなんかじゃなくて――

「しかしね、リノソトスさま。あの剣は、シェロニア王家の血筋でなければ使えないのですよ。今では伝説と謳われる〈勇者〉の、子孫でなければ」

「え――」

それはつまり、僕が〈そう〉だということ？

思わず動きをとめてしまった僕を、ローノは笑って。

「どういう原理でそうなっているのかは、さすがの私にもわかりません。ですが、あなたに使える私に使用できないことは、まぎれもない事実です」

まだ僕自身使用したことなどないのに、あたりまえのようにローノは言う。

以前の僕なら、きっと信じられなかつただろう。

「なんでそんなことわかるんだ」って、喰ってかかっていただろう。

でも、今は違う。

ローノは自分の経験から確信を持って告げているのだと、ちゃんとわかるから。

「でもローノ、あの剣を狙ってる人たちがいたんだけど」

「ああ、タフィレンやアテリスの人たちでしょう？ あれは陛下にしか使えないものなのだと何度言っても、貸してくれとうるさかったのですよ。ですから陛下も相当警戒しておりました。いつ襲われてもいいように水面下で準備を進めていたのも、そのためです」

「準備って、国を放棄する？」

「そして、国民に希望を失わせないために」

「ああ――」

「シェロニアの放棄は、国を捨てるという意味を持たないのだと。国を守り、いづれなにかを救うであろうひとりの少年を、守るためのものだと。そう国民に言い聞かせていたのです」

「そう、か……」

だからあの人は、それを知っていたのだ。

最初から、なにも知らないのは僕だけだった。

僕自身が耳をふさいで、目を閉じて。

自分のためにつくられていた世界を、自分のものではないと見ないようにしていたから。

(みんなはどうしようもないくらい、僕を信じてくれたのに……！)

気づくのが、あまりにも遅すぎた。

「今からでも、間にあうかな……？」

僕はなにかを、守れるのかな。

滲んできた涙がばれないように、下を向いたら落ちてしまった。

手を伸ばしたローノが、そっと、その雫を手のひらで受けとめて。

「終わってしまう前に、こうして受けとめればいいのです」

昨日は僕の発言に戸惑っていたふうだったローノが、今日は違っていた。

「ローノ？」

座っている僕の膝もとに屈みこみ、下から僕を見あげるようにして。

「あなたが諦めないと言うのなら、私も生きることを諦めません」

「――！」

「脱出する方法を、考えましょう」

「……うんっ」

ローノがやる気になってくれれば、いい案が浮かぶかもしれない。

心から期待して、ローノを見返した僕に待っていたものは。

「それで？ 〈ハーレイオンの剣〉はどこですか？ ターリエットに没収されたのでしたら、まずはそれを取り返さなければ」

「あ――」

奪われないためとはいえ、置いてきてしまったことを後悔した。

もしこの場にそれがあったなら、条件をつけてどうにでもできたかもしれないけれど。

まさか魔女に「ちょっと取ってきて」なんて、言えるわけがない。

(とりあえず今は、おとなしく怒られておこう)

僕はおそるおそる、口をひらいたのだった。

叱られ損というのは、まさしくこういうことをいうのだろう。

数日後、ターリエットの入り口で僕を待っていたのは、剣を手に行しているラトゥナと。

そして僕がそれらを預けてきた、〈あの人〉の後ろ姿だった。

「リノ……リノ！」

一緒にレニティスの一団を飛び出してきたのに、たった一日だけの旅で置いてきてしまったことを、もしかしたらラトゥナは怒っているかもしれないと思っていたけれど、そんな心配は無用だったようだ。

僕に向かって飛びこんでくるラトゥナを、両手で受けとめてやる。

足が動いたから、鎖ががしゃりと音を立てた。

しかしそれも、泣きだしたラトゥナの声にかき消される。

「ねえ」

その鳴き声の合間を縫って、僕はずっと会いたかった大きな背中に語りかけた。

「ありがとう、剣を持ってきてくれて」

けれどその背中が、なんの反応も示さない。

ラトゥナに話しかけていると思っているのだろうか？

(本当は、名前を呼びたいんだよ)

けれどまだ知らない——僕の、横から。

「——!? きみはクローギ? クローギじゃないか！」

(えっ!?)

告げたのは、一緒に下まで来ていたローノだった。

なぜローノが彼の名を知っているのか。

気にはなったけれど、それよりも——

「クローギ? それがあなたの名前なの？」

くり返すように、僕が再び問いかけると。

「——ああ、そうだ」

クローギはほんの少しだけ、顔を横に向け答えた。

答えてくれた。

その横顔も、低くてややかすれたその声も、本当に久しぶりだ。

自分勝手な僕のために、こんな場所まで追いかけてきてくれたのだ。

胸が熱くなる。

これは感動なのか？

それとも——魔女が求めている、〈喜び〉か。

「ん? クローギ、なぜこちらを向かない? まだリノソトスさまを見守っていてくれたことには感謝するが、その態度はあんまりじゃないか!？」

僕の瞳にかけられた呪いを知らないローノが、自分の感情に戸惑う僕の横を通りすぎ、クロー

ギに近づこうとした。

だから僕はとっさに手を伸ばして、それをとめようとしたのだけど。

「待ってローノっ、いいんだ、クロー……うわっ!？」

まだ腕のなかにラトゥナがいたことと、鎖に繋がれた右足を引きそびれたことが重なって、ラトゥナともども倒れそうになった。

せめてラトゥナをかばおうと、僕はとっさに身体を入れ替え、衝撃にそなえて目をつむる。

「――！」

そんな僕を襲ったのは、しかし衝撃ではなく、人のあたたかさ。

誰がかばってくれたのか、すぐに予想できた僕は目をひらけなかった。

「大丈夫ですかっ？ リノソトスさま」

「僕はいいから、ラトゥナを起こしてあげて」

珍しく素直に心配の色を示したローノに、そう告げた僕は自分で身体を起こすと、下敷きになってくれたクローギから少し離れた。

そして今度は僕から、背を向ける。

僕が目をひらけたのは、それからだ。

「リノソトスさま……？」

僕とクローギの置かれている状況がわからないローノは、眉間にしわを寄せて僕を見た。

(苦笑するしかないな)

きっとクローギは、魔法の呪いでまだ理由を話せないだろうから、ここは僕が話そう。

「ローノ、僕とクローギは〈喜の魔法〉の呪いを受けているんだ。だから、向きあえないし話せないこともある」

「――なんですかっ？」

不意に鋭さを増した声音に、驚いたラトゥナがローノのそばを離れ僕のところに戻ってきた。

「ローノ？」

僕もローノのそんな態度が気になって、視界にクローギを入れないようにちいさく身体の向きを変えると。

「あのとき交わした約束の、半分は守られていない、というわけか」

これまでとは打って変わった冷たい口調で、ローノが怒っているのはどうやらクローギに対してのようだった。

やはりふたりは以前から面識があったのか。

(でも、一体いつ?)

僕は魔法の空間でクローギと会うまで、その存在にすら気づかなかったというのに。

「……すまない」

謝るクローギの言葉には、僕も驚いてしまうほど気持ちがこもっていた。

それがラトゥナにも伝わったのだろうか。

「ごめんなさい！」

それに関しては関係のないはずのラトゥナがいきなり謝ったから、張りつめていた空気はあっ

さりと破られ、みんな笑い出してしまった。

「？ ？」

ラトゥナだけが、「なにがおかしいの？」というふうに首をかしげている。

その仕草がまたかわいくて、おかしい。

僕はなかなか笑いやめなかった。

(だって、嬉しかったから)

運命は確かに動いている。

僕の予想も希望も裏切り。

誰も先を読めない方向へと、動いているのだ。

〈ハーレイオンの剣〉が僕の手もとに戻ったら――僕ができることは、あとひとつ。

「ねえクローギ、ラトゥナ。よかったら、ふたりも大陸議会に参加してくれないかな？」

ターリエットで行われる大陸議会は、各国の代表と、それと同数のターリエットの住人によって行われる。

たとえ各国の代表たちが口裏をあわせてなにかを決めようとしても、議会参加人数の四分の三以上の賛成がなければ不可ということになっているのだ。

ターリエットの住人たちは基本的にターリエットから出ることなく暮らしていて、大陸の情勢をほとんど知らない。

逆にそのことによって、議会で語られる真実のみをもとに公正なる判断ができる、というわけだ。

僕が参加を要請したクローギとラトゥナは、議会の行われる塔の最上階へ入ることは許されたものの、投票権は与えられなかった。

――でも僕にとっては、そこにいてくれるだけで充分だった。

(それだけで、力になるから……！)

「僕は、シェロニアを一度、ターリエットに譲ろうと思います」

議会場の中央に備えつけられた発言台で、一字一句ゆっくりと告げた僕の周囲から、どよめきかわきおこる。

壁に沿って丸く備えつけられている椅子は、すべて人で埋まっていた。

まるで城のバルコニーからみんなの声を聞いていたときみたいだと思ったけど、残念ながら、今僕の耳に入ってくるもののなかには不満の声も混じっていた。

特に語尾を荒げているのは、シェロニアを所有する権利を持ったタフィレンとアテリスの代表者たちだ。

「理由は？」

この議会を仕切っている議長が、最奥の壇上から短く訊いてくる。

ターリエットの住人のなかから抽選で選ばれたというその少年は、きっと僕よりも年下なのだ

ろう。

けれど、さっきからしっかりと話を進めていたし、問題はないようだった。

(そう、この議会自体には、問題がないんだ)

あるのは――

僕は大きく息を吸って、答えた。

「ターリエットが、魔物に襲われないシェロニアの地を求めているからです」

「な……っ！」

何人か息を呑んだのは、すべてターリエット側の席の人だった。

(やっぱりそうなんだ……)

中立であるはずのターリエットが、なぜローノの命を懸けてまで僕を呼ぼうとしたのか？

ローノにその疑問を投げかけたとき、ローノはこう答えたのだ。

「それはシェロニアが、魔物たちにとって不可侵の地であるからです」、と。

そう、シェロニアが魔物に襲われないのは、実は周囲の環境のせいではなかった。

理由はただひとつ、そこに勇者の亡骸が埋まっていたから。

そして、その子孫たちの亡骸が。

(自分たちをもとの世界に戻してくれるのは誰だ？)

魔物たちはそれをきちんと理解していたのだと、父は言っていたらしい。

だから、魔物たちはシェロニアを襲わなかった。

襲ってしまったら父の機嫌を損ねて、帰してもらえないかもしれない。

ただ近づくにしたり、お互い穏便にすむはずがない、と。

僕らが思っているよりもずっと、魔物たちは知力を持っているという。

それでもなにもせず黙っていたのでは、魔物たちだって生きてゆけない。

また、人間のなかにもそういう性質を持った人がいるように、魔物のなかにもたんに暴れるのが好きという性質を持ったやつがいる。

たびたび町や人間が襲われるのはそのせいだ。

そしてだからこそ、ターリエットは強硬手段に出たのだった。

世界中で魔物の被害が多発しているなか、〈絶対魔物に襲われることのない場所〉を有しているのといないのとでは、各国に対する対応も違ってくる。

そしてタフィレンやアテリスが僕の命や剣を狙っていることを知り、早く手を打っておこうとしたのだろう。

(ターリエットだって、正直百パーセント信用できるわけじゃない)

でも、他の二国に比べたら、大陸全体のことを考えてくれる分だけましだった。

「そんなことで納得できるわけがなかろう!? 権利は我々にあるはずではないか！」

「そう、シェロニアを落としたのは間違いなく我ら。それを忘れてもらっては困るというものだ」

口々に声をあげる二国の代表者に、「静粛に！」と議長の制止が飛ぶ。

それから議長の少年は、僕を試すように目を細めると。

「――シェロニアの。我々ターリエットは、その者たちが言うようにそなたの国になにもしていない。それなのに譲るというからには、なにか条件があるのだろうか？」

実におとなびた問いを、投げかけてきた。

それは僕が、なによりも望んでいた言葉だった。

深く。

すべての想いを受けとめて、深く、うなずいてから僕は。

「そのあいだに僕が、この〈ハーレイオンの剣〉で、世界中の魔物を残さず向こうへ帰します。それができたら――シェロニアの国と民を、僕に返してください！」

一瞬静まり返った。

空間を、次に揺るがしたのは笑い声だった。

「そんなことできるわけがない」と。

「まさに絵に描いたような空事だ」と。

人々は口々に笑う。

けれど僕と向きあっている議長の少年だけは、どこまでも無表情で。

「アテリスの。言いたいことがあるなら立ちたまえ」

そう促すと、待ちきれない子どものように勢いよく立ちあがったアテリスの代表者が、まくしたてるように喋り出した。

「その剣があれば、確かにある程度の魔物は帰すことができよう。しかしな、『魔物をこちら側に呼んでいるのは魔女だ』という話があるのは、当然知っておろう？ つまり、魔物をいくら帰そうが、魔女をどうにかできない限り、魔物は何度でもこちらの世界にやってくる。追放された神よりも永くこの大陸に居座っている魔女らを、おぬしのような子どもが説得できると？ 案があるのなら喜んで聞こうじゃないか！」

「――その魔女のひとりが、こちらの仲間だと言ったら？」

「なにっ!？」

鋭く突き刺さる剣のように、冷静なクローギの言葉が議会場に響いた。

(クローギ……)

僕がその名を呼んだとき、口にかけてられた呪いはひとつ解けたかもしれないと、話していた。

魔女の空間ではなにも答えられなかったクローギが、今こうして僕に加勢する発言ができるのも、そのせいなのだろうか。

「〈魔女の子〉よ。発言を許そう」

議長は一体それをいつ知ったのか、その促しに再びあたりはざわめく。

しかしクローギ自身は、実に涼しい顔をして立ちあがると。

「俺たちは、魔女とともに旅をしていたと言っても過言ではない。なあ？ リノ。魔女の手にかかれれば、いびつな金細工の鳥ですら空を飛べるんだ」

そう告げながらクローギが指差したのは僕。

――いや、僕の胸もとの鳥だ！

(えっ!?)

まるでその〈呪文〉を待っていたかのように、金細工の鳥は鮮やかに光り出すと、美しい金の鳥に形を変えてふわり羽ばたいた。

人々の頭上を旋回し、羽を動かすたびに金色の粉が落ちる。

「こ、これっ、本物の金だぞ!？」

誰かが叫んだ。

これは手品などではなく、本当に〈魔女のいたずら〉なのだ、と。

そしてその鳥は、やがてクローギのほうへ飛んでいくと、その隣にいたラトゥナの肩にとまり――

「オイッシ・イン・ウオエオドゥ・エットゥ・オヌレッティ？」

多分ラトゥナは、その鳥に話しかけた。

とたんに、ラトゥナの身体も金色の光に包まれ、瞬時に発言台にいる僕の目の前へと移動する。

(ええっ!?)

あまりの出来事に、動きだせない僕をしり目に。

「あははっ」

ラトゥナは大きな口を開けて笑った。

笑って――鳥と踊り出した。

金色の粉を撒き散らしながら、それ以上の美しさで。

楽しそうに。

なにかを、〈喜ぶ〉ように。

「あの子は、スーフォニアか？」

「ああ、そうだ。あれはメリレスト独特の踊りだ！」

「世界中にいる彼女たちと、魔女も手を組むならば――」

踊るラトゥナの姿は、飛ぶ鳥と同じくらい、人の心を動かした。

確実に。

誠実に。

「――さあ、彼の提案を受け入れるか否か？ 採決を！」

鳴らされる鈴の音。

踊りつづけるラトゥナ。

それが僕らの、新しい旅の始まり――。

ひとつ目の呪いが解かれ。

直線は曲線へと変わり。

ふたりの運命は、再び、交わった。

なにかもが、私の思惑を外れてゆく。

思わず、手伝ってしまったくらいに。

「おまえが、魔物をすべて帰すことに関して最終的に協力してくれるなら、俺はおまえのことを好きになってもいい」

彼はそんなことを言って、私を喜ばせる。

(最終的に?)

途中では、どんな罠を仕掛けてもいいって?

それは彼なりの、精一杯の譲歩。

そして今、確かに存在している、信頼。

――嬉しい。

まだ好きになってもらっていないのに、もう喜んでしまった。

失くしていた感情を、取り戻してしまった。

私はどうなる?

醜い人間に、近づいてゆくのだろうか。

それともずっと前から、近づいていたのだろうか。

爪弾いたふたりの運命は、私にも、もうわからない。

ふたりのあいだを保つ、少女の運命も。

(なにひとつ、わからないから)

三人の旅の行く末を、見守ろう。

ときどき邪魔をして。

ときどき手を貸して。

彼の気を惹きながら。

恋

コイの罠を、仕掛けるの。

故意

さあ、お次は――?

(了)